

---

# 自閉中毒

水島牡丹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

自閉中毒

### 【Nコード】

N1101D

### 【作者名】

水島牡丹

### 【あらすじ】

高校三年に上がったばかりのエミは日々を退屈に過ごしていた。詰らない事ばかりの毎日。姉は失踪して行方不明、母親は姉の失踪を引きずって、学校は唯一の息抜きの場だ。そんな時に、エミは自閉症のミチルと出会う。ミチルとの出会いからエミの考え方は少しずつ変化していく。

## 【第1話】

ねえその貴方。

……そう貴方よ。

その陰気な顔をしてる貴方。

そうそう、そんなところでキョロキョロしてないでこっちに来てくれないかしら？

ちよつと質問したいことがあるのよ。

少しだけよ。ええ、本当に少しよ。宗教の勧誘じゃないわよ。失礼ね！

そうよ。私の制服を見れば宗教の勧誘じゃないのは分かるでしょ。全く愚かなんだから。

あッ！ 悪かったわ。行かないでよ。そうそうここに戻って来て。

でね、質問なんだけれど。私、以前から思っていたことがあるの。もし末期がんで医者に余命幾許かと宣告されたなら貴方はどうする？

抗がん剤を最後の死ぬ瞬間まで試す？

それとも痛みに耐えかねて自殺する？

またはモルヒネを打ってもらう？

え、私はどうするのかつて？

決まっているじゃない……。

もちろん、モルヒネ。

ガンガン打ってもらわよ？

今日の天気は極めて快晴。

雲一つ無い、まるで真夏のような暑さに見舞われた、春の終末。

窓硝子の外に見えるのは砂埃が散るグラウンドだ。砂埃は風だけが原因じゃない。体育の授業であるサッカーをする学生達が不必要なまでに埃を立てていたから、校舎の三階に隣接する、私が座っている窓際の席まで埃が舞いこんでくるのだ。私の席は窓際が一番後ろの席だった。一番、いい席なのだろうが、この埃だけは我慢ならない。

だからといって、窓を閉めるという選択肢は有り得なかった。今日は夏日なのだ。こうなれば早く授業から解放されるのを願うのみである。

ちらりと黒板の上にある白い時計に視線をやれば、針は午後二時付近を刺していた。終了のチャイムが鳴るまでまだまだ道のりは長い。何て退屈な授業なんだろう、と私はつい欠伸をした。埃も我慢できないが、この退屈な授業も拷問に等しい。教室では皆今年から受験生ということもあり、真剣な表情で黒板の数式を素早く写していた。今更やったっていきなり成績が上がるわけでもないだろうにやっただって落ちる奴は落ちるし、また今まで勉強してこなかった奴は二年分ものブランクがあるのだ。それを今年から一年かけて必死に埋めるくらいならば、最初から勉強しておけ、と思う。

その点、私は校内において成績優秀だった。

女子の中では私がトップだし、男子に一人だけ勝てない生徒がいるが、まあそれは仕方がない。その生徒は私と違って学業だけに専念しているようだし、高校生活をそれなりに楽しんでいる私とでは時間の配分も違うのだろう。

けど、私もその男子生徒と同様に帰宅部なのだから、きつと時間配分にそう違いはないかなとも思った。それでも偏差値の高い大学には余裕で入れる頭も持っているし、今更齷齪勉強しなくていいのはその他大勢の生徒たちよりも有利なことだった。勉強なんて詰らないが心底やっておいて良かったと思う。こうして優越感を抱けているだけでもその価値はあるというものだった。

私の友達であり、この学校の準リーダー的存在の紺野綾香も、勉

強をしなかったお莫迦さん組みの一人だった。可哀想に、と私は心の隅で同情し嘲った。嘲った理由としては、必死にノートを写しているのもその理由として十分だけど、もう一つある。綾香は準リーダーであって真のリーダーは私だったからだ。何も、リーダーとは生徒会長や委員長のことを指すのではない。あいつ等はただの雑用係だ。皆にその存在を認められ、仕切っているのはこの私と綾香だった。

もし気に入らない奴がいたらシメ、私にちゃんと媚を売ってくる奴はそれなりに可愛がつてやる、そういうリーダーの方だ。虐めの対象を決めるのも私の一存だし、標的を変更するのも私が決める。もちろん私の手は汚さずに、他人を操ってやらせる。けど、皆は気がついていないだろう、自分が私に操られているなんてことには。

人を操るテクニクはとても甘美なことで、その快楽に私は酔いしれている。でも、そろそろ受験という最大の邪魔が入るのは気に入らない。確か、中学の時もそうだった。受験を前になると学生はとにかく猫を被り始め、今まで散々莫迦にしていた教師どもに媚を売り私を蔑ろにします。それが気に食わないし、また愚かとしか言いがたい。

私はそうしない為に勉強し内申を強固なものとして、教師どもの目を完全に欺いているというのに、私の友達は何かだから目を付けられて事はだんだんとやりにくくなってきた。

退屈……。そろそろ聡子も潮時かな。

聡子というのは、このクラスで一番ドン臭く莫迦でブスな女子生徒だった。当然、最初の標的は私がソイツに定めた。クラスを仕切る最初の仕事として、クラスを纏めるために犠牲になってもらったのが聡子だったのだ。まず、ちょっとしたことで聡子のドン臭さをクラス中にアピールする。例えば、皆にバレないようちよつと背中を押してやって転ばせるとかだ。そして、次は友達の振りをして莫迦さを露呈してやると、あつという間に聡子の評価は地に落ちた。後はもう簡単だった。聡子にクラスの命運を分けるような重要な仕

事を任せ、それを私がこつそり妨害し、邪魔し、滅茶苦茶にして、その責任は聡子のせいにすればよかった。皆は聡子を言及し、聡子を邪魔者扱いすることだけに全勢力を使い出す。可哀想な聡子、あなたは何も悪くない。罪なのはただ、ドン臭いのと愚かでブスな容姿だけ。内心ほくそ笑みながら、私は聡子の待遇を庇い、そして最後に渋々と見せかけて奈落の底に突き落とした。

この過程を経てクラスは完全に纏まったのだ。

でも、それもそろそろ終わり……。

だんだんと聡子に対する皆の興味も薄れてきた頃だった。そろそろ次のターゲットを用意しなければクラスはまた分解してしまう。

私が聡子の後を引き継ぐ纏め役を考えだろそうとしたそのとき、

「こら、中曽根エミ！ ぼうつとしてないで、授業を聞けッ！」

数学の授業を進めていた教師が私のことを叱責した。はっと我に帰って、思考のギアを素早くチェンジした。悪のリーダーから優等生、中曽根エミに私は変わる。

「すみません、先生。昨日、徹夜したので」

へへと照れたように笑って、私は黒い頭髪を撫でた。信じられないことだが、この進学校で髪を染めるのは禁じられているのだ。そんな校則も守り続ける優等生の言葉を教師はいつも教師にとっても私にとっても都合のいい解釈をしてくれる。

「そうかぁ。中曽根は成績優秀だもんな。今年から受験で既に気合十分だな。けど、最初から飛ばしすぎもよくないぞ。あまり無理はしないようにな」

男性教師はいつも私に甘い。これが男子生徒の成績優秀者ならば軽い叱責くらいは飛んでいただろうが、特にこの数学教師、明石先生はエゴ彙屑も凄く激しく、女子と優秀な生徒とくれば何も言わないし、優遇さえする。

「すみません、先生」

こうして従順な振りさえしていれば、明石先生はイチコロだった。「では、次の問題を中曽根、君が解いてくれるかな？」

「はい、先生」

私はすつくと木製の椅子から立ち上げて、黒板に向かった。こうして指名されるのは何も罰としてではないし、今日が初めてでもない。ゆつたりと余裕のある歩調で黒板まで向かい、生徒の視線を一身に浴びる。この羨望の眼差しも快感としか言い表せない。何とも甘美で官能的な瞬間だ。私は白チョークを握り、黒板に答えを書いた。別に事前に解いていた問題ではないし、授業を聞いていたわけでもないが私はすらすらと白い線を書き綴っていく。そして、カツと音を立ててチョークを直ぐに黒板の出っ張りに置いて机に戻った。

明石が私の書いた黒板の答えと自分のカンペを照らし合わせる。こんな簡単な基本問題を素で普通に解けないなんてやっぱり莫迦だ。所詮、高校教師などこんなものか、と私は心の中で冷笑した。やがて、やっと明石は問題の答えと私の回答があっているのに気がついたのか、言った。

「正解だ。中曽根。こんな解き方何処の参考書から引っ張って来たんだ？」

そう、私は態と基本の教科書風の凝り固まった解き方ではなく、難しく手間の掛かる方法を選択し、それを黒板に書いたのだ。教師の質問に私はいつも嘘を答える。

「チャート式です」

本当はこんな簡単な解き方は参考書など見なくともちよつと教科書を読めば分かる。

だが、これが教師にとって都合がいいと判断した回答だった。大人の都合のいい回答。

「そうか。でも、一々こんな解き方をしていたら、受験の本番では時間が足りなくなるぞ。皆は先生の解く方法をノートに書き写しなさい。この方が、“本当の受験”では役に立つ」

本当の受験って何だ。こんな解き方も知らないようじゃ、お前ら終わりだな。さっさと荷物を纏めて家に帰り、高校を辞めて働いた

方がよっぽど有意義というものだ。でも、私はそんなことを外には一切出さないで素直に黒板を写した。

全てが愚かで矮小で、下らないと思えた。

学校なんて、こんなものだ。



## 【第2話】

やっと退屈な授業も終わりを告げ、ゆるゆると闇の支配に犯されつつある放課後。私は紺野綾香を連れ立って今時本当にベタだが、虐めの定番とも言える体育館裏の倉庫に来ていた。そこでとある人物と待ち合わせをしていたのだ。私の隣に綾香が陣取り、その周りに見張り役のあまり地位のない地味な女子生徒が数人周囲を観察している。綾香の方に視線を巡らすと、私の真似のつもりなのか寸分違わない格好を目撃し、反吐が出る。綾香は何かしら私に対してコンプレックスを抱いており、いつも私と同じ格好をしている。私が髪を短くすれば綾香もそっくりそのまま短くするといった風に。

今日も綾香は私とほぼ同じ、ロングの黒髪を風に晒し、その前髪は赤い花のついたピンで横に分けている。そして、スカート丈も私と同じやや短めの長さで紺のハイソックスを履いていた。制服の第一ボタンを開け、その間から見える肌にはやはり私と同じネckレス。何処で見つけてきたのだろうか。偶然店に入って見つけた最後の一個であったネckレスなのに。私は少し不可解な色を強めつつも、言った。

「遅いわね、聡子」

待ち合わせ、というより一方的に呼び出す相手は虐められっ子の典型、聡子だった。

綾香が私に視線を合わせて、ぐ、と眉間に皺を寄せた。

「ホント、早くしろよ。おい、まだなのかよ、聡子はっ。こっちはもう準備できてるっていうのにっ！」

そう綾香は罵倒し、イラついた感情に任せて空き缶を思い切り蹴り飛ばした。カン、といういい音がして空き缶が表の体育館入り口まで転がっていった。

「綾香、落ち着いて。見つかったら綾香のせいよ？ 聡子はくるわ。平気だから」

気に入らなくそして敵わない私に注意されるのが、薄っぺらい綾香のプライドを刺激したらしく、綾香はち、と舌打ちして分かったよ、と乱暴に言った。

「でも、本当にくるのかよ？」

綾香が私に訊く。あなたに考えられる可能性や心配事などづくに私が考慮した事実よ、と真っ向から言ってやりたい衝動に駆られたが、今ここで言うのは得策ではない。私はただ頷いて、暫し待てと告げた。

この聡子呼び出しはけして今初めて行なった虐めではなく、何度も呼び出しては聡子に劣勢を刷り込ませている儀式だった。別に力ツアゲや暴力、また罵倒するなど相手を追い詰めたりする虐めをしている訳ではなかった。そこまでやっては、こちらが悪者になってしまうし、警察沙汰などこの受験を控えた時期に御免被る。また、自殺などされては迷惑だった。停学も勘弁だ。そこで考え付いたのが、善意の上でありがた迷惑を誘うのが一番賢い作戦と言えよう。

この食べ物とても美味しいの、だから食べてねと相手に渡すが、実はその内容は賞味期限切れのとても喰えた物ではない。後日文句を言ってきた相手に私はこう言い返す。ごめんね、でも私は何でもなかったの、だからあなたも平気だと思って。念の為に私が最初に毒見してみたのよ、でもあなたには合わなかったみたいね、と。こう言われては、相手はどうしようもない。また他人から見ても悪いと思われることはないのだ。それは仕方のないことなのだから。

「あ、来た！」

隣にいた綾香が言った。ふと、綾香の視線を追うと予想通り聡子の姿があった。その姿を見て溜息を吐き出した。完全に怯えきっている。そんなに恐いのなら来なければいいのに、と思うのだが彼女にとって私達の誘いを断るのもまた恐怖なのだ。断って更に報復されるのが恐いのだろう。そんな聡子の考えなど全て把握している私は、微笑んで言った。

「久しぶり、聡子。元気、してた？」

私が声をかけると聡子がビクッと太った体を震わせた。ブスで莫迦でドン臭い上、デブではもう救いようがない。聡子は何の手入れもしていない髪を無造作に二つに結び、真ん丸い背中に乗っけている。その二つの尻尾がピクピク動く様は見えていて動物がやる仕種に似ていて滑稽だった。

「な、何か用？ え、エミちゃん……」そう言っつて聡子は俯き、顔を二つの尻尾で隠す。

「うん。用っっていうかね、私と綾香、あなたの手助けをしたいの。ね、綾香？」

にやっつと綾香の方を見ると、綾香も呼応してにやりと返してきた。息はピッタリだ。

「そー、そー。あたし等友達じゃん。だからさあ、聡子を助けたいのっ」

絶望の表情をして聡子は、な、何を、と吃りながら訊いてくる。にやっつと笑っつて私は言っつた。「聡子、田辺くんのこと好きっつて訊いたの。だから私達、あなた達が幸せになれるよう願っつて、田辺くんに告白のチャンスを作っつたのよ？ 今、公園にいるの」

ギョツとして聡子は青ざめ、私から後ずさっつた。彼女も理解したのだろう。私達が聡子に何をやらせようとしているのかを。ちなみに、聡子が田辺を好きだなんて噂を聞いたことも無ければ噂が流れたことも無い。

「え、エミちゃん……私、田辺くんのこと、好きじゃないよ？」うん、知っつてる。

「何言っつてるの。隠さなくっつてもいいじゃない。私達、友達でしょ？」

と、そこで絶妙な合いの手を綾香が打っつてくる。

「そうそう、友達じゃん？ まさか友達に隠し事は無しでしょ。ねえ？ しかも友達の好意をふいにするのは最低じゃん。鬼畜？ 鬼？ 悪魔？」

周りで見張り役の女の子がにやにやと聡子に次に必ず言っつてある

う台詞を待っている。

くすくす笑っている子もいた。聡子が意を決したように、顔を上げ、口を開く。

「で、でも、私……」

それ以上、聡子の言葉は続かなかった。一斉に周囲の女の子達の相貌が危険な光を帯びたからだ。そんな台詞を言わせたかったんじゃないんだよ、という視線が聡子に集中した。

「わ、分かったよ。ごめんね。そうだよ。友達に隠し事はいけないよね。うん。私田辺くんのこと、好きになってきたかも……」

思う壺だ。聡子にもまだ反論のチャンスはあった。好き、でも思いは自分の力で言いたい、その反論がまだ残っていたが綾香がそれを良しとしない。聡子が何かを言う前に、強引に綾香が捲くし立てた。

「じゃ、今からその公園に行こうか！ 友達として、聡子の恋の行く末を見守らなきゃなんないもんね。さ、聡子、行こう、早くしろよな？」

「……う、うん」

ああ、快感だ。人を操るのは何て楽しいのだろうか。世界は私の為だけに回っているのではないか、そんな妄想まで真実に思えてくる。それほどに学校での私は無敵だった。

そうじゃないと、やっていけない。生きていても全然楽しくない。

にやにやしながら、私は綾香に強引に連れて行かれる聡子の背中を見送った。助けを求めるように聡子は視線を巡らせ偶然にも私と合ってしまう。にこり、と私は笑った。聡子の顔色が青から真っ白へと変わった。やがて聡子は綾香に連れられて私の視界から消えた。

### 【第3話】

そうして無理矢理に聡子を引っ張りまわしてやってきたのは、学校から近くの公園だった。草も木もあまりなくブランコとベンチ、滑り台くらいしかないその公園は隠れる場所などなかったが、それでも田辺には見つからない様に私達は公園の名が画かれた看板の後ろに隠れた。多分一人二人はみ出していたろうが、特に気にしない言い訳は無数に存在する。

聡子と一緒にいてと私達に言った、聡子が心配だった、田辺が好きな女の子がいて田辺がどう答えるか気になった。それこそ百通り存在する。と、いよいよ告白シーンらしい、俯いた聡子何かを田辺に言っている。一緒に皆が騒ぎ出し、ぴゅうと口笛を吹いた。私も同様に驚く。あの聡子のことだ、一時間くらい掛かってやっと言い出すかと思えば意外や意外、即効で切り出したではないか。意外にいい根性してる。だが、やはり聡子は抜け作だったのだ。いきなり田辺がこちらをくるりを振り返り、何やら怒った表情で睨んでいたのだ。

聡子めっ！ 田辺に言ったな……ッ！

恐らく聡子は田辺に、私達に告白を言わされている事実を言ったに違いない。助けを田辺に求めるとはいい度胸してるじゃないか。だが、この場は逃げるのが得策だろう。

「逃げた方が良さそうね。速く、皆散って」

私はそう皆に指示を出した。

「……え？ 何だよ。言い訳なんて幾らでもあるだろ？」

綾香が不思議そうに訊いてきたので、私は態々説明してやった。

「聡子がドン臭いのは周知の事実だし、友達いないのもそうだけど、私達が虐めてる事実は公になってない。秘密なの。一旦、顔がバレたら全部先生までバレるか目を付けられる。推薦で大学行こうと思

つてる子も何人かいるでしょ。逃げるよ！」

「あ、やつべつ。逃げる！」

わア、と蜘蛛の子を散らすように私達は散り散りになって脱兎の如く逃げ出した。聡子が田辺に私や綾香が主犯だと言ってしまった可能性は極めて低い。そこまでの度胸は聡子にはないだろうと私は予測した。恐らく聡子は、“誰か”に脅されていて今告白を言わされていると田辺に報告し、田辺がその中心人物であろう私達のはみ出ている看板を振り返ったのだ。後日、聡子はこう言い訳するつもりなのだ。私、頑張ったけど田辺くんはエミちゃん達が覗いていることに腹を立てたの、と。胸中で聡子が最後の土壇場で反逆する可能性を見落としていたのに苦い感情が沸き立つ。

私としてことが、という苦い思いだ。先手を打っておくべきだったと後悔した。そんなことを考えていたからだろう、私の注意力は散漫だった。公園の外堀に大きな石があるのに気がつかなかったのだ。

「あつ、」

気がついた時にはもう遅かった。グキリと足を挫き、思い切りアスファルトに転がった。

膝を擦り剥き、鋭い痛みが走る。後ろからは田辺の足音が聞こえた。やばい、と思った。

それでも表では完全な優等生で通っている私の輝かしい経歴に傷がつく。虐めもする成績優秀者では先生の好印象と内申は取れない。大学など推薦で決めようという腹だったのに。私は必死になって痛む足を動かし聡子を呪った。アイツがこんなことをしなければと呪いながら、私は黒い髪を振り乱して、一旦公園の敷地内に別の入り口から入る。角を曲がって公園の中に入ればとりあいずは田辺の死角に入るという計算だった。だが、中に入ったはいいものの隠れる場所が皆無だった。聡子の姿はもうないのがせめてもの救い。

嫌だ。私はこんな所で終わりたいくないッ！

必死に思考を巡らし、知恵を絞る。背後で田辺の足音が近づいて

きて、とうとう私は自慢の話術で田辺を納得させるしかないと思つた。少しでも虐めたという印象すら与えなくなつた私としては最悪の結果だつた。観念して、後ろを振りかえろうとした時、私の視界に絶好の隠れ家が飛び込んできた。

そうだ、女子トイレ！

何故気がつかなかつたのだらう。私は入れて田辺が絶対に入れない聖域が目の前にあるではないか。私はすぐさま、膝の痛みも忘れてトイレに駆け込み鍵をかけた。田辺が追ってくる気配があつたが、それ以上入ってきたら今度は私が警察にセクハラとして送検してやる。じ、とお互いの気配が拮抗し、暫しの間私は息をするのも我慢した。やがて田辺の去る気配を感じた時には、ずるずると汚い公衆トイレの便座に座り込んでしまった。

でも油断は出来ない。まだ、直ぐ傍で隠れているかもしれない可能性を捨てきれず、私はトイレに三十分くらいは息を潜めていた。しかし、聡子の為に田辺はそれほど固執しないだらうとも思い、三十分後にはゆうゆうと外に出てきた。外の空気が美味しい。あの臭い匂いの中息をするのは困難でかつ、不快だつた。再び聡子を呪う。ホツと一息ついた私は、更に一息する為ベンチ向かつた。匂いもそうだったが、不潔な便座に三十分も座っている気にはならず、ずっと立ちっぱなしだつたのだ。少し休んでから家に帰ろうと思う。もし田辺や他の生徒に姿を見られても、三十分も経っていれば心配はない。私の完璧な優等生像が私を隠してくれる。

「ああ、疲れた……」

どつと疲労感が体を襲う。予想以上に私は緊張し、精神的に参っていたようだ。薄暗くなってきた大気に身を委ね、私は目を瞑り疲労を癒す。はあと溜息を吐き出し、目を開けたら、ふと向かいのベンチに変わった男の子が座っているのに気がついた。

何だか様子が変だつた。

「？」

ずっと体を前後に揺すり、足をぶらつかせている。少し色素の薄

い髪以外は特に特徴もない平凡な顔立ちだが、男の子の何処か子供っぽい仕様にちよつとだけ可愛いなと私は思った。でも一番目を引いたのは服装だった。病院の検査着のような浴衣のような蒼いガウン一枚を着ているだけで、足元は裸足だった。彼はスケッチブックを持って、体を前後に揺らしながら何かを描き綴っていた。ふと何を描いているのか興味を持って、私は男の子に近づいて後ろに回り込んだ。その私の様子には一切の注意も興味も示さず、男の子は只管絵を描いていた。

変な反応だ。普通、男の子なら女の子が近づいてきたら興味くらは示すものではないか。男の子、というより外見上は私と同年くらいだから青年、と呼ぶべき年齢の彼は一向に私に興味を示さない。とうとう私は無視されたまま、男の子の背後、スケッチブックを覗き込んだ。その瞬間、

「わあ、上手い。凄い上手っ！」

感嘆の声を上げずにはいられなかった。スケッチブックの中には公園の風景がそのまま、寸分違わず写真のように画かれてあった。丁度男の子から見て、そのままの画面がスケッチブックに躍動感ある線でもって写生されていたのだ。

「……すごい」

もう一度私が褒めると、今度は男の子に反応があった。くるりと私の方を振り返って、凝視した。私は見詰め返す。じ、と男の子は私の顔を見ると、だがそのままスケッチブックに視線を戻した。何なんだ、と私が疑問に持つと男の子からポツリと声が発せられた。

「あ、ありがとう」

私はポカンとした顔をしたと思う。どうやら男の子は私が褒めたのに対して礼を言っているようだと思いがつくまで少々間があった。

「……あ。上手いね、絵。君、絵描き？」

気がついて会話を成立させようと言葉を繋いだが、またも暫く男の子からの返事はなく、それから 正確な時間は分からないけど、多分三十秒か一分近く時間が経ってから、再び、



「あ、ありがとう」と男の子は言った。

私の質問には答えてないばかりか、時間がかかりすぎだった。ちよつと変だなと思いつつも、何処か不思議な雰囲気の子に私は興味を引かれていたのだと思う。す、と自然な動作で私は男の子の隣に腰を下ろした。というのに、やはり男の子は無反応だ。

「私、エミ。あなたの名前は？」

多分、私は直ぐに返答が返ってこないと既に予想していたので気長に待った。

今度は十秒後くらいに男の子が口を開いた。

「ボク、ミチル」

ボク、ミチル。全てカタカナのような奇怪な発音に聞こえた。ボクはミチル。男の子はそう名乗ったのだろ。ミチル、変わった名前だな、と私は思った。

「そう。年は？ 私は十七よ」

「ボク、じゅうはち」

意外に早い回答だ。しかも私より年上だったという事実には驚愕だ。返答が返ってくることに気を良くした私は更に質問を重ねた。

「君、絵を描く人？ 絵、上手だね」

だが、今度は返答までに時間がかかってしまった。じつと気長に待っているとやがてポツリと返答があるのは分かっていたので、私はそのまま次の言葉を待った。二分後、返答が返ってきた。

「あ、ありがとう」

何だか堂々巡りしている気がした。恐らく今までのパターンからして、二つ以上の質問や反応を要する事柄には時間が掛かるらしい。一つの質問を一つだけしか答えられないらしい。知恵遅れの子かな、と私は眉を顰めた。とにかくパターンが分かれば占めたもの。

「ここですつと絵を描いているの？」質問は一つだけ。簡潔にする。

「うん」

「楽しい？」

「うん」

「何を描いたの？ け」

景色？、と訊こうとして止めた。質問は一つだけだからだ。

「いっぱい。色んな物、人、動物。エミもあるよ？」

その言葉に私はギョツとなってミチルを凝視した。今、彼は何と言った。エミもあるよ。

つまり、私の絵もある、ということだろうか。

「それって、私の絵があるって、……コト？」

恐る恐る訊ねると、ミチルはコクンと頷いて、スケッチブックを私に見せてくれた。パラパラと何ページか捲り、すると徐々に時間は巻き戻るようにスケッチブックの絵は夕刻の風景へと戻っていった。そのうちのページに、私が膝を引き吊りながら女子トイレに駆け込む場面とそれを追う、田辺の様子が実に鮮明に画かれていた。そうとう焦っていたのか、私は凄しい形相で髪などまるでお化けみたいに「ごわごわ」になっていた。そして、何より服装が実際の私の制服ではなく、白い着物を見につけ、田辺は何やら子供が好きそうな何とかレンジャーみたいな、ゴレンジャーの赤レンジャーのような服を着せられていた。

「何で、私の服は違うの？」

もちろん、私はミチルに理由を訊いた。可笑しいじゃないか、他の全ては皆平等に等しく画かれているのに、何故私と田辺だけが違う服装なのか、気になるというものだ。

ミチルはやつと私と視線を合わせ、こう言った。

「エミはお化け。虐めっ子。このお兄さんは正義の味方。ガイダーだから。エミは妖怪」

「なッ！」

何て言った、この男は。私が虐めっ子なのも認めよう、悪い奴というもの認めよう。だがお化けは許せない。ここは許せない理由が私の中に確かにあったのだ。

「あのね、お化けっていうのは失礼でしょう。私はお化けじゃないわ。私を、“あんな”怪物と一緒にしないで。本当のお化けってい

うのはね、自分のことしか考えていない奴のことを言うのよ！ 私  
は違うわ。私は他の人の為を思っている部分だってあるものっ」

ほとんど無いけど。それでも私は“本物の怪物”を知っていたか  
ら、それと同列に扱われるのだけは嫌だった。そう思うと同時に怪  
物を思い出してしまい嫌悪感に見舞われた。

ブルッと悪寒に身を振るわせると、やっとミチルが返事を返してき  
た。

「エミは、ひどい。エミはボク、好きじゃない。ようかいはきらい  
っ」

カッと頭に血が上って激昂寸前で、私は拳をミチルに向けていた。  
だが、ミチルが何故か下着姿でいるのを目撃しその拳は行き  
場を失った。

「な、なっ……はいい？」

理解不能。何故、お前はここで突如服を脱いでいる

っ！

突如、服を抜き出した変態青年から脱兎の如く逃げ出そうと気持  
ちだけは焦る中、膝の怪我が今になってぶり返してきた。ズキンと  
痛みが走り、私は盛大にすっ転んだ。

「いった……」

痛みに顔を引きつらせ、更に怪我を増やしてしまったことに腹を  
立てた。私としたことが二度も同じ過ちをしてしまうなど論外だ。

これもそれも聡子のせいと心中で呪い殺した。

と、ふわりと私の上に布が被せられ、視界を失う。慌てて、布を取  
り去った頃にはミチルの姿は消えていた。布を見やれば、それはミ  
チルの着ていた薄っぺらい蒼の検査着だった。

私が体を震わせたから、かけてくれた？ 寒いと勘違いした？

意外にいい奴かもしれないと思い、しかし私のことを怪物と同列  
に扱ったのに憎悪の念に駆られた。どう黒い欲望が私のうちから顔  
を覗かせる。この黒い奴が出てきたら、私は復讐するまで決して許  
さないだろう。いつも、私を攻撃する奴にはそれなりの報復をして

きたのだから。 怨みは一生忘れないのが、私なのだから。

## 【第4話】

地球の大気はそろそろ夜の帝王に支配されつつあり、人間の視界ではもう街灯以外よく見渡せない。家までの道のりは暗く陰惨とした雰囲気が漂っていた。これはけして、道路に死角が多いとか夜で暗いからとかそういう理由だけではないと私は思う。

家までの道のりが凄く陰気で暗鬱として感じられるのは、一樣に私の気分が家に近づくにつれ沈んでいくからだ。できれば、何か手立てがあるのなら私は家になど一生帰りたくはなかったし、あの怪物とは顔も合わせたくなかった。でも高校生という親に食べさせてもらう身分の私としては家に帰らない選択肢ない。できても友達の家泊まるかプチ家出のどちらか。どちらにしろ、その場凌ぎは請合いだ。そんな事をやっても怪物の印象が悪くなるだけで無意味だった。私は家を出るという夢を諦め、一軒家のドアを開けた。

私の家はこの近所ではそれなりに大きい方だ。父親が単身赴任で遠い地で頑張っているのだから、これ位のお金はあつて当たり前なのだが、それでも雰囲気とかインテリアなどは品のある装飾が施され、庭にもガーデニングの趣味が満載されて花が踊っている。ただ、中に入ればその雰囲気は一遍する。

一重に怪物の醸し出す悪の波動が場を曇らせるからだ。

「……ただいま」

怪物は私がただいまと挨拶しないと煩い。また躰に厳しいので私は今時この挨拶を欠かさない。もちろん躰に厳しい母親としては、挨拶にはちゃんと返してくる。

「おかえりなさい、エミ。今日は遅かったのね」

怪物は小言を必ず吐く。どんなに私がいい事をして、でも調子に乗っちゃ駄目よ、と必ず釘を刺してくるのだ。

「皆と学校で勉強していたの」

「そう、でも友達と勉強しても捗らないでしょう。勉強は家か図書室でやりなさい」

「うん、でも今日はね、先生に聞きたい問題があったから」

しまった。怪物は友達と勉強が嫌いだった。今度からは図書館で勉強という言い訳をしようと私は反省し、自分のミスを悔いながら、靴を脱ぎスリッパに履き替えた。家の中にはいると怪物の異臭がした。この怪物の匂いだ。以前はもっと人がいた為、怪物だけの匂いではなかったしだからこそ居心地が良かった。私は怪物の方を見やり、心の中で呪った。

「さ、ご飯できてるから、早く食べて勉強しなさい」

「……はい」

私は怪物に従ってダイニングキッチンの方へと向かい、テーブルについた。出させたものを一言も発せず私は黙々と食べ始めた。今日のメニューはカレー。でもカレーの味など全くしなかった。何の味も感じない。乾いた砂の味がした。以前はこんなことなかったのに、と思う。

以前、この家には私の他に父さんと母さんと姉がいた。だが、今では父さんは単身不振で名古屋にいるし、母さんは今では怪物になった。そして母さんが怪物になった原因の姉、ユミもいた。だからこの家には怪物の匂いだけではなく、以前は私もよく家にいたので私の匂いや父さんの匂い、姉の匂いもあったはずだ。

だが、今は姉も父さんもいない。父さんは名古屋に単身赴任。姉は訳の分からない男と駆け落ちして家を出て行ってしまった。母さんは熱血ママといった感じで勉強には酷く煩い人だったから、姉が逃げ出したくなる気持ちも何となく察せられたが、私に一言くらい相談してから出て行っても良かったと思う。姉のユミと私は年があまり離れてないせいもあって、仲は良く買い物に行くでも遊びにくのも一緒だった。姉は私より二歳年上で、その大人っぽさと子供らしさが同居する性格に魅力を誰もが感じていた。成績も母さんの

希通りに優秀で、多分私の今の成績よりもずっと良かった。何もかもが、上手くいっていて何の不満もないと私は思っていたのに、姉は姉なりに抱えるものが確かにあったのだろう。

姉は二十六歳の男性会社員と、十八の頃出て行った。今は何をしているのかさえ、いや生きているのか死んでいるのかさえ分からない状況だ。それから母さんの期待は姉から私へと移り、母さんも徐々にだが狂ってきて、“怪物”へと変貌したのだ。

私は嫌な考えを振り払うよう、黙々とスプーンでカレーを掬い、口へと運んだ。茶色い液体を口内で咀嚼する。やはり味は変わらなかった。乾いた砂の味がする。私はカレーを流し込むように胃に落とし、当然のように食器を片して怪物に見つからないよう、自分の部屋へと急ぐ。だが、不運にも階段の中ほどで怪物に見つかってしまった。

「エミ、ちよつとこつちに来なさい」

私は大人しく怪物の方へと引き返した。こうなってしまったのは仕方がない。これから怪物との尋問会がテーブルで行なわれるのだ。再び、私はテーブルにつくと怪物は私の正面に腰を据えた。怪物がテーブルに湯気が立つマグカップをコトリと置いた。中身はコーヒー。こんな時間にコーヒーなど飲めば眠れなくなるので私は一切口をつけなかった。多分、怪物は私を眠れなくして机に向かわすのが狙い。そんな見え透いた罠に私は嵌らない。

やがて怪物もコーヒーには一切手をつけないまま、話を切り出した。

「学校はどう？」

「どうって、いつもと変わらないけど……」

大抵の詰問はこのフレーズから始まる。そして次に友達の詮索、成績、“彼氏”はいるのか、で終わる。怪物が“彼氏”に拘るのは姉の影響だろう。

「お友達とは上手くいっているの？」

「うん。綾香とは前にも合ったでしょ。仲はいいよ。安心して」

猫などで声で私は怪物に媚を売る。そうしないと小遣いを減らされるからだ。

怪物は私のいい返事に対して、猜疑心を抱いたらしく更に探りを入れてきた。

「綾香ちゃんって、成績の方はどうなの？」

友達の成績など関係ないだろう、と思いつつ私は怪物の言いたいことを察して先んじる。

「綾香は普通の子よ。成績だって普通だわ。むしろ受験を控えて頑張りだしたくらい。母さんは心配し過ぎよ。私が悪い友達と付き合っつて、破滅するのが親として心配なんでしょうけど、私はそんな莫迦なことしないわ」

むしろ私自身が悪い子なのよ、そう心の中で付けたし、心配する母親に感謝する子を演じる。大人は愚かだ。子供が演じるなどできない、無力な存在だと信じきっているからコロリと騙されてくれる。怪物も例外ではない。

「そうね、ごめんなさい。つい、あなたのことを思うと心配になってしまうの。エミもそろそろ受験の時期ね。もうそんな時期なのね。早いわ。頑張んなさい。成績はどう？ 上がってるの？」

そう、いつもいつも上がり調子ならば、きっと私は全国でトップになっている。

「あのね、母さん。私くらいの成績上位者になると、中々上がらないのよ。私みたいに真面目な子が大勢いるんだから。でも少しなら上がったわ。この間の模試も多分いいと思う」

現金なことに怪物はパツと表情を明るくし、かん高い奇抜な歓声を上げた。

「まあ、凄い。凄いわあ。その調子で頑張んなさいね。それと受験なんだから遊んではかりじゃ駄目よ？ 特に男の子なんかと現を抜かしている様じゃ、受験なんか乗り越えられないわよ」

お前に受験の何が分かるというのだ、怪物。お前は、大学は愚か専門学校すら出ていない専業主婦ではないか。



だが、私はそんなことはけして怪物には言わないで、満面の笑みを貼り付け言った。

「母さん、私、男の子となんか付き合ったこともないし、男友達も少ないわ。お姉ちゃんの事件があったからって、気にし過ぎよ」

その台詞に怪物の顔が凍りついた。姉の事件、姉の名前を出すのさえ、この家では怪物に禁止されているのだ。だから、姉はこの家では死んだ扱いになっている。

「エミ、お姉ちゃんなんてこの家にはいないの。お姉ちゃんのことなんか忘れなさい。それがあなたの為なのよ？ 分かって。いいえ、あなたにも何時か、分かる時がくるわ」

「……でも、」私はさも姉の心配をする良き妹のように顔を曇らせた。でもここだけは本心。

「エミ」

怪物が般若の如き形相で私の名を呼び、その鋭い眼光でもって私を威圧した。

「いいから、お姉ちゃんのことは忘れなさい。それがあなたの為なの。いいわね？」

「……はい、母さん」

ほら、私は全然怪物なんかじゃない。

あなたの為、私はあなたの為を思っでやっているの。全てはあなたの為なのよ。

その言葉は呪いの言葉。

こう言われてしまっではどうしようもない。他人から見ても悪いと思われることはないのだ。それは仕方のないことなのだから。だから聡子もどうしようもない。だから私は怪物にされたことをそのまま、聡子にしてやるのだ。もし、今後この先私がこの呪いの言葉を吐かれ続けたらどうなってしまうのか、それを見極める為にやっているのだ。実験とも言えるし、ストレスの解消とも言えるかもしれない。

でも、少なくとも私は怪物ほど自分だけを考えている訳ではない。

私はクラスのを思ってやっているのだから。クラスを纏める為の尊い犠牲が聡子なのだから。

私は怪物なんかじゃない……！

だからミチルの言葉は猛烈に心に刺さった。悔しかった。気に食わなかった。憤慨した。

怪物と同じことをしていても同列ではない、と思っていたのに。私はこんな怪物なんかじゃないわッ！

## 【第5話】

次の日の私は多分いつも以上に荒れていたと思う。それは服装にも如実に表れていた。

いつもより短いスカート丈、第一ボタンだけ開けていたブラウスは今日に限って第二まで解除されている始末。そして普段は風に晒しておく黒髪も、気分を表し高く結い上げていた。そのいつもと違う格好に綾香が凝視し、言ってくる。

「イメチェン？」

「違うわ。今日だけよ。何だかイラついて、朝、仕度したらこんなっちゃったの」

ぶつきら棒に私が告げると綾香はフンと鼻を鳴らしつつも、その実ちゃっかりと私の服装を　ちらりちらりと盗み見ていた。多分、明日には綾香も同じ格好をしているだろう。

「それより、まだ聡子は来ないの？」

「昨日と逆だな。エミ、落ち着けて。あたしがちゃんと連れてきてシメとくよ」

に、と綾香は笑って私の肩を軽く叩いた。その手を振り払い、私はそうね、と答える。

私と綾香は朝、登校してくるなり、阿吽の呼吸で同じ台詞を吐いた。

『聡子をシメるよ！』『聡子をシメるからな！』

私と綾香はそう吐くなり、かつてない協力と協調を発揮し聡子を部下に見張らせ、昼休みに昨日と同様、人目のつかない寂れた体育館裏に呼び出したのだが、意外にも聡子は鼠のような素早さを持ち合わせ、中々居場所が知れない。そうするうちに昼休みも終わりに近づき始めていた。苛々しながら私は腕時計に視線を這わせ、時刻を確認し舌打ちする。

後五分もない。例え、聡子の居場所が見つかったとしても、こんな短時間では何もできない。

「落ち着けて。エミらしくない。昨日何かあったのかよ？」

こういう妙な所で綾香はカンが鋭い女だった。私は自慢のポーカ―フェイスを駆使して、綾香の下世話な詮索を断ち切った。

「何でもないわ。聡子がム力つくだけよ」

本当かあ？ とやはり綾香は私の言葉を信じきっていないようだった。だが、部下からの報告によって知らない詮索は有耶無耶となる。部下、私と綾香が統べる女子生徒の一人が慌てた様子で渡り廊下を走ってきたのだ。

「いたよ！ 聡子の場所が分かった」私はソイツに無能さを叩きつけた。

「今更、見つかったって遅いのよ。今から何ができるっていうの！」しかし、私の予想外にも綾香が余裕を持った笑みをして、反論した。

「エミ、今からでもできるんだよ」

綾香は挑戦的な笑みを浮かべて勿体ぶる。余程、綾香には学年のトップにも考え付かない悪知恵を思いついたらしい。こういう挑戦的な瞳をする綾香は本当に凄いのだ。だから、こんな威張っているだけの無能な綾香でも準リーダーとして皆の尊敬を集めている。

「早く、言つてよ。焦らさないで。綾香、何を思いついたの？」

目を輝かせて私は言った。時々だが、綾香はとんでもない妙案を思いつき、私を驚かせる。一体どんな素晴らしい、聡子のシメ方を思いついたのかわくわくして高揚した。

「綾香」

もう一度、私が促すと綾香はやっと口を開いた。

「午後の授業はサボるってのはどうだ？」

「え、」

サボってどうするというのはだろう。別に、あのような詰まらない授業をサボろうが構わないし、私の今までの素行の良さがあれば一

度や二度のサボりは誤魔化せるだろうが、それで何をどうするのか綾香の意図が分からない。

「あたし等には携帯っていう便利な機械があるだろ？ あたしとエミがサボって、聡子の先回りをする。もし、聡子がそれに気づいても、他の子に後を付けさせればいい。簡単だよ。な？」

その言葉だけで私は綾香の言いたいことの全貌を察した。

「つまり、これからサボって、聡子の家の帰り道に待ち伏せするのね？」

「そうそう。そういうこと」

「もし、聡子が逃げ出そうとしても、」

「挟み撃ち」

「もし、誰かに助けを求めようにも、」

「携帯でそんな場所で虐めは、」

「するなと連絡。人がいたら、」

「携帯で連絡。聡子が携帯で電話をかけようとしたら、」

「挟み撃ち！」

にやつと綾香と私は笑って、極上の冷笑を繰り出した。綾香も私も多分凄く悪い顔をして己の名案に酔いしれていたと思う。なるほど、と私は思った。確かに、授業をサボり部下に後を付けさせるなんて汚いやり方、とても優等生の私では思いつかなかっただろう。

「最高よ、綾香」

「だろ？」

けらけらと一頻り笑い合った後、綾香と私は作戦を決行した。

聡子捕獲大作戦を決行するのだ。

にやにやしながら、私と綾香はグラウンドの教室からは死角となる抜け穴から、グラウンドの外へと足を踏み出した。このグラウンドの端のフェンスには大穴が開いており、そこから広がる竹林を突き抜けると、もうそこは自由なる大地が現れる。真実のリーダーである私と綾香は、一代前の先輩からこの抜け穴を含め、学校の様々な裏技を継承していた。

この抜け穴は先輩リーダーから受け継がれた、一般生徒はけして知られない秘密の通路だった。綾香と私はその通路をゆうゆうと抜け、人目のつかない隠れ家。又の名をサボリ教室へと向かった。これも先輩から伝授された情報で、十年前位から古すぎて進入禁止となった学校所有の倉庫を、三代前の先輩達が倉庫の鍵を挟じ開け、サボリ部屋として活用し始めたらしい。三代前の先輩達は実に大胆なことに、その倉庫に自前の鍵を取り付けて、内部も拾ってきた粗大ゴミなどでかなり家らしい造りに改造してしまった。

今では、先輩達の頑張りもあり、かなり住み心地もよくなっていた。ソファにテレビに、電子レンジ、何でも揃っている。むしろ、私などはここに毎日でも寝泊りしたい位だ。綾香はこの倉庫の鍵やはりこの鍵も先輩から真のリーダーと準リーダーだけに継承されるものだ。をポケットから取り出し、鍵穴にねじ込んだ。引き戸をガラガラと開け放ち、私と綾香はそこで暫く時間を潰すことにした。

「何、かけるうー？」

綾香がCDプレーヤーをコンセントに差込み、皆が持ち込んだCDを私に見せ訊いてきた。これ等CDは私の代考案で、生徒から没収された哀れなCDを生活指導室からくすねてきたものもあれば、皆が持ち込んだものもあった。

「何でもいいわ。綾香の好きにしてい」

「お、悪いね。じゃ、今日はあ、ミスチルな気分です」

単純な綾香は完全に自分の趣味に走ったようだ。素早い動作でCDをプレーヤーに捻じ込み、音量を小さくした。校舎には聞こえないよう、極めて小さな音で曲が流れてきたのを確認し、綾香と私はやはり拾ってきた茶色いオフィスソファに座りテレビを点けた。驚くべきことに、一代前の先輩がここに電気とアンテナが存在することを知り、何を思ったか突如テレビを持ち込んだのだ。驚くポイントはそれだけではない。

「何ちゃん？」

「BS」

「BSう？　今、何やってんだよ？」

そう、何故かBS内蔵の薄型テレビなのだ。一体誰がこの電気代と料金を払っているのかは不明だが、きっと学校が疑問に思いつつ払っているのだろう。私は綾香に言った。

「今は、丁度アルプスの少女ハイジ」

すると綾香は思い切り顔を顰めて、苦痛を訴えてきた。

「丁度お　？　エミ、この時間はハイジだって知ってて、あたしに曲を譲つたろ？」

「あら、私はあなたに曲を譲つたんだから、テレビは私に譲りなさい」

クソオ、と綾香が頭を抱えて悔しがった。今頃、綾香は私に騙されたことを知ったらしい。曲を選ぶんじゃないかと後悔しているのだろう。流石に騙したままでは可哀想なので私はきちんと教えてやった。

「ハイジは後、一時間もないわ。終わったら譲ってあげる」

「何だよ、早くそれを言えよ」

に、と綾香は笑って大人しくCDプレイヤーの元へと下がった。次に聴く曲を選別に掛かっているのだろう。私と綾香の間には幾つかのルールがあった。今のもそう。この隠れ家で私と綾香が同時にいる時は、CDプレイヤーを使うかテレビを使うか、どちらか一つと決めている。大体のリーダーと準リーダー達もそうして分割することですべて平和を保ってきたようだが、私と綾香においてこの取り決めは絶対だった。

確かに仲は良いが、ぶつかると火山が噴火したように激しい争いになってしまうからだ。

それは一年の時の喧嘩で十分私達は学んだので、ルールを作り、それを破った方は必ず平謝りする決まりにした。そうでないと正直血を見る惨事が起きても不思議ではない。確か、一年の時に喧嘩した原因なども些細なことだったと記憶している。

些細なことでも、決まりは守ったほうが無難だ。

それから暫く、私と綾香は隠れ家でのんびりと時を過ごし、お弁当を広げ寛いだ。

くだらなさを消化しまどろみ始めた頃、私と綾香の携帯電話が同時に鳴った。

ピリリリ、という私の音と綾香の着メロが見事に八重った。

「綾香！」「エミ！」

勢いよくオフィスソファから起き上がった、私達は同時に相手の名を呼んだ。携帯の着信音。そのパネルを開かずとも内容は知れた。聡子が動いたのだ。嬉々として私は自分の携帯を耳に当て、綾香がその傍らで目を輝かせて待っている。綾香自身の携帯で連絡を聞けばいいのだが、どうせ同じ内容なので無駄なことはいらない。

私は部下である二年生の話とそれに割ってはいる三年の女子、藍の話聞き、にんまりと笑って携帯を切った。まだ私の口は開かない。しん、とサボリ教室が静まった。緩慢な動作で私は携帯を鞆にしまう。すると、とうとう耐え切れなくなった綾香は爆発した。

「早く言えよ！ 焦らすなよ」

「さっきのお返しよ」

くすりと笑って綾香を見やると、綾香は悪かったよ、と早々に謝ってきたので内容を教えてやることにした。

「聡子が動いたって。あの子、尾行に気づいたって。それで逃げ出した先が何と」

「何処だよ、早く言えよ！」

「昨日の公園。私ね、凄くいい案を思いついたの。多分、聡子は見渡しのいい死角の無い公園を選んでそこに逃げたつもりなのよ。でも、あの公園、実は凄い死角があるの」

綾香が目を爛々と輝かせて何処かと訊いてきたので、きっぱりとした口調で断言した。

「それは、女子トイレよ」





## 【第6話】

ザッパアン、という盛大な雨音がトイレの中に木霊する。かなりの音量だが不思議なことに外に音は漏れていなかった。こんなセキユリテイではもし万が一痴漢でも来られた日にはどうしようもないだろう。だが、その穴だらけのセキユリテイに今は感謝する。

これのお蔭で聡子をシメられるなら、嬉しい限りよ。

あの後、私と綾香は連絡を聞き、聡子のいる公園へと向かった。皆に事情を話して、聡子を公園の女子トイレへと追い込んで貰い、その罠に聡子は首尾よく騙されてくれた。トイレの一室に“自分から”入ってくれたのだ。だが、もちろんその個室には仕掛けが施されている。個室の中は汚物でいっぱいであり、私達はそのことをもちろん知っている。だが、聡子は恐くて外には出て来られないのだが、その上から水を掛けるだなんて愚かな真似はしない。ちなみに綾香は真っ先にやろうとしたので、私が止めた。

まず、私はこう言う。

「聡子、いるの？」

しん、と女子トイレは沈黙に包まれ、俄に緊張に絆される。きつと個室の中にいる聡子は身を固くしたに違いない。だが、私は聡子がか中にいると知っていて、態とらしく告げた。

「本当に聡子、トイレにいたの？ こっちには来なかったんじゃないの？」

「そっ」

そんなはずはない、と否定しようとした藍の口を手で優しく覆い、につこりと笑って綾香に目配せした。綾香は無能だが、こういう悪知恵や決断力に関して悟れる部分がある。

「いや、ここにはいないんじゃないかあ……？」

綾香自身も何故、ここに聡子がないという前提で私が話しを進

めようとしているかは分かっていないが、綾香は私を信頼して、首を捻りつつも策に乗ってきているのだ。綾香は愚かだが、そういう所はよく気が利く。同学年の藍がリーダーになれなかったのは、こ等辺の機転の利かなさにあると言ってもいい。藍はショートカットの髪を掻きつつ、私達の会話を見守っている。安心して見てなさい、藍。私が今から虐めという本当の意味を教えてあげるから。

「そっか。聡子、ここにはいないのね」

個室の中の聡子が緊張を解き、安堵したのが外からでも分かった。本当に愚かな奴だ。

私がこのまま見過ごすなど有り得る訳無いとそろそろ気がついた方が賢明だ。

「良かったあ。聡子がここにいると思って、私心配したけど気のせいだったみたい。じゃ、始めようか。ボランティアを。清掃を始めましょう。いい？ 綾香、公衆トイレの中は汚物でいっぱいよ？

だから、どんどん洗い流してね。藍、洗剤を撒いて」

はははは、可笑しくて仕方がない。個室の中の聡子は今頃、顔を真っ青にしていることだろう。だが、今更中にいますなんて言えるはずもない。一度、私が確かに確認しているのだから、今更名乗りに出る方が往生際も悪いし、ここまで確認して正当化しておけば、聡子に洗剤をぶっ掛けようが問題ない。名乗り出なかった聡子が悪いのだから。

綾香は押さえつけられていた闘牛のように、ゴーサインを出した途端、水を噴射した。

「綾香あ、洗剤を先にやらないと駄目でしょ」と私が言うと、もちろん嬉々として綾香は

洗剤を降りかけ始めた。単純な奴だ。でも綾香のその衝動も分からなくもない。今まで手を汚すのを極端に嫌っていた私ですら、女子トイレの隙間から中にいる人間に水を打ちかけてやりたかった。ドラマでしか見たこと無い画面が今、現実に見えるのはちよつと快感だった。それは実に甘美で誘惑的であり、麻薬のように気分を高揚

させる禁断の行為。

アダムが神の戒めに従わないで知恵の実を味わったのも領けるといふもの。

でも、そこまで気分を盛り上げておきながら、私は聡子に水や洗剤をかけるような真似はしなかった。自分の手を汚すのが嫌だったというのも、もちろんあるがそれ以上に聡子が個室の中、何を考えているのか気になったのだ。聡子は一切口を開かない。個室の中では恐らく凄まじい惨状へと変貌しているはずなのに、ただ耐え忍んでいる様子は怪物に封じ込められている私と重なる。それが無性に哀れであり、そんな私と重なる聡子を更に窮地に追い込みたくなかったのかもしれない。

どっちにしろ、私が水を掛けたのか掛けていないのか聡子からでは分からないのだから、手を汚しても良かったのかもしれない。でも、何で抵抗しないのだろう、と私は思った。

そして、今ほど抵抗してほしいと思ったこともなかった。

一頻り聡子をシメ終えた私達はいつまでも不快な公衆トイレにいるのも何なので、用が済んだらさっさと外の空気を吸いに出た。外界は澄んだ気で満ちており、中の悪辣なる波動をも粉碎してくれる。たった今まで聡子に水を掛けるといった悪行をしていたのが嘘のようで現実味が薄い。暫く、外の空気を堪能していると、綾香が興奮して様子でシメの感想を言ってきた。

「流石、エミ。すげーコト思いつくな。きっと、アイトイレの中で声殺して泣いてたよ」

「だって、ム力ついてたんだもの。最初から素直に言うこと聞いてりゃいいのよ」

綾香がぴゅう、と短く口笛を吹き、周りの女の子達も私のことを奉った。

「別に、今までと同じことをしただけでしょ」

「まあね、にしても聡子が泣き言、言わなかったのは驚きだな？」

それは私も同感だった。あの泣き虫でグズでデブのブスでオマケに愚かな聡子ならば、直ぐに泣きついてくると思っていた。そうしたら直ぐに助けてやるつもりだった。

私と同じ……。

自分の力だけで立ち向かう姿は、ブスで愚かな聡子も私と同じであつたのだ。

「本当。何で、抵抗しなかったんだろ……」

してくれれば、私よりも下と見下せたのにも思う。とにかく憂さは晴れた。気分は上々で、昨日とほぼ同じくらい快晴だ。空は気分とは裏腹に翳りを見せ、夕刻の時間へと下降していた。そして昨日はこの時間帯に私はトイレにいて、今日は聡子がいる。ふと、昨日の出来事を思い出し、トイレから出た後のことを思い出して、視線をあのベンチへと向けると、そこには当然のようにミチルがスケッチブックを広げていた。

「ミチル」

ミチルの姿を確認すると、真っ先に思い浮かんだのは復讐だった。憂さは晴らしたが、今度はこれに快楽を付随するのだ。私のギアは今、真のリーダーに限りなく忠実だった。

「綾香、アレ」

「ん？」

ミチルを私が指し示すと綾香がそれを視線で追った。

「何、あの男がどうかした？」

今日のミチルは昨日の検査着ではなく、ちゃんとした服を着ていて一見普通の人と変わりはなかった。白のワイシャツに黒のズボン、むしろ潔癖すぎる印象を抱かせているが、やはり体を前後に揺すりながら足をぶらつかせている。この時、私はミチルが何処か欠陥を障害を負っているのに気がついていて、それを卑怯にも利用しようとさえしたのだ。

「アイツ、精神障害者よ」

私は人を貶める最強の呪文を使った。

呪文の効果は絶大で、綾香や藍、その他の女子生徒も一樣にして沸き立った。自分より劣る恰好の弱者を見つけ、相手の欠点を論うことに猛威を振るう。

「何、描いてるんだよ？」

質問は一つだけ。簡潔にする。このルールは単純な綾香にとって、有利に働いた。

「いっばい。人、動物、建物……」

私はギョツとしてミチルを凝視した。昨日と同じフレーズ。その次の言葉に私は恐れを一瞬だけ抱くが、それは杞憂に終わった。『アンタもあるよ。お化け。怪物。アンタ、ボク、好きじゃない』

動悸は綺麗に治まり、むしろ言い過ぎたミチルに懸念を抱いた。単純な綾香は挑発以前に過剰に乗っていく。でも、この作戦が失敗だったことに今更ながら私は気づいた。

「そうかよ、じゃ、見せてみるよ。このサイコがつ」

そう言う綾香は強引にミチルからスケッチブックを奪い、中身を確認仕出す。そして、多分自分の絵を見つけたのだらう、悪鬼の如く形相になってページを私に見せてきた。

「コイツ、あたし等のこと、聡子をトイレに入れた場面を描いてる！ エミ、やばいよ。コイツがもし警察とかに言ったら、あたらしら停学だ！」

その先の動作を私は綾香にさせる訳にはいかなかった。一、スケッチブックをミチルから奪い証拠を隠滅すること。二、スケッチブックからページを切り取り持ち去ること。三、ミチルを傷つけること。その全て、どれか一つでもやらせる訳にはいかなかったのだ。

「平気。どうせ、サイコの言うことなんか、誰も聞かないわ」

「あ？ エミらしくないじゃん。やっぱ、コイツと何かあったのか？」

やはり綾香はこういう下世話な好奇心には鼻が働くらしい。私はその疑いを断ち切る。

「違っわ。何もない」

に、と綾香が笑う。それから挑戦的な瞳を携え、笑った。やばい、と私は思った。こういう顔をする綾香を侮ってはいけない。この顔をした時の綾香は本当に悪知恵が働くのだ。

緩慢な動作で綾香はスケッチブックをペラペラと捲り、あのページへと辿り着いてしまった。もっとも懸念していたことが起こってしまった。

「何だ、このページ。おい、これエミと田辺じゃんか。おい、見ろよ」

得意げに綾香がミチルのスケッチブックを皆に見せようとする。

「止めてっ」

この反応もいけなかった。

皆は真のリーダーである私の秘密を探ろうと必死になって身を乗り出した。

「止めてったら」私も必死になって、それを阻止しようとスケッチブックを奪い合う。

そして、綾香の参入によって全ては最悪の結果になってしまった。そして、

「ウラッ」

という綾香の掛け声と共にスケッチブックは完全に綾香の手へと渡ってしまったのだ。

証拠となる聡子をトイレに連れ込むページを無造作に何の躊躇もなく、破った。

ビリリという紙が引き裂かれる音がして、私は思わず叫んでいた。

「止めなさい！」

驚いて綾香が破る手を止めた。しかし、忠告も虚しく、紙はスケッチブックに引っかかっているだけという今にも千切れそうな状況だ。その一方あまりに必死な私の様子に綾香や皆が意表を突かれ、ポカンと口を開ける。

「おいおい、エミ、何必死になってるんだあ？ まさか、このサイコに惚れてんのかよ」

にやにやしながら綾香はキモイと私のこともミチルのことも同時

に詰った。惚れる？

ミチルと私は昨日会ったばかりの間柄。一目惚れにしてもここま  
で必死になる理由などない。そうだというのに、何故か私は焦って  
いた。鼓動が速くなり、眩暈がした。この迫ってくる焦燥感は予想  
外の事態からくる焦りと確信しているし、そこに罪悪感など微塵も  
ないつもりであつた。きつぱりと私は否定の意を表す。綾香を増長  
させるのは良くない。

「違うわ。ただ、それじゃ器物破損で訴えられても仕方がない。そ  
れでもいいなら、勝手にしなさい」

ハッと、綾香は己のスケッチブックを地に取りこぼした。やっと  
綾香は自分の仕出かした過ちに気がついたようだ。私達の集団はけ  
して単なる不良の集まりでもなければ、荒んだ女子生徒の会という  
訳でもない。むしろ一定以上の成績がなければ真のリーダーはその  
者を認めず、サボリ教室などには一切の出入りを許可しないという  
エリートとも言える集団だ。頭はいいし、やり方はスマートで狡猾  
でなければならぬ。

確かに生徒をシメたり、意地悪なことを時として行なうことはあ  
るが、それは校則の範疇であり、犯罪や停学になるような悪事は一  
切起こしてはならない決まりだ。決まりとはいえ、先輩達からの伝  
統でもあるので守った方が無難である。だから、成績の足りない者  
規律を乱す者、リーダーの言うことを聞かない者などは集団から除  
名される。

それでも私の通う高校は有名私立進学校だ。進学を考えれば、当  
然の処置と言えよう。

その大事な取り決めを今、綾香は破った。いや、破ろうとしてい  
るのだ。

「私はリーダーよ。先輩からこの規律を絶対に破らず、また他人に  
も破らせないと認められたの。だからそれ以上やるといふのなら、  
私はあなたを除名しなければならぬ」

ザワッと集団から当惑の声が沸き起こる。リーダーと準リーダー



の抗争か、と危ぶまれたのであろう。だが、そこまで綾香は愚かではないと私は知っている。

「分かったよ、悪かったよエミ。けどよ、このページだけは貰っていくからな」

「それはミチルに聞いて」

おや、といった風に綾香は私の顔を凝視した。そして、私は自分が相当焦っていたのを自覚した。自分でミチルと知り合いだと言ってしまったようなものだった。

「名前も知る間柄って訳？」

綾香が訊いて来る。

「そうだとしても、もしミチルと私があなたの言う、惚れたとかいう間柄だったら、あなたを使って、懲らしめようなんて発想は出てこないと思うけど」

それもそうか、と納得した綾香がスケッチブックから引つかかっているだけの切れ端をミチルに何の相談もなくピリリと引き裂く。そこで私はそういえば、と思い出した。

騒いじやったけど、ミチルはどうしているのかな……？

そう、ミチルの意思に反して、彼のスケッチブックを私達が勝手に破っているという状況でミチルは何を思っているのだろう。やはり怒っているのだろうか、と私は心配になった。ミチルのいるベンチの方を私は振り返ると、ミチルは以前変わらずに体を前後に揺らしながら、スケッチブックの行方をただ眺めている。その様子に少し私は安堵した。

何も感じていないのだろうか、そう私が疑問に思った時、ミチルの唇が動いた。

「……う」

……っ？

私は首を傾げ、ミチルを凝視し次の発せられるであろう言葉を待



ない。ごおつと復讐の炎が燃え上がって熱く滾る。元々私は温厚な性格ではけしてなく、極めて好戦的だ。もし私に逆らう者が現れたなら即刻敵と見なし叩き潰す。これが私の生き方でやり方だ。

「……綾香」

私は出来るだけ一番低い声で脅すように言った。その写真のデータを今すぐに消しなさい、そうすれば今ならまだ間に合うわ、今ならば許してあげる。そんな意味を込めて発した声だった。しかし、恐らく私の考えを長い付き合いである綾香も正確に理解しただろうが、彼女の意味で私の命令は退けられた。にやつと綾香は歪んだ笑みを浮かべ、そのまま携帯も高々と掲げて、一刻も早くこの場から去ろうと走り去っていった。その後に、藍や部下達も続いた。分かっている。分かっていた。今、私のことを藍や部下が見捨てたのは紛れもなくミチルが私にくっ付いているからだって、私にはこの賢い頭で理解していた。それでも悔しかった。取り残された場面など頭で考えた時もなくあったから、涙が零れそうな位悔しい気持ちが進み上げてきた。くそ、これも何もかもミチルのせいだ。私はミチルを何とか引っ剥がそうと、渾身の力で抵抗した。

「ミチルッ。離して。離してっばッ」

ジタジタと手足をバタつかせてみたが、ミチルの腕は私の胸にがっちり食い込まれたままだ。痛い位に締め付けられていて、そのままミチルはボロボロと涙を零し、私の腹に顔を埋めている。何だかそのあまりの泣きっぷりに制服の腹部付近が濡れてきた気がした。一体、線の細く子供のようなミチルの何処に、このような力があったのだらうか。疑問に思いつつも、今はとにかくミチルから逃れる術を考えた。そして速く綾香と藍や部下達に追いついて、嗜めてやらねばならない。懲らしめてやらねばならない。

「……ミチル」

そうするにはこの腕から解放される必要があった。一番いい方法は既に分かっている。

人を呼べばいいのだ。簡単だ。しかし、どう控えめにみてもミチル

が私を襲っているようにしか見えないので、多分助けを呼べばミチルはとりあいず警察に捕まるだろう。

ミチルは別に私に危害を加えようと思って、私に抱きついて泣いている訳じゃない。悔しくて、悲しくて泣いているのだ。きっと、彼にはそれ以外に感情を示す手段がないのだろう。私はもう、ミチルが正常な精神の持ち主ではないと気がついていた。それを考えると、警察の手に委ねるのはミチルが可哀想に思えた。もし、一人で何も分らないまま、制服を着た強面の人間に手錠を掛けられたら、どんなに心細いか、想像しただけでも恐い。

ミチルは精神異常者だ。だから、きっと後で釈放される。でもそれまでミチルはずっと一人ぼっちだ。

それは、可哀想かもしれない。けど、そんなの私には関係ないじゃないの。ほら、私には重要な使命があるでしょう？ 綾香をちゃんと罰するという重大かつ私らしい使命があるのだから、ここで助けを呼んだって構うことはない。元々、ミチルが悪いのだ。離してって、警告したんだから……。

私の中で、悪の化身が勝利した。大声を出すべく、思い切り私は空気を吸った。

「誰かあ、助けっ」

「わあー、待った、待った。君、叫ばないでっ。ミチル君を引き取るから。お願い！」

という邪魔が入って渋々私は口を閉じることになってしまった。だが、内心少しホッとした。本当は叫びたくなどなかったのだから、ミチルをただで引き取ってくれるというなら、何の文句もない。私はその引き取り手の方を観察し始めた。こちらの方に酷く焦った様子で走り寄ってくるのは、チェックのスーツに身を包んだおじさんだった。その胸元にネクタイはなく、黒いセーターを着込んでいて、その上にやはりチェックの上着を着込んでいる。何処か聖職者や教師といった雰囲気醸し出すような服装に私は直感で、止めたおじさんをミチルの父親や肉親ではないな、と思った。やがておじさん

は私に、というよりミチルに追い縋ると強引にもミチルの胴体を持って、引つpegした。ベリ、という音がすんじやないかという程、容易にミチルは私から剥がれ、今度はおじさんの胸に縋ってメソメソと泣き始める。私の視線におじさんは困ったように頭を掻いた。「いやあ、参ったねえ。ミチル君は割と安定している方なんだけど」と呟き洩らす。

私はおじさんが洩らしたその言葉だけで大体の事情を察した。ミチル君という言葉から既にこのおじさんがミチルの肉親ではないのが分かるし、ミチル君は割りと安定している、からおじさんが他の人間の面倒も見ているということが窺えた。

「あたなは、ミチルのお医者さん？ それとも、養護学校か何かの教師？」

今の会話から察した私が、こう質問すると、おじさんはおやと言った風に眉を顰めた。

「ミチル君のお友達？ そんな事まで君に話したの？ 僕が誰かまで」

「いいえ。あなたが今自分で言ったの。だから、私は心配しているのよ。もし、ミチルの先生とかじゃないのなら、精神異常者のミチルが怪しいおじさんに誘拐される場面かもしれないもの。まあ、ミチルのその様子じゃ、あなたはミチルの親しい人みたいね」

ちらり、とミチルを見やれば、おじさんの黒いセーターを濡らす程ミチルは泣き、顔を埋めていた。私に泣きついていた時よりも力強くしがみ付いていた。

「そうか。そう言えばそうだね。君は賢い女の子のようだね。これは僕の注意不足だった。でも安心してくれ。僕はミチル君の保護者だから。けして誘拐とかじゃないよ？」

「……そう、ならいいの。私は帰ります」

ミチルを完全に預ける形で私は踵を返して綾香を追おうとした。したのだが、スカートがぐん、と引っ張られて私は立ち止まり、その原因となった人物の名を呼ぶ。

「ミチル」

叱責するよう非難するように低い声を出すと、おずおずとミチルがおじさんの顔から顔を少しだけ上げて、私の顔色を窺った。ミチルがスカートの裾を握り締めているせいで、スカートが捲れてしまっていた。もし、ミチルに少しでも嫌らしい欲望が顔を覗かせようものなら私は拳を振るっていただろう。でもミチルにはその兆しは一欠けから見受けられない。ただ純粹に私と離れたくないだけ。子供が親と離れたくないように、ミチルもまた誰かと離れたくない時はこうやって実力行使するのだろう。

助けを求めるように、自称ミチルの保護者を見やると、困ったように彼は言った。

「参ったね。ミチル君は君が気に入ったらしい。ミチル君は鼈のようにしつこいよ？ 掴んだらけして離さない。文字通りにね。だから、飽きるまで待つしかないよ」

「それなら私はどうすれないのよ」

もちろん、私は文句を言うが、全然困っていないようにおじさんが気楽に言った。

「気長に待つしかないね。お茶くらいはご馳走するよ」

はははは、とやはり全然困っていないようにおじさんが笑った。私は凄く困っているというのに。

## 【第7話】

結局、私はミチルの家へ行くことになってしまった。

もちろん、私はスカートが千切れる程引つ張つてみたし、ミチルの手を剥がそうと殴る蹴るなどの攻撃まで加えたが、ミチルは全く手を離そうとしなかった。そればかりか、私が蹴ったりしても少しも痛みを感じていないようで、まあちよつとは「エミ、いたい」とか言っていた気もするが、基本的には知らん振りしていた。これには少々驚嘆した。かなり強く殴ったり蹴ったりしたというのに、一体ミチルの何処にそれを我慢できるだけの忍耐力があったのか不思議だ。それならば、是非ともスケッチブックを破られただけで泣くような場面こそ、その強靱な忍耐を使うべきだと思う。

そうして半ば引き摺られるように私はミチルの学校へと行く事になってしまった。

空気がだんだんと湿っぽく田舎臭くなっていくと同時に、周囲も人気を失っていく。もしかしたら、ミチルは精神異常者ではなくおじさんもミチルの保護者でもなく、二人ともグルで私を何処か人気のない所に連れ出しているだけなのではないだろうか。そんな不安も沸き起こった位、そこは閑散と静まり寂れていた。やがて、住宅を抜けて随分と開けた空き地が目立つようになって、私の疑念は最高潮に達した。帰ろう、直ぐに帰ろうと思った。オロオロと一人取り乱す中、それを察したように聖職者の雰囲気を感じだすおじさんがそつと落ち着かせてくれた。

「ごめんね。こんな人気の無い場所にきちゃって。でも、君も気がついているように、ミチル君は普通じゃない。今から行くのはそういう人達が集まる場所だから、人の多い場所にそういった施設は作れないんだよ。今は色々と煩いからね」

そう言われなければ、私は不安から大声を出してしまっていただ

ろう。私の賢い頭脳からミチルの事情を照合し、納得すると疑惑はすうと姿を消した。そのまま何を言うでもなく歩き、すると代わりにとある建物が姿を現した。その建物は白いタイルのような外壁で、学校のような造りをしていた。黒い柵で覆われた門の隣に『高見高等養護学校』という看板があったので、間違いなく学校というのが理解できた。しかし、普通の学校とは少しばかり雰囲気違っていった。無機質な印象をあまり与えないのだ。威圧的でないというか、校内に入るものを歓迎するような雰囲気がある。普通の学校よりも緑が多いのが原因かもしれない。歩道や柵の回りだけでなく、そこらじゅうに植木鉢が飾ってあった。そんな雰囲気を壊すのは校門の前の人ばかり。学校の校門前には何台もの車が群を成して、学校から出てくる生徒達を収容していた。

「丁度、下校時刻なんだ」とおじさんは教えてくれた。そして、ミチルは？ と訊ねる前に先手を打って「ミチル君はここに住んでいるから。ここは寮もあるからね」と教えてくれた。どうやら、ここはミチルの学校であり、家でもあるらしい。学校から出てくる生徒を出迎えるのは皆、母親か父親で優しく生徒達を車へと収容しては立ち去っていく。

ミチルの親はどうしているのかな、と本当にどうでもいい事をぼんやりと考えてしまった。今、ここに来ているのは仕方なくであつて、ミチルに興味を持ったからでは無い。車の走り去る様子を眺めているミチルは何処か寂しそうに見えたのは、きっと私の同情から作り出した幻であろう。

気にしちゃいけないと私はあえてミチルを無視して、おじさんの方に寄った。未だスカートの裾はミチルが握っているから、僅かしか移動はできなかったがそれで十分だった。声が聞こえれば会話に支障はない。

「あの、ここはどういった施設なんですか？」

「君はミチル君の病名は知ってる？」

知るはずもない。私は無言で首を横に振った。



「ミチル君の病名はね、“自閉症”っていうんだよ。ここは自閉症の人や体の不自由な人、それからダウン症の人や障害を負った人がくる養護施設なんだ。けして君が先程言ったような精神障害者の人々の集まりじゃないよ。精神病とはまた別なんだ」

私はおじさんの言葉に含むものを感じ、嫌な気分になった。大人が子供の間違いを見下しながら諭す、そんな含みを感じとつたからだ。

「どう違うのですか？ 私には分かりません」

私はおじさんの諭しを真っ向から受けて立った。元々、説教をされてされっぱなしの、無力な子供でいるような気性はしていない。自分で正しいと思ったら、誰が何と言おうとけて私は周りの声など聞かないし、私の説を覆したいのならそれだけの根拠が無いと私は信じない性質だ。説教にもそれなりの筋が通っていないと説得力はない。さあ、私にその根拠を示せ、その挑発におじさんは見事に乗ってくれた。おじさんは挑発だとちゃんと理解した上で乗った。私の挑戦を大人として受けてくれた、子供を侮らない大人だった。「自閉症っていうのはね、精神病とは少し違うんだ。自閉症は精神の障害の前に、脳の病気だから、外科とかそういう方面に思えるだろう？ 脳と言えばさ」

「脳？」

確かに、脳と言われれば精神というよりも、はつきりとした実体を持つている気がした。

心は人の曖昧な部分だが、脳は単なる人間の器官のうちのひとつだ。しかし、私は自閉症そのものに疑問を感じていた。

「自閉症って、……つまり引き籠もりなんでしょ？ うつ病なんだから精神病じゃない」

自閉症。心を閉ざす病気という認識から、誰だってそう思う。私もずっとそう思ってきたのだから。しかし、おじさんは頭を振って否定した。

「皆が自閉症と言うと引き籠もりとかを想像するようだけど実際は

全然違う。自閉症は生まれつきの脳障害で、生まれた後に途中からなるものじゃないよ。脳内の情報処理の仕方に問題があるとされている。未だ原因は判明していないけどね。もし、君の友達が引き籠もりになって、自分は自閉症だと訴えるのなら、それは自閉症の人に極めて失礼な行為だ。単なる逃避にその病名を使って欲しくないね」

私はその言葉を訊いて、このおじさん、好きかもしれないと思った。おじさんは私と対等に会話ができるから、私の思考にちゃんと付いてきてくれるから。愚かな、余計な事は言わない分別さが心地よかったのだ。確かに、私が不快になると同時に、私が精神障害と自閉症を一緒にしたのを気に入らないと、おじさんはちゃんと会話の中を含めた。言葉の裏でおじさんは私の言葉が気に入らないとそう主張した。

「ごめんなさい。分かったわ」

だから、私はそれを謝った。おじさんもちやんと私の言いたいことを読み取ってくれた。

「分かってくれたなら、いいんだ」

言葉は少なくとも意味は通じた。この人、頭がいいと私は思った。私の周りにこのような思考をする賢しい人は滅多にいないし、学校の教師 明石などはいいい例だが 愚かな奴ばかり屯している。養護学校の教師にこのような賢しい人がいるなど驚きだった。

私がそのことを伝える前に、やはり賢しいこのおじさんは先手を打ってきた。

「驚いたかい？ 養護学校の遅れた知能の子供達に僕のような人間がいて」

「ええ」私は素直に負けを認めた。このおじさんは滅多にいない“大人”だったからだ。

おじさんも私が観念したのを雰囲気を感じ取ったのだろう、くすりと苦笑し素直に説明してくれた。ちゃんと教師が生徒に教えるような大人の態度で。

「逆なんだよ。君等が考えているのと。知能の遅れた子程、自分で主張ができない分、こちらが気を使ってあげないといけない訳だから、より頭のいい悟れる人間でないと駄目だ」  
なるほど、と思った。

彼らが遅れている分、普通の人では多分彼らの言いたいことを正しく理解できないから、理解できる賢い人間が世話をする。筋が通っていて実に納得できた。ミチルの様子を見やるとまだ、車を見詰めていた。そんなに車が楽しいのだろうか。じ、とミチルに焦点を合わせると隣からおじさんが訊いてきた。

「ミチル君が珍しいかい？」

「少し」

「珍しいだけかい？」

少し考えてから、正直な気持ちを言った。もう、負けを認めた以上このおじさんに偽る意味を失くしたからだ。

「興味が、少しだけあるわ」

そうか、とおじさんは頷いて嬉しそうに笑った。

「ミチル君が誰かをここに連れてくるのは本当に珍しいんだよ。自閉症のせいだね」

「何故？」と簡潔に問うと、おじさんがちゃんと私の疑問の答えを用意してくれた。

「自閉症の人は、他の人とコミュニケーションを取ることが苦手だからだよ。人と関わる事や自分の気持ちを上手く伝えられず、行動も自分勝手。そして、普通の話し方もできないし、人と視線を合わせない。原因なら色々あるよ」

「そう。その全てミチルに当てはまるから、納得。なら、何で私をミチルは気に入っているのか不思議ね。ミチルは昨日、私を妖怪扱いしたわ」

ははは、とおじさんが実に可笑しそうに笑うので、私は睨んでやった。

「ははは、ごめんごめん。ミチル君は絵の事になると人が変わるか

ら。多分、君がミチル君の絵を褒めたからだよ。本当は嬉しかったんだね」

「でも、昨日のミチルは私のことを嫌いと言っていた。それに私、あなたにミチルの絵を褒めたと言っていない」

何で、知っているの？ と私は言葉にそれを含めて二つの質問をした。

やはりおじさんは難無く答えた。

「昨日、ミチル君が自分でエミはどうのって散々話してくれたからだよ。もう一つの質問は、もう僕は答えているのだけど、もう一度説明してあげよう。自閉症の人は自分の気持ちを上手く伝えられないからだよ。ミチル君は君の事を好いていながら、君の一部を嫌いだと言っただけだよ。普通の人だったら、相手のこの部分が嫌いだとそう相手に伝えるけど、ミチル君の場合はそれが上手くできずに、相手を全て否定する表現をしたんだ」

不愉快だった。このおじさんが既に私の名前をミチルから聞いて知っているのと、私が自閉症の症状を忘れていたことが不快だった。前者は相手だけ知っているのに自分だけ相手の名を知らないというのが不快で、後者は忘れて安易に人に頼ってしまったのが不快。

どうにも、このおじさんの前では調子を崩されているようではない。

「おや、どうやらミチル君は君のスカートをそろそろ離す時間だと思っよ。離れたら直ぐに帰ってね。抱き着かれる前に、だよ？ いね」

「それって、どういう」

質問はする前に答えを突きつけられた形となる。その瞬間、大気が震えるかと思う位の音量が学校中を響き渡った。ミチルだ。ミチルが先程と同様に暴れだし、大音量で泣き出したのだ。もう、気がつけば周囲は真っ暗となって、車の一台も止まっていなかった。

「エミちゃん。ほら、そろそろ帰った方がいいよ。暗いし」

「何で、ミチルは泣き出したの？」と訊いたが「何？ 何言ってる

か、全然聞えないよ」とおじさんが言うので仕方なく私はおじさんの耳元で「何で、ミチルは泣いてるの!」と大分大きな声で訊く破目になった。おじさんも大声で返す。

「ミチル君はね! 親御さんをいつもこの時間になると待っているんだよ! それでこないと分かると、この調子で泣き出すんだよ! 全く、参るね!」

「ミチルの親はどうしているの!」

私はほとんど怒鳴りあう恰好で質問し、おじさんがその質問に答える前に、ミチルのアクションによって全ては決壊した。先程同様に「うぎゃあああ」と大声で泣き続けていたミチルはやはり先程と同様の行為を繰り返し返そうとしたのだ。ドオッとミチルは全体重をかけて私を押し倒そうとしたので、おじさんの忠告通りに私はひよいとミチルをかわした。

見事に抱きつく相手を失ったミチルは地面に転げ周り、更なる大音響で泣きじやくり始めた。しかし、このアクションによって私のチェックのスカートからミチルの手が外れた。

「さあ、エミちゃん。帰るんだ。そうでないと、後一時間位いなきやいけなくなるよ」

そんなの御免だった。それでも、どうしても気になる質問があつて、戸惑っているとおじさんは私の意思を汲み取って諭すように告げた。

「何時でも、ここに来ていいからね。ミチル君も君が来れば喜ぶし、その時に質問の答えは取っておこうね」

このおじさんが相手だと、つい自分の年齢を忘れそうになる。私は十七歳のはずなのに、このおじさんの前だとまるで五歳の子供と言われても納得できそうだった。私は五歳の子供のような素直さでコクリと頷くと踵を返して、養護学校の出口へと向かった。ミチルの泣き声がどれだけ進んでも後ろから聞こえてきて、何だか嫌な気分になった。絶対にミチルの親の話の聞きにこよう、と思った。私はそう心の中で誓うと、足を止めくりと反転した。

「おじさん！ 私、あなたの名前をまだ訊いていないわっ」

今度、来た時困るでしょ、そんな意味を込めた。

多分、おじさんは賢いから私のそんな考えを悟って、くすりと苦笑したのだと思う。苦笑いに似た笑いを浮かべ、ミチルのことをあやしながら、名乗った。

「岡崎功治、だ」

「中曽根工三、よ」

はじめまして。

岡崎と私は、その場で会釈だけをして其々の仕事場へと戻った。

## 【第7話】      （後書き）

はじめまして、作者です。

【第7話】まで読んでくださった方、本当にありがとうございます。第7話の自閉症の話で、私なりに調べて書いたのですが、実際の自閉症の症状とは異なることもありますのでご了承ください。

どうぞ、8話以降も暇があったら読んでやってください。

## 【第8話】

次の日、私は最悪の気分で学校へと行った。その理由としては、養護学校から帰宅後、怪物に帰りの時間が遅いのだと散々小言を言われ、小遣いを少々減らされたこともあるが、やはり一番の懸念である、綾香の問題が私の脳裏を埋め尽くしていたからだった。

昨日、携帯のカメラで撮影された写真を綾香はどういった使い方をするのか、それだけが心配であり、心の怒りを増大させる。何とかその罨を回避して、綾香を懲らしめねばならない。どうにかして、綾香に身の程という奴を弁えさせないといけない。

私はいつもと同じように、しかし心の中では綾香を絞め殺すことだけを目標に、校門を潜り、階段を踏みしめ、三年四組の教室まで足を運んだ。白い硬質である教室の扉を開ける前に、一つ、ゆつくりと深呼吸をした。吸って、吐いて。呼吸を整え、いざ出陣とばかりに私は教室の扉を開け放った。恐らくは、綾香が既に先手を打って、黒板のど真ん中に私とミチルの写真でも貼られており、それによつて教室は静まり返る……と。

そのはずだった。

しかし、私が教室に一步足を踏み入れても、二歩踏み入れても、状況に変わりはないかった。そのまま一步二歩と足を進め、私の席まで何事も無く辿り着いてしまつて、むしろ拍子抜けした。いつもと同じ雰囲気の教室だった。馬鹿な男子生徒達の雑談、腐った女子生徒達の界限、オタクの徒党を組んだ不気味な集団、一人ポツンと机に座る文学少女。そして、惨めに二つの尾をピクピクさせる、デブでブスで愚かな聡子。

何もかもが、いつもと同じであつた。ただ一つ、違ふとするのは綾香の姿が見られないだけ。綾香が朝、遅刻してくるのとふけるのは、そう珍しいことではないのだが、今日だけは嫌な予感がした。



なぜなら、歪んだ笑みを浮かべた綾香を侮ってはいけなからだ。そして、その予想は三時間目の数学で、見事に的中する。

三時間目、数学・担当教員は明石。

その日の数学の授業は何処かいつもの雰囲気と違った。皆が何かに気を奪われて集中できないにも関わらず、その何かが誰にも分らないといった苛立ちが教室内を取り巻いていた。そのせいで明石も何処か苛立たしげに、チョークを鳴らしつつ、実に不機嫌そうに教壇に立っていた。

そんな皆を狂わす電波を発していたのは、やはりと言っかなんと言っか紺野綾香である。

綾香は昨日の私と全く同じ恰好をしていた。第二ボタンを開け放ち、髪を高く結い上げてこの学校では禁じられている化粧まで施していた。一体何処にそんな自信があるのか、今日の彼女には確実に私に勝てる勝算があるらしい。そうでなければ、ここまで目立つ恰好はしない。これはある意味、私への宣戦布告なのだ。

これでお前の時代は終わる、今日からあたしがお前の座につく！  
そういう宣言に違いないと私は受け取った。ちらり、と私は綾香に視線を巡らすと、ギラギラとした視線を返してきた。お互いの視線が交錯し、バチリと火花が散った。

さあさあ、バトル開始だ。

私が勝つ。と私は強く思う。

あたしが勝つ。と綾香が強く思う。

そして、私達は同時に強く、激しく、思うのだった。

私、あたしこそ、真のリーダーなのだから、と。

まず、最初に遅れを取らざるを得なかったのは私の方だった。こんなクソ忙しい場面で明石が私にまた、回答の指名をしたからだ。断る訳にもいかず、私は黒板に向かった。前の席にいる綾香の脇をすり抜け、黒板を目指す。ここで第一ラウンド勃発。綾香が私のい

く手に“短い”足を投げ出し、足払いを繰り返したからだ。私がこんな愚かな罠に掛かるはずもなく、“短い”足を思い切り踏みつけてから黒板の前に立った。綾香が痛みとも悔しいとも取れる呻き声を漏らす。第一ラウンドは私の勝ち。

猛然としたスピードで私は数式の回答を書いた。明石も他の生徒たちも皆啞然として私を見ていた。構わず私は凄いスピードで数式を殴り書く。今日は何の捻りもなく、基本回答のまま素直に教科書通り答えてやった。書き終えると同時に踵を返し、綾香を睨みつけて席の途中でやはり第二ラウンド勃発。足払いが出来ないと理解した綾香はシャーペンを片手に私が綾香の席に近づくの待っていた。でもやはり綾香は愚かだった。こちらは移動できるのだ。

それに対し、綾香は席から立ち上がることをできない。私は綾香の席を大幅に避けて、自分の席に戻り、席に着くなり消しゴムを握った。そして消しゴムに謝る。

消しゴムよ、お前は期末テストでも役立つてくれた。お前がいなかったら、多分私はこの成績を維持できなかっただろう。だから、お前にはもの凄く感謝している。そして、お前の最後は決して忘れない。綾香に反撃するべく散つてえ、……来いッ……！

慎重に狙いを定め、私は綾香の後頭部目掛けて消しゴムを投擲した。

……ひゅんッ、………つとん！（見事命中！）………つとつとつと。

そんな間抜けな音を発して、消しゴムは見事その最後の役割を果たし、教室の地面にバウンドした。怒りに燃えた綾香が私の方を振り返る。再び、私と綾香の視線が爆発する。

覚えてろよ？

お互いにそんなメッセージを瞳に込め、それと同時に相手の瞳からも読み取った。

今はまだ、こんなものだ。だが、ここから恐らく争いが激化するのだろう。前の喧嘩もそうだった。最初は小さな火種が火山の噴

火のようにエスカレートしていく。私達の喧嘩はそういう喧嘩の仕方だった。だが、私はただこんな幼くガキがやるような悪戯をしたくない。これは今後の布石なのだ。そう、後の為の貯金。

その布石はもう姿を現した。

「コラッ、紺野！ 授業中に余所見をするんじゃない！」

ビクリと綾香が体を震わせ、にやりと私が笑う。内心で私は大笑いだ。莫迦め。お前如きがこの私に敵うとも思ったか。つは、喧嘩もここで終わりだな。呆気なかった。実に呆気なかった。周囲の生徒達もそう感じたのだろう。一同ホッとしたに違いない。

だが、今日の綾香は一味違った。

に、とあの独特の歪んだ笑いを繰り出して、自信のある態度で明石を見返したのだ。

次に起こるのは、明石の指名だというのに。

「紺野、次の問題をお前が解け」

当然の如く、また不機嫌でもあった明石は綾香を指名した。

「はい」と何時になく、嬉しそうに椅子から立ち上がった綾香。その時、何かの紙切れを握ったのを私は目敏く確認していた。嫌な予感がした。心臓がドクン、と跳ね上がる。綾香は慄然と黒板の前に立ち、チョークを握った。そして、そつと私の方を振り返る。

「……先生」綾香が言う。ますます私の鼓動が暴れまわる。

「何だ、紺野。ヒントが欲しいのか？」

そんな明石の的外れな言葉に、綾香は静かに首を横に振った。明石の眉間に皺がよる。

「何だ、具合が悪いのか？」

再び、綾香が顔を俯かせながら、さもか弱い女の子のように首を振った。ああ、賢い私の頭が理解してしまった。綾香の策の全貌が。思わず、顔が引きつる。もう綾香の次の言葉が容易に予想できた。私は必死にどうこの窮地を切り抜けるか思考を回転し始める。綾香は決死の覚悟といった、表情で明石に詰め寄った。

「先生。あたし、もう黙っていられません！ あんな、あんな事が

あったっていうのに、友達が、あたしの友達があんな酷い目にあっ  
たっていうのにッ。先生に相談したいことがあるんです!」

予想通りの言葉。

クラス一同、啞然として綾香の泣き真似を見守る。それは明石も  
同様に、驚愕といった様子だった。綾香のこんな姿を誰も想像でき  
ないのだろう。こんなか弱い姿なんて。

「先生。あたし、言います。あたしの友達は、あたしに言うなって  
止めたんですけど、あたし、証拠があるんです。だから、警察に通  
報させてください!」

警察、という剣呑な単語が出てきたことで、明石が狼狽した。

「な。け、警察う?」

「はい、先生」

間髪入れず綾香が畳み掛ける。

「あたしの友達は口に出すのもおぞましいことをされたんです!」  
そういつて、昨日の携帯の写真をちゃんとご丁寧印刷した紙を  
クラスの皆の目の前で見せびらかした。今朝、綾香の姿がなかった  
のは、これを印刷していたからに違いない。全く、ご苦勞なことだ  
もちろん、紙切れには私がミチルに押し倒されているようにしか見  
えない写真があった。クラスの皆がざわり、と沸き立つ。明石がま  
じまじと、紙を受け取って凝視した。

「中曽根、お前……」

明石が信じられないといった風に私の方に視線を向けてくる。

信じないでよ、そんなもの。思わず溜息を吐き出したくなるのを  
必死に堪えて、私は席から立ち上がった。背を伸ばし、自信を持っ  
て口を開く。こんな作戦に動揺するような真似、この私がするはず  
もない。私の思考は答えを出した。結果は分かりきっている。

「それ。私の従兄です。彼にはちよつと困った癖があつて、抱きつ  
き癖があるんです」

取ってつけたような言い訳だったが、それでも私はこれで押し通  
す自信があつた。

「だが、紺野が、口止めつて……。お前、まさか脅されてるのか！」  
全く、妙な所で生徒思いの奴ね、と私は内心舌打ちするが、用意しておいた答えを言う。

「綾香はきつと、誤解したのだと思います。大体、その写真。服、着てるじゃないですか。それに行為前なら、警察に通報するなり人を呼んでくるなりできたはず。何処で見えていたか知りませんが、本当の“友達”がただ、写真だけ撮って逃げますか？」

至極、論理的に私は綾香の穴を指摘する。綾香は苦し紛れの言い訳を口にした。

「だって、そんなことしたら、あたしまで襲われるかもしれないじゃないか。なあ？」

ははは、口調が元に戻ってるぞ。ボロがどんどん露呈している綾香は実に滑稽だった。

明石が私と綾香を交互に見比べた。私を見て、綾香を見る。暫し明石はどちらの言い分を取るか、逡巡していたようだが、やがて視線は私に固定された。どうやら結論がでたらしい。

「紺野、悪戯にしては度が過ぎるぞ。一つ間違えば警察沙汰だ。それも相手は冤罪だ。ほれ、とつと、問題を解け」

「え、」

綾香の顔が凍りついた。本当に愚かな奴だ。私の今まで培ってきたステータスは、ちよつとやそつとでは揺るがないし、まして綾香と比べれば私を取るに決まっている。まず、信用度からして天と地ほど差があるのだから。今までもずっと品行方正であつた私と、トラブルメーカーの綾香。比べるのも愚かしい。

ほんと、莫迦なんだから。

綾香は、この騒ぎで数学の問題どころではなくなると思っていたのだろう。全く答えが分からないに違いない。逆に窮地に追い込まれていた。蒼白になって私の方を見てくる。

今まで綾香が指名された時はそれとなく、私が答えを教えてあげていたのだ。

私はその視線を敢えて無視した。

結局、綾香は授業時間以内にその問題を解けずに明石に散々説教されていた。

答えは、 $3\log 2 + 1/2$ よ、お莫迦さん。

## 【第9話】

やっと学校が終わった。危うく綾香によって、“レイプされた可哀想な女の子”に仕立て上げられそうになった私は、綾香や裏切った藍達とつるむ気になれず、そのまま一人で帰ることにした。そうして下駄箱まで来て、下駄箱の扉を開きローファーを手にとって、ピクリと動きを止める。

紙？

ローファーの中に何かがあった。くしゃくしゃの紙切れ。私はその紙を中から取り出して、裏を見る。表は白紙、ならば裏に何かが書かれているはず。そして予想通り、綾香の汚い字で『絶対、許さないからな！』と短く書かれていた。呆れ混じりに溜息を吐く。どうしてこう愚かなのだろうかと思う。

私ならば、憎い相手にはなるべく自分が憎んでいると知られないよう行動する。理由はその方が圧倒的に有利だからだ。相手が自分を知らなければ、幾らでも復讐のやり様はある。幅も広がる。卑怯？ 勝負に卑怯なものもない。要は勝てばいいのだから。

その辺、綾香はまだまだ甘いと思う。

「まあ、私も許さないから。ここで許して、なんて言われても絶対許す気なんてないけど」

くすり、と一人で笑う。私は紙切れを握りつぶしてゴミ箱に放った。さつさとローファーを履いて学校を出る。このまま家に帰る気分ではなくなってしまった。ムシャクシャする。胸の中がどす黒い感情で渦巻いていた。何処かで時間を潰してから帰ろうかと考える。買い物でもして帰ろうか。いや、一人で買い物しても詰らない。どうしたものか。

あ、そういえば……。

昨日、絶対にミチルの事情を聞くのだと意気込んだのを思い出し

た。ちょうど家にも帰りたくない気分だったので、私は『高見高等養護学校』へと足を向けることにした。

道は既に記憶していたので、学校には容易に辿り着けた。道は入り組んでいるのに、岡崎のおじさんが地図等を渡さなかったのは、きつと私の頭脳を見抜いていたからに違いない。私はミチルにも興味を引かれていたが、それ以上に岡崎に会いたかった。現在、私には相談したりできる頼れる大人がいないうに等しかったから。

母親は怪物だし、父親は単身赴任。学校の教師達は不甲斐ないし、祖父祖母は遠い北国に住んでいる。誰も、私を気にかけてくれる大人はいなかったのだ。まあ、気にかけてほしい訳でもないのだけど、もう子供じゃないんだから。

私は養護学校の校門を潜った。

一度学校から出て、また学校の校門を通過するのは変な感じだった。

そのまま私は道沿いに進んでいく。校内へと侵入し、靴を脱いでスリッパに履き替えた。受付のような事務のような窓口に行き、女の人にミチルの場所を聞くと、すんなり教えてくれた。随分と甘いセキュリティだなと思いつつ、ミチルのいる二階へと上っていく。突き当たった道を左。そしてその先を真っ直ぐ行つた教室にミチルはいた。

一番後ろの窓際。丁度私と同じ席にミチルは座っていた。

「……ミチル」

やはりミチルは無反応。今日も体を前後に揺すり、スケッチブックに何かを描きつつっていた。服装も昨日と同じく、白いシャツに黒いズボンといった清潔すぎる布を纏っている。私はやはり前と同じようにミチルの後ろに回りこんで、スケッチブックを覗き込む。

描かれていたのは、窓から見える街の風景。

やっぱり上手かった。ただそのままそっくりな絵ではなく、何か引き寄せられる絵。

「上手ね」



二十秒後、ミチルが口を開いた。

「あ、ありがと」とミチルは言った。この間と同じフレーズに私は苦笑する。

「今日は、公園には行かないの？」

こくり、とミチルが頷いて、「きょうは、いっちゃいけない、日」とポツリと言った。

私はミチルの隣の机へと座った。ミチルは只管に、私の存在を無視して真剣な眼差しでただ絵を描いている。

普段なら、この私を空気のように扱う男など極刑ものだが、不思議とミチルだと許せてしまう何かがあった。私は机にうつ伏せになって、ゆっくりと眼を閉じた。今日は疲労する出来事が多かったから、何だか少しほっとした。どうせ、ミチル自身にどうして親が来ないのなんて聞いても、まともな答えは返ってこないだろう。このままここで岡崎が来るのを待とうと思う。

すると、何だか睡魔が襲ってきて

ッ。

「ミ君！ エミ君！ 大丈夫かい？」

ガバっと、机から飛び起きた。がたんがたと机が揺れる。寝ぼけた頭で隣を見ると、ミチルが先程と同じ姿勢でまだ絵を描いていた。そして声のした方向を見ると、岡崎がいた。放心状態で私は岡崎を凝視して、状況を理解して青ざめる。

「い、いいいい今、何時？」

虚を突かれたように岡崎が腕時計を見て答える。

「五時二十一分」

それを聞いて私はほっと肩の力を抜いた。寝過ごしたのかと思つた。最悪、八時を予想した。もし八時なんて時間に家に帰れば、怪物に殺される。殺されないまでも、暫く外出禁止令が発令してしまう。本当に危うかった。何て失態だと己を戒める。

「起きたかい？」

「ええ。起きたわ、完全に」

「いや、具合が悪いのかと思ったよ。大丈夫かい？」

平気よ、と私は短く答えた。単純に疲れていただけだろう。だが、岡崎はまだ心配そうに私の顔を覗き込んできたので、手でそれを制す。本当に具合など悪くない。そう意味を込めると岡崎はあつさり身を引いた。やつぱりこのおじさん好きだと私は思った。大人特有のしつこさがいい所がいい。それにしても、と岡崎が言った。「よくここまで入ってこられたね。ここのセキュリティは結構厳しいんだよ？ 部外者は受付や守衛さんに必ず呼び止められるはずなんだけどね」

「“あれ”で？ 私、一度も呼び止められなかったわ」

守衛は笑顔で私に手まで振っていた。岡崎は罰が悪そうに頭を掻いた。

「いや、参ったね。多分、エミ君があまりに堂々としていたからだと思うよ？ 君、無意味に偉そうだもん」

「失礼ね」

「いや、でも本当のことだろう？ まあ、その制服を着ていれば、守衛も気を抜くだろうね。超エリート女子高生の変質者や泥棒ってのは、あんまり考えられないし」

それもそうね、と私は頷く。この制服にはかなりの効力があるのだ。私の通う高校は有名な進学校だ。その制服も人々に知られており、制服で外を歩いていると人々の眼が変わる。ああ、あの有名進学校の生徒さん頭良さそうに見えたよ、という風に見られるのだ。

「まあ、とにかく今度来るときは、このゲストカードを受付に見せてから入ってね」

と、岡崎が黄色いカードを私に手渡した。それを受け取ってカードを見る。黄色いカードには『お客様専用』とゴシック体で大きく書かれており、その下に中曽根エミと私の名前が書かれていた。カードの裏を返すと、バーコードがあった。すると岡崎が口を挟む。

「あ、そのバーコードを扉にあるボックスに通せば、色んな扉が認

識して開くようになっていたから。大抵の場所は入れるよ。校長室とかスタッフ専用部屋や寮以外の、一般生徒が入れるような場所ならだけだね」

「いいの？ こんなカード、貰っちゃって」

「いいよいいよ。そう重要なカードでもないし。君がくるとミチル君の調子もいいし」

隣にいるミチルに視線を向ける。やはりミチルは相変わらず。スケッチブックに凄い集中力でもって絵を描いていた。いつも通り、何処も変わっていないように見えた。

「何処が調子いいのか、分からないわ」

「いつもなら、これ位の時間帯になるとグズリだすんだよ」

「グズリ、……って」

子供か、と思う。

「ま、こんな所にも始まらない。食堂にでも移動しようか。聞きに来たんだろう？ ミチル君のお家の事情とか。色々……」

「ええ」

私は椅子から立ち上がって、教室の出口に向かった。岡崎が前に行く。ミチルは動かない。教室の出口に向かう途中、ちらりとスケッチブックの中身が見えた。

あ、

スケッチブックには寝ている私の姿があった。完全に眠りに落ちた、至極だらしない私の顔が鮮明に描かれていた。涎まで垂らしている。寝ている間、ずっと私の顔を見られていたのだと思うと、ほんのりと顔が赤く染まった。多分、私はミチルに好かれているのであろう。嫌いな人の寝ている姿を敢えて絵にしたりはしない。特にミチルのように絵に拘りを持っていては尚更だろうと思う。

でも、何も寝顔を描かなくてもいいじゃないかと思う。何だか複雑な気分だった。

前に行く、岡崎がにやつと笑った。

「ね？ 調子いいでしょ？ ミチル君」

なんて、奴……。この絵のこと、知ってたのね……。っ！  
私は岡崎の本性を垣間見た気がした。何てヤツ。

## 【第10話】

岡崎に連れられて私は食堂まで移動した。生徒の姿は疎らだった。もしかしたら、ここはスタッフが利用する目的の食堂なのかもしれないと思った。理由は単にミチルのような障害者が自分で注文しているのを想像できなかったからだ。そんなことを考えていると岡崎が缶ジュースを二本、自動販売機から買ってテーブルについた。岡崎が缶ジュースを一つ、私に遣す。ポカリだった。岡崎はコーヒ―。

「奢りだよ」

「当たり前よ」

岡崎が苦笑して、やっぱ君は無意味に偉そうだよ、と言った。そうかもしれない。こういう生き方が染み付いてしまっているのだ。悲しいことに。

「悪かったわ。癖……、というより虚勢ね。虚勢を張るのが染みついているの」

「あんまり感心しないね。肩肘張っていると疲れるよ。それに無理もくる」

「知ってるわ。でも、家庭環境も学校の環境もあまりよくないの。だからこうでもしないと、苛立つちゃって仕方がないのよ。分かってはいるんだけどね」

そうか、と言っただけで岡崎はそれ以上、訊いてはこなかった。普通の人は訊く。何で、家庭環境が悪いの？とか必ず興味本位にそれも無神経に質問する。でも岡崎は、持ち前の聡明さから私が訊かれるのを嫌がつてるのを見抜いたのだろう。やっぱりこの人は大人だった。ちゃんと相手を考えて会話してくれる。そう思うと自然と感謝の言葉が口から出てきていた。

「ありがとう」

「何でだい？ 僕は何もしていないつもりだよ？」

「いいの。それより、ミチルのことを教えて。後、この学校の内情も知りたいわ」

「……内情って。難しい言葉を使うね。女子高生の会話じゃないよ。流石、有名進学校生」

フンと私は鼻で笑った。その有名進学校生でも莫迦は大勢いる。それも吐いて捨てる程。

「ごめん、気に入らないこと言っただけかな？」

岡崎が敏感に言ってくる。

「別にそうじゃないわ。嫌なことを思い出しただけ。それに難しい言葉を使うのはかい……。母の影響よ。小さい頃から姉と一緒にずっと勉強させられていたの。私は国語より数学とか化学の方が得意なのだけど……。それより本題に入って。少し早めに家に帰らなきゃいけないの。訊いときながら急かして悪いわね」

ああ、ごめんごめんと焦ったように岡崎は私に謝って、少し間を置いて話した。

「うーん。そうだなあ。まずは養護学校について説明した方が時間の節約になるな。うん、じゃ養護学校っていうのは、障害のある子供たちの学校ってのは分かるよね？」

私が頷く。

「よかった。その養護学校は大まかに三つに分けられるんだ。一つが知的障害者を教育する学校。二つは肢体不自由者を教育する学校。三つは病弱者を教育する学校。一つ目はそのままの意味、知能が少し遅れた子やちょっと情緒不安定な障害を抱えた子。ミチル君なんかは一だね。二つ目は体が不自由なだけの子。三つ目は体が病気で不自由な子が主に通う。ここまではいい？」

「ええ。なら、この『高見養護学校』は一つ目の知的障害者用の学校なのね」

ミチルがいるのだ。それ以外に考えられない。だが、岡崎はにやっと笑った。

「ところが違うんだなあ。『高見養護学校』は一つ目と二つ目の両方を兼ねている訳」

得意げに岡崎がにやにや笑うので、予想が外れたようで何だか悔しい思いが込み上げる。

「それで？ それはどうしてなの？」

「そう、何故、本来なら三つの種類に分けられる養護学校が、二つの種類も兼ねているのかというと、話は税金に飛ぶんだ。養護学校ってというのは普通の学校に比べて遥かに税金が高い。普通の学校の十倍だ。だから、地域によっては支えきれずに廃校になる、なんて例も少なくない。だから、何というか『高見養護学校』は以前二つの学校だった訳」

よくある話だ。特に不景気な現代の世の中では、普通の人だけでも食べていくのに精一杯で、きつと障害者の人たちまで税金を回す気にはなれないのだろう。

「なるほど。吸収合併したのね」

「そういうこと。肢体不自由者用の学校だった『冴見』さんの所が内に移転してきたんだ。で、元の内の名前が『高沢養護学校』なん

で、上と下を取って、『高見養護学校』」

「単純ね」

「案外そんなものだよ。世の中結構考えているようで何も考えてない」

「なるほどね。大体、分かったわ。続けて」

ポカリを半分程飲み干し岡崎を促すと、岡崎も缶コーヒーを啜った。イメージ通り無糖のブラック。コーヒー缶を置き、岡崎が説明に戻る。

「今、話したように、障害者の世話は凄く大変だし、お金もまあそこそこにかかる。だから、兄弟がいたりすると、お母さんとしては大変なんだよね」

「いよいよミチルの話らしい、と私は思った。」

「お金もかかるし、手間もかかるからミチルの母親はここに捨てて

いったというの？」

「捨てていくつていう表現は適切じゃないんじゃないかな」

「じゃあ、何だつていうのよ」

少し低めの声で私は岡崎に訊いた。何の理由があっても、親が子を蔑ろにしたり虐げたり抑圧するのは許せない。それは何時も私が怪物にされているのと同じだからだ。ここに、『高見養護学校』に足を運んだのもミチルが親に虐げられているのではないか、と思ったのもあるのだ。それなら絶対に許せない。そんな親、この私が苦しめてやる。

と、少々の間をおいてから岡崎は私の質問の答えを告げた。

「捨ててつたんじゃないくて、売つたんだよ。ミチル君の母親はね」

多分私はキョトンとした間抜けな顔をしていたと思う。やがて、私はにやりと笑った。

「どういう意味なの？」

「ん？ そのままの意味だよ？ 金がかかるなら、自分で世話をすればいいのさ。でもお母さんは態々養護学校というお金のかかる施設にまで入れて、迎えにもこない。態々お金のかかる寮に入ればなしだ。その方がよっぽど手間も金もかかるよ？」

「なるほどね。もう分かったわ。そうよね、お金がかかるのが嫌なら自分で世話する道もあるものね。それでも施設に入れているのだから、捨てたのではなく息子を金で引き取ってもらってるんだわ。汚いわね、大人の世界は」

まあ、そう言わないでよと岡崎。

一応は教員の立場からミチルの母親の苦労を弁護しているような言い方だが、その実内心では絶対に非難している。岡崎はそういう大人だ。本心を隠し、ここぞというときにしか本音など露呈しない私に近いものを感じる。だから、今私に対して本音をぶつけてくれたのが嬉しい。一人の人間として対等に認めてくれている気がしたのだ。

「それで、手間のかかるというのはどういう意味なの？ ミチル、



別に手間なんてかからないように見えるけど。だって、ずっと絵を描いていれば幸せって感じじゃない？」

悲しそうなそして私を哀れむような顔をして岡崎が目を瞑った。

何か、妙なことを言ってしまっただろうか。私は。と不安な気持ちになってくる。何だかいきなり岡崎は草臥れたサラリーマンのよ  
うな表情をして説明しだした。

「あのね、障害は普通とは違うから障害なんだ。普通の人と同じなら、ミチル君は君等と同じ学校に通ってる」

「私には、何処が異常なのかよく分からないわ。ミチルには確かに変な所がある。それは知ってる。体を揺らしたり人と話が出来なかったり。でもミチルは害ではないわ」

再び岡崎は缶コーヒを啜って、やがて渋い表情で溜息を吐き出した。

「ミチル君には二人兄弟がいるんだ。二つ下の歩君。三つ下の望君。何だか名前に拘りがあるのか、皆三文字なんだよね。ミチル、アユム、ノゾムって」

「何か関係あるの？ それ」

「いや、全然無い」

「……………」

鋭い視線で睨むと、「ごめんごめん急いでいるんだっただね。ちょっと気分変えようと思ってね」と草臥れたように岡崎。どうやら私の気分を変えてくれようとした訳ではなく、岡崎自身の気分を変えたかったらしい。その試みは成功したのか、少々覇気のある口調で説明を再開した。

「話を戻すよ。そう、それで、歩君と望君の彼ら二人は健常者なんだ。当然、受験を控えて勉強していかなきゃならない。そんな中、自閉症のミチル君がいては彼らは勉強にならないよ。君もこの間目の当たりにしただろう。大声で泣き叫ぶミチル君は騒音なんてものじゃないよ？」

「でも、それにしたって家から追い出すのは酷いわ」

「自閉症の子は、これでもミチル君は軽度の方なんだけど、それでも『何時もと違う』日常を恐れるんだ。些細な相違でも駄目なんだ。規則性があつてそこから踏み出せない。同じ時間に同じことをして、同じ道具でないといけない。彼らはその一定の法則から外れるのを極端に拒むんだ」

「？」

私は首を傾げた。いまいち分からない。実感が湧かないのだ。私の反応を見て、岡崎が説明の方向を変えてきた。

「前はねちゃんと迎えに来てくれたんだ。お母さん。でも弟さんの歩君が高校受験の時期になった辺りからミチル君を寮の入れたんだ。多分ミチル君にはいいことだったと僕は思うよ。だって受験って大変でしょう？ それこそ家族ぐるみでやるから。家の中は何時もの雰囲気とガラリと一遍しちゃうんだ」

「……それは、よく分かるわ」

嫌というほど知っている。親は子供の受験に敏感になる。子供は親が気にすれば気にするほど逆に意固地になって怒りを内に溜め込む。親はそんな子供が許せない。親がこんなに心配しているというのに、子供のくせになんて生意気なの。と思い込む。それが逆に子供の負担になつていることに気づいていないのだ。やがて家全体がピリピリしてくる。

私だって、伊達に有名進学校に合格した訳じゃない。

「家の中、ドロドロになっちゃったのね。ミチルの家は。確かに受験の時期にはちょっとした騒音や笑い声ですら、キレル要因になりかねないもの。そうね、私の受験の時期にそんな大声を家の中で出したりしたら、母がキレル前に私がぶちキレてたかもね」

岡崎が君らしい意見だね、と苦笑した。

「つまり、“そういうこと”なんだよ。受験は家が変わる。受験生本人もいつもの弟じゃなくなる。その点、ミチル君はちょっと何か変わったことがあると大騒ぎ。さっきの法則から外れるのが自閉症の人は苦手って話に戻るけど。どの位駄目かを言えば、朝食のお茶

碗や箸があるだろう？ ご飯を食べる、茶碗」

「ええ。それが？」

「もし、そのお茶碗が昨日と違ったら君はどうする？」

私は少し考えてみる。怪物が何時もと違う食器でご飯を出してきたら。とりあえず、食べるだろう。朝は時間もないし、食器など食べればなんでもいい。まあ、時間があれば食後にでも怪物に、「私のお茶碗、割れたの？」とでも訊いてみるかもしれない。

「とりあえず、そのままご飯を食べるわ」

「だよ。でもミチル君は違う。ただお茶碗が違っただけで食事をするのを拒否するだろうね。元のお茶碗に戻るまで、絶対に物を口にしないだろう」

え、と私は驚く。何で、そんな無駄なことをするのか理解できない。そのまま食べてしまえばいいではないか。また、受験の時期に朝からそんなゴタゴタがあつたら、と考えるとミチルの弟に同情的になつてしまった。私だつたら、そんな奴、間違ひなく絞め殺すつ！

「つまり、“そういうこと”なんだ。ミチル君はただでさえピリピリした家族の神経を逆撫するような行為を平気でやる。いや、自分で分かつていないんだ。家族に何で怒られるのか。それが、周りの世界の状況が、全く理解できないのがミチル君の障害なんだ。でもそれなのに家族はミチル君を叱って疎んでくる。家族の方達だつて病気だと理解していても理性だけじゃ限界もくる。感情的になつてミチル君を虐待でもするよりは、ここにいた方が全然マシさ。障害者の虐待なんて洒落にならないからね」

「……………」

物の見方一つだけじゃないんだな、と私は思った。片方の見方だけで判断はできない。物事そう単純じゃない。ミチルが悪い訳ではないし、弟が悪い訳でもなく、まして母親は子供を守ろうとしただけなんだから。それでも、ここは大人の母親が何とかすべきなんじゃないの？と思えてくる。大人だつて無理なことは無理と分かつてはいるのだが。

「……………」

「まあ、そう沈まないでよ。君がくるとミチル君は嬉しいみたいだし。微妙にミチル君のお母さんに似てるんだよね、君。少なくともミチル君をどうにもできなかったのはお母さんであって君じゃないんだし。それに施設に入れたって、会いにくるのは自由だ。それなのにミチルくんのお母さんは全然ここに来ようとしない。それもまた事実なんだから。ね？　そうでしょう？」

コクリと私は頷いた。すると岡崎が私の頭に手を置いて、ポンポンと軽く叩いてくれた。

何だか子供をあやすみたいな手つきだ。

「……そうね。私が気に病んだ所で何にもできない。それだけは確か。悪かったわ」

そう言っただけは岡崎の手を払いのけた。苦笑して岡崎が、やつぱ君、無意味に偉そうだよ、と言った。そうかしら、と高飛車に私が返す。

「じゃあ、もう一つミチル君に関する情報をあげるよ」

得意げに、自慢するように岡崎がそう言ったので、私は偉そうに何？と訊き帰した。

「自閉症の人には稀にね、凄く頭のいい人がいるんだよ。君もテレビとかで聞いたことがあると思うんだけど。よく『記憶の力』とかで結構出てくる」

テレビはあまり見ない私だが、脳内の知識と照合するとそんなのを聞いたことがあるような気がした。

「確か、自閉症の人って数字に強いとか、じゃなかった？」

「そうそう、それそれ」

それがどうかしたの？と私は訊ねる。すると、岡崎は実に得意げに、まるで我が子を自慢するかのように、よくぞ訊いてくれたという顔をした。何だか本当に嬉しそうだった。

「あのね、ミチル君もその一人なんだよ。自閉症の人には稀に、本当に稀に何だけど、何か特別な才能を持って生まれてくる子供がい

るんだ。ほとんどないんだけどね。本当に稀なんだよ。自閉症の人っていうのは、さつきも話したように人とのコミュニケーションを苦手としていて、そしてとある法則から逸脱できない。あ、絶対逸脱できないって訳じゃないけど、他人が手をかさなければ逸脱はできない。でも、そんな障害をかかえていても数字や暗号、音楽や絵といった分野で凄まじい能力を発揮する場合があるんだ」

ほんとうに稀だけどね、と岡崎が付け足す。

「じゃあ、ミチルの場合、絵なのね？」

話の流れではそうなる。確かにミチルの絵には何かを感じるのだ。何か特別な何かを。

「そう。ミチル君は一度見た景色や風景を瞬時に覚えてしまう、驚くべき能力がある。一回見たら忘れないってやつだね。そういう自閉症の人は他にもいて、音楽の優れた才能を持つ人で、彼は一度耳で聞いた曲を楽譜もなしに瞬時にピアノで弾いてみせる。そういった、いわゆる天才が生まれることがあるんだ」

「じゃあ、ミチルも天才なの？」

「ある意味ね。そういう人たちは世界では意外に活躍しているよ？調べてみると結構出てくるから。きっと彼等には僕等とは違った世界で生きているのだと思うよ」

ミチルの世界。ミチルにはきつと私とは違った風に世界が見えているのだろう。そんな世界、一度だけでいいから見て見たい気もした。

「見て見たいわね、ミチルの世界」

「見てるじゃない。君」

「え？」

どうやってよ、と私は不機嫌になる。すると岡崎はおかしそうに笑って答えを告げる。

「スケッチブック」

「ああ。それね」

あれだけ綺麗な絵を描くミチル。でも、その絵はただ現実の世界

そのままではなく、何処か雰囲気違って、似通ってはいるのだけれど、何処かミチルのスケッチブックの方が純粹で美しく見える。確かにあれはミチルの世界の一端なのだろう。

「あれの中身は全部、ミチル君の世界で見たものをそのまま写生しているんだよ？」

「そうね、そうだといいわね」

「何だか、断定的じゃないね」と眉を顰めて不満げに岡崎が言った。  
「だって、あれがミチルの見ているものとは限らないじゃない。好きに適当に描いているだけかもしれない。私たちにそれを確かめる術はないわ」

「夢がないねえ」

現実を重んじるの、と短く私。すると岡崎は不満そうに肩を竦めた。

窓の外を見ると夕闇が辺りを隠そうとしていた。時計を見やるとそろそろ家に帰る時間になっていた。もう大体の事情も聞いたし、家に帰ろうと思いついた。残ったポカリを一気に飲み干して、いそいそと帰り支度をする。自動販売機のゴミ捨て場までポカリ缶を捨てにいった。ついでに岡崎のコーヒー缶も持っていつてやる。

「悪いね」

「別にいいわ。ついでよ。奢ってもらったしね。そろそろ私、かえ

、

別れを告げようとした私はピタリと動きを止めて、ある一点を凝視する。その塊の色に私は目を見開いた。尋常じゃなかった。ありえない、と思った。何で、とも思った。突如、停止し一切の動きを亡くした私を不審に思った岡崎が、身を乗り出して、私の視線の先を追う。

「どうしたんだい？　そこに何が　、あるん」

私が凝視していたその塊を見て、岡崎も動きを止めた。

私が、その赤い塊の名を呼んだ。

「……ミチル」

「きゃあああああああああああああああああああああああ  
ああああああっ！」

その瞬間、何処からか女性の甲高い悲鳴が学校中に響き渡った。  
咄嗟に岡崎が反応する。岡崎がミチルに駆け寄って、肩を掴んで揺  
さぶった。

「ミチル君、どうしたんだい？ 何があった？」更に強くミチルを  
揺さぶって視線を集中させる。そして言った。

「何で、“血塗れ”なんだいッ！」と。

ミチルは全身を真っ赤に染め上げていた。顔も清潔なシャツも、  
あの美しい絵が描かれるスケッチブックですらも、全部、真っ赤だ  
った。まるで猟奇殺人の後のような凄惨な状況に私は身を強張らせ  
た。と、手が意思に反して震えているのに気がつく。体が恐怖を感  
じていた。恐怖を飲み込むよう努力したが、駄目だった。カタカタ  
と歯が鳴った。ミチルに対して、不気味という感情を抑え切れな  
かったのだ。

約三十秒後にミチルが答えを告げた。

「外でママを待ってた。そしたら、ひーちゃんが、屋上からとん  
できた。ボクのちよっと上で止まって、血がでた。いっぱい。いっ  
ぱい。でた。ひーちゃんとんできた」

弾かれたように岡崎は表情を強張らせた。どうやら、それだけで  
意味は通じたようだ。

「ひーちゃんは何処にいるか、ミチル君、知ってるかい？」

ミチルが背後を振り返って、方向を指し示す。

「そうか、分かった。僕は行くから、だからミチル君はここでエミ  
君といるんだ。いいね？ 絶対、動いちゃ駄目だよ？」大人しくミ  
チルが頷いて私のスカートを握った。私が顔を顰める。

「ちよっと、岡崎。私はそろそろ帰らないといけないのよ。ミチル  
の世話は今度にして」

「緊急なんだ、ごめん！」

「ちよつとお？ 一体、どうしたっていうのよッ！」

呼び止める私を完全に無視して、岡崎は食堂から走り出していった。岡崎の姿はもう見えない。もうどうしようもない。スカートを握るミチルは血塗れだ。軽く溜息を吐いた。

「とりあえず、その血を落とそうか？」

コクン、とミチルが頷いた。

「洗面所、何処だか分かる？」

「あっち」

分かった、と私が頷いた。



## 【第11話】

『高見養護学校』の廊下は蛍光灯が明らかに不足していた。所々、蛍光灯が切れていて、点いていても明滅しているのがほとんどだった。資金不足なのかもしれないと思った。元々吸収合併したくらいだ。節約しているのだらうと思う。時刻も五時を過ぎて外は薄暗くなっていた。室内はそれ以上に薄暗かった。そんな中、ミチルの案内の元に洗面所まで歩いていく。

洗面所というよりも水道の蛇口が多数ある、空間に辿り着いた。学校の水飲み場だ。

「じゃあ、どうしようかな。そのシャツは脱いじゃおうか？」

ミチルが頷いたので、シャツの釦を外した。すると後は自分で脱いでくれたので、それを受け取る。本来なら男の子の裸に顔を赤らめる所だが、私はミチルの肌を見て愕然とした。

うわ。血がシャツを透けて、お腹にまで血がこびりついてる

……。

「これは、……脱いだけじゃ、駄目、みたいだね」

断腸の思いで私はポケットからハンカチを取り出して、水で濡らした。そのままミチルの顔を拭いてやり、お腹を拭いてやる。灰色のハンカチは今や朱色のハンカチだ。

どうして私がこんなことを。

ウンザリしつつも、ちゃんと世話をしている自分がいて、それが私は不思議だった。人の世話なんて、本当に人の為になることなんて、彼此三年間位はやってない。嫌な人生だと思う。それにしても何でミチルは大量の血を被ったのだらうか。そもそも、この大量の血は何処から来たのだらうか、疑問に思った。

「ねえ、この血はどうしたの？」

十秒後、ミチルが答えた。

「ひーちゃんの血」

ひーちゃん。先程もその名前が出てきた。

「ひーちゃんって、誰？」

「体がうごかない方の子。ボクと違う」

ぴん、ときた。『高見養護学校』では知的障害者と肢体不自由者の両方を教育する施設らしい。つまり、ひーちゃんは肢体不自由者の生徒なのだろう。

「じゃあ、その、ひーちゃんはどうしたの？ 怪我したの？」

「……怪我、した」

考え込むように、ミチルは難しい顔をしている。

あ、しまった。二つ質問しちゃった。

私は質問を変えた。

「ひーちゃんは、今、どうしているの？」

「天国にいった」

「………」私は顔を思い切り顰めた。

何となく察してはいた。岡崎が血相を抱えていたのも、ミチルが「ひーちゃんが、屋上からとんできた」と言ったのも、女性の悲鳴も、何よりミチルにこびりついている血の量からも、ひーちゃんは屋上から飛び降りたのだらうと、予想はしていた。

「な、何で、ひーちゃんは屋上から、飛んだの？」

自殺の理由は何？

「……ひーちゃんは、体が動かないの、嫌ってた。いつも天国に行きたがって、手を切ってた。いっぱい。傷の線。いっぱい……、あった。いたそうだった。手を傷つけたら絵、かけないのに。だから、いつも先生が天国にいくの、止めてた。でも、きよ、今日は駄目だった。一人で、い、いちゃったあ、うう」

そのままミチルは泣き出した。うああああ、とボロボロ涙を零して私の腹にしがみ付いてくる。ミチルの重みに耐え切れず私は水道の横の湿った地面に、尻餅をついた。お尻に湿った感触がして気持ち悪い。それに血塗れのミチルが私の白いブラウスを汚してくれた。

私はミチルを引つpegしたい衝動に駆られるも、何とかそれを堪えた。

「もっつ！ 男がびーびー泣くんじゃないわよ！」

そう言いつつも私はミチルの髪にこびりついた血をハンカチで拭つてやった。ミチルを振り払ったり、殴ったり、拒否するようなことはしなかったと思う。何だかミチルという不思議にも感傷的になれるのだ。久しぶりに忘れていた感情を呼び覚まされて、どうにも理性が上手く機能してくれない。もう家に帰らないとやばいというのに。

「ほら、泣かないっ。立って」

グズって中々立ち上がるうとしないミチルを私は力ずくで立たせることにした。力ずくってというのは、ミチルの胸に手を回して、まあその、抱っこをした訳だ。

「……う」

腕に渾身の力を込めてミチルを抱っこした。

「お、重いっ」

ミチルは十八の男性なので、当然私の力では持ち上がらなかった。ちよつと浮いたくらいでミチルは未だ私に縋って泣いている。

こ、この男は本当に全くだ！

怒りを通り越して情けなくなってきた。それに確か、食堂で岡崎が「絶対、動いちゃ駄目だよ？」とか言っていたのを今更ながら思い出した。やばい、と思った。岡崎がそう念押しした、その僅か五秒後くらいにもう約束を破ってしまったことになる。早く戻って証拠を隠滅しなくては。

「ミチル、行くよッ」

私は有無を言わず、ミチルをずるずる引きずって廊下を戻り始めた。重い。凄く重い。一見、ミチルに筋肉なんて何処にもなさそうなのに、意外に重いのがまた腹立たしい。筋肉があるのなら、いや脂肪だっていいのだけど、とにかく足があるのならちゃんと自分の足で歩いてほしいと思う。結局、私はグズるミチルをずるずると

食堂まで引きずっていった。そして結局最後までミチルは自分の足で歩こうとしなかった。

「ハアッ、ハアッ。お、重い。信じられない。信じたくない。疲れたあ」

食堂につくと真っ先にミチルを床に放り出した。「エミ、いたい」とか非難めいた声が聞こえてきたが気にしない。ミチルを放って再度自動販売機に向かった。無性に喉が渴いた。何か飲みたい。百円玉を即効で自販機に投入した。するとスカートが引っ張られる感じがして背後を振り向く。

当然ミチルだった。何だか捨てられた子犬みたいな目で私を凝視してくる。

「何？」

「のど、かわいた」

「……………」

その瞬間、十七年の人生で初めて、米神に青筋が出来たと思う。軽い眩暈がした。どうやら私に奢れと言っているらしい。何て図々しいのだ。きつと、いや絶対に普段の中曽根エミならば最大級の嫌味でも吐いてるか、無視のどちらかだろうが、私は何とかその衝動を堪えてみせた。

「何が飲みたいの？」

にっこりと笑ってミチルに訊ねた。優しいじゃないか、私。と自分で自分を賛辞する。

「エミ、変なかお」

「……………。で、何が飲みたいのよ。買ってあげるから早くしなさいよ」

何かもう怒りをコントロールできていなかった。とにかくさっさと済ませようと心に決める。むっとしているとミチルが自販機のボタンを押した。がちゃんという音がして『バナナジュース』が出てきた。うわ、甘そう、と私は思った。ミチルのイメージそのままでもある。顔を顰めつつ、自分の分も買って席についた。ミチルと二

人でジュースを飲んでいると、暫くして岡崎が来た。

「いやあ、ごめんごめん。ちょっと、トラブルがあつてね」

「いつも、こうなの？　なら、警察も大変ね」

私が訊くと、ちよつと驚いた顔をして岡崎が訊ねてきた。

「ミチル君に訊いたのかい？」

私は頷いた。

「どの変まで？」

「ひーちゃんっていう、肢体不自由者が体を動かせないのを理由に今日この学校の屋上から飛び降りた。ひーちゃんは自殺癖があつて、いつも先生に止められており自殺未遂を繰り返していた。そしてリストカッターだった」

「……そんなことまで。もう。ミチル君頼むよ？　個人保護法とか、今煩いんだから」

そう岡崎が言つとミチルはこそつと私の影に隠れてしまった。岡崎が溜息を吐き出す。

「別に言いふらしたりしないわよ」

「いや、実際、法律には触れないから。今は冗談だよ。だって、ミチル君が法律に触れるなら、近所のおばちゃんたちは皆警察に捕まるよ？」

それもそうだと思う。私は岡崎に一つの疑問を口にした。自殺の理由で納得できない部分があつたのだ。

「何で、ひーちゃんは自殺したの？　体が動かないならリハビリでもすればいいじゃない」

「ひーちゃんって、五体満足じゃない子なんだ。でも、彼女の場合は知能が正常だから、ここは少しづらい場所だったんだろうね」

「……そっか」

世の中には仕方がないことというのは、山ほどあるのだ。不公平でありどこまでも公平なのだ。どこまでも悪意だけは公平に与えられ、人々はそれにより不平等になっていく。仕方がないことなのだ。私が気に病んでも仕方がないこと。

「エミ君、君、意外に優しいんだね。今日、ここに来て色々シヨックを受けちゃったかな？」

「……別に」

「参ったなあ。今日はミチル君と明るく楽しく過ごしてもらおうと思つたのに」残念そうに岡崎がそう漏らして、ミチルに視線を向けた。即、私は嫌な気分になった。止めて。今、ミチルを見ないで、気がつかないで。そんな私の思いは虚しく、岡崎は気がついた。

「あれ？ ミチル君。良い物飲んでるね。僕、君にお金渡したっけ？」

渡した覚えはないのだろう、直ぐに岡崎は私に視線を向けてくる。そして。

「やっぱ君、意外に優しいんだね。本当に意外」と言った。

「別にいいでしょ！ 余計なお世話よっ」

更に岡崎は気がついた。岡崎は頭がいい。聡明だし、観察力もちろんある。だから、ミチルが先程よりも綺麗になっているのにも気がついてしまった。

「僕、ここから絶対、動いちゃ駄目だよって言わなかったっけ？」

しかも、ミチル君綺麗になつてゐるし。そういえば、シャツ着てないし。上、裸だし？」

「……………」

君、意外だったけど、本当に意外だったけど、意外に優しいね。と岡崎が言つた。

私は真つ赤になつて逃げるようにして『高見養護学校』を後にした。

何てヤツ。

## 【第12話】

私は学校にいた。学生なのだから、もちろん毎日学校に行く。私にとって学校に行くという行為は呼吸するにも等しい自然な行動なのだ。だから、いくら綾香と気まづかろうが学校に行かないという選択肢は無かった。そして学校に行ってみれば綾香と私の派閥が出来上がっていた。

今朝、がららら、と教室のドアを開けると、微妙に雰囲気を変質して、クラスの半分ほどが私から離れ、クラスの半分ほどが私に寄ってきたのだ。それだけで私は理解した。あの後、昨日負けを悟った綾香は、放課後で生徒を分離させたのだろう。そして私は『高見養護学校』にいてそんな綾香の行動を把握できなかった。

ち、と内心舌打ちをする。負ける気は更々なかったが、綾香を増長させるのは面白くない。こんなことならば、私も放課後に残って派閥を作っておけばよかったと後悔する。でも、何もしなくても綾香に靡いていない生徒が半分もいるのだから、それほど焦る事態でもない、と余裕を持って席についた。回りに女子生徒が集まってくる。それを見て綾香が面白くなさそうな顔をした。

本当に愚かな奴だ。綾香は絶対に私には勝てないのに。

絶対に勝てないその理由は、既にリーダーとして順位が決定しているのにある。私は真のリーダーだ。そして綾香は準リーダーだ。真実のリーダーには様々な裏技や学校の秘密が継承される。だが、真のリーダーにはその全てを先輩から教えてもらえるが、準リーダーには教えてもらえない。このように知らされない秘密は多数あるのだ、けして下克上はできない仕組みになっているのだ。

例えば、初代真のリーダーはある日、警備員さんから屋上の鍵を失敬して、鍵屋さんで堂々と合鍵を作り、こっそりと見つからないように警備員さんに鍵を返した。それ以来、私たちのグループだけ

その鍵を使つて、生徒は立ち入り禁止の屋上に行くことができるようになった。私はこの合鍵を先輩から貰つて今も家にあるが準リーダーの綾香はもっていない。だから、屋上に行くには必ず私の許可が必要なのだ。この学校では。

また、『教師マル秘履歴書』なんていう代物もある。これも綾香には知らされない秘密なのだが、この学校の教師の履歴書をこつそりと職員室から持ち出してコピーし、纏めたのが『教師マル秘履歴書』なのだ。これは教師が変わる度に情報を更新しなくてはならないので面倒だし、危険も伴うので真のリーダーしかその在りかを知られないのだ。『教師マル秘履歴書』は確か、五代目の真のリーダー考案だったと思う。

もちろん私だって、考案した秘密はいくつかあるのだ。真のリーダー達は必ず学校に仕掛けを残していかなくてはならないし、またそれを維持していく義務もある。一般の生徒はもちろん、教師にも露見しないよう隠し守る。それが私の役目であり、リーダーである存在意義であり、準リーダーよりも有利な点だった。

ちなみに私が考案し、学校に仕掛けた秘密は『明石のパスワード』だ。簡単にいうと明石のパソコンのパスワードを入手し、それを学校のとある部屋に記録しておいたのだ。どうやったかといえば、私は数学の問題を質問しに明石を度々訪れ、その時にパソコンのパスワードを明石が私の目の前で打ち込む機会を待つ。私の目の前で打ち込めば後はしめたもの。私はそのパスワードを一回で覚えた。なんと『m a m a 3 L V』だ。ママさん Love。これが果たして明石の母親を表しているのか、それとも明石の嫁なのかは永遠の謎だった。私は母親であると予想している。

こうして難なく明石のパスワードを入手した私は、時折人氣のなくなった明石の机に行つて、全校生徒の数学の成績を覗いている。全校生徒の成績は私に筒抜けなのだ。綾香はかなり悪く、前回のテストでは四十五点なのを私だけが知っている。ははは。これは中々いい気分なのだ。他の生徒が知らない情報を私だけは知っている



いうのは。数学の抜き打ちテストは私だけには通じない。

だが、明石がこの学校に永遠にいる訳ではないので、何れ他の秘密の仕掛けも学校に組み込まないといけない。これだけでも十分義務を果たしてはいるが、真のリーダー中曽根エミの名をこの学校にきちんと刻んでおかねば私が満足できそうにない。

とにかく、このように様々な理由で綾香はこの学校で私には絶対に勝てないのだ。

「本当に莫迦なのよ、貴方は」

にやり、と私はそう綾香を嘲笑った。

「エミ、何か言った？」

顔もよく知らないクラスメイトの一人が訊いてきたので私は「なんでもないわ」と答えておいた。こいつもこの機に私に取り入ろうとしている一人。リーダーである私に取り入ろうとする生徒は多い。皆全てを知っている訳ではないが、本能で私がリーダーだと知っているのだ。

「なんでもないわ」

私は綾香だけを見据え、もう一度反芻した。お前には関係ないことよ。そう意味を込めて言った。これは私と綾香の戦いなのだから。暫くは綾香と私の冷戦状態が長引きそうだった。この後の体育でもクラスは二分されて、バレーボールの練習試合では血みどろの戦いが繰り広げられたのだ。綾香のグループは血の氣が多いのだ。だから、必然的に真面目で大人しそうな子が私の周りに集まった。一見、私の不利に見えるが、実はそうでもない。

大人しい子というのは、牙を内に隠している子が多いのもまた特徴である。小心者に限ってよく吠えるものだ。だから私はむしろ綾香のグループに対して何の恐れも抱いていなかった。「ほんと、莫迦ね」と見下していた。

だが、綾香も黙ってはいない。あの下品な笑いを顔に貼り付けて、私のグループの子の顔面にボールを思い切りぶち当てたのだ。本当に莫迦だと思った。大人しい子ほど牙を隠し頭がよいのを綾香は理

解していない。最初はただ勝手に綾香が燃えていただけだった、練習試合は、私のチームにボールが当たったその瞬間に静かにスイッチが切り替わった。

「エミ、あたしやるから」

クラスでそこそこには私が認めている女子の一人、テニス部副部長が言った。私はチームの皆を見回すと、一様にスイッチが入ったのを確認した。顔に当てられた子も怒りを瞳に宿し、立ち上がった私を見た。皆、私のゴーサインを待っているのだらう。こんなのに熱くならないでよ、と思いつつも綾香の仕打ちを倍返しにする為、そして綾香の増長を止めるべく、ゴーサインを容赦なく発射した。

「いいわ。本気でやって。私もそうする」

皆が頷いた。綾香は勘違いしているのだ。大人しいというのは、自制できる我慢強いということなのに、大人しいというのを無能と勘違いしている。だから、大人しい子というのは本気で怒ったときは誰よりも恐いの。彼女達は冷静に怒れるから恐いの。

「どれくらい、本気なの？」

テニス部副部長が冷静に訊いてくる。

「綾香がふらふらになって、土下座して謝らせてくださいって、私達に言わせるくらい。それくらいになるまで本気でやろう」

テニス部副部長は心得たとばかりに頷いて、綾香の顔面にサーブをブチかました。

「エミ、これからどうする？」

「決まってるわ。綾香よ。綾香を狙いなさい」

テニス部副部長は再び頷いて綾香の顔面にサーブをブチかました。それからは、正に血みどろの戦いだった。私達のチームは執拗に綾香だけを狙い打ちにした。どんなに遠くのボールでも必ず綾香にボールを返し、スパイクは綾香の顔面へ。サーブももちろん綾香の顔面を狙い、全てのボールは綾香へと集中した。当然、綾香はミスを連発して面子を潰された形になり、向こうのチームはだんだんと雰囲気が悪くなっていった。それでも私達は綾香にボールを集める

のを止めなかった。徐々に綾香の足がふらついて、鼻血を出して顔が腫れはがり涙目になった辺りからやっと私達は攻撃を止めたのだった。

試合結果は私達の圧勝だった。

ざまみろ。ここでも私の勝ちだ。莫迦綾香め。

女子更衣室で綾香は鼻にティッシュを詰めながら、涙を堪えていた。私は冷笑する。お前が悪いのだと。すると綾香も憎々しげに私のことを睨みつけてきた。私も負けず劣らず憎悪の瞳で睨みつけた。冷戦は本当に長引きそうだった。

でも、このとき私に後悔の文字なんてなかったのだ。

### 【第13話】

その後もやはり雰囲気だけが暗く、だがお互いにそれ以上は踏み込まず睨み合うだけの冷戦状態が放課後まで続いた。今のところ私が優位に立っているという確信があった。それでも私は苛立ちを押さえきれなかった。体の奥底からどす黒い感情が湧き出では、消えていく感覚。それが無性に苛々してむかつく。到底このまま家に帰る気分ではなかった。

一瞬、『高見養護学校』に行こうかと脳裏を掠めたが、直ぐにその考えを否定した。

今『高見養護学校』はそれどころではないだろうと思ったのだ。昨日自殺者がでたばかりで、それも普通の学校ではなく障害者ばかりの人達がいて教師はその面倒も見なくてはならず、そんな中に部外者である私を歓迎できる訳がない。通夜なり葬式なりで必ずゴタゴタしているはずだった。それに『高見養護学校』は否応なしに私をぬるま湯に浸ける。ミチルが、岡崎が、普段の研ぎ澄まされた理性を退けて私の本来の感情を揺さぶる。それが無性に嫌だったのだ。今日学校に来てみて、重く実感できた。『高見養護学校』の暖かさとの学校の冷徹さ、その落差はあまりにも酷いのだ。私は殺伐と生徒達の最前線で常に戦ってきた存在だ。別に『生徒会に入って教師と戦う』とか『校則と戦う』とかそういうことではない。そうではないのだけど、常に私は何かと戦っていたのだ。

あるときは、テストを敵に。またあるときは、怪物を敵に。ときには、教師を敵に。

そして今は、綾香を敵に。

私はいつもその戦いを勝利する為に、冷徹に冷静なときには無慈悲に行動してきた。やられたらやりかえす。これが私の生き方と決めていたからだ。私の牙と言ってもいい。武器と言いかえてもいい。その武器である牙を『高見養護学校』ではいつの間にか奪われて

いる。岡崎によって奪われ、ミチルによって丸くヤスリをかけられる。事実、『高見養護学校』ではそのような生き方は不要なのだろう。あそこは限りなく悪意が少ないから。

でも、私は牙がないと不安なのだ。丸くなってしまった牙はもう何の役には立たないから。学校で役立たずになった私の牙は、綾香の獠猛な牙に凌駕され、私自身をも食い殺される。それが恐かったのだ。

暫く、行くの。よそうかな……。

少しそう逡巡してから、何も迷うことなどないと思った。ミチルの事情も聞いたし、『高見養護学校』の事情も聞いた。既に好奇心は満たしたはずだった。行く用事もない。私は今後一切『高見養護学校』には行かないと決めた。関係ないのだ。私には。

そう決意して私はショッピングモールの方に足を向けた。二、三時間ぶらついてから家に帰ろうと思う。怪物のいる家には極力帰りたくないし、また家に帰れば勉強しなければならないのだ。

様々な店が集合するショッピングモール。

この変では一番近くて一番大きな建物だ。一本の真っ直ぐな道を取り囲むように店が立ち並び、その上をドーム状の屋根が優しく雨風から守ってくれる。そして、店はただ立ち並ぶのではなく、外観を重視してお洒落なヨーロッパの街並みのように煉瓦を基調とし、ミルキー色で統一されていた。何処か『デイズニールランド』のような雰囲気もあり、昼はただのショッピングを楽しむ空間で、夜はお酒の入った大人がよく見られる空間だった。

今日もそこは人で溢れかえっていた。アスファルトに地べたで座る男子高校生達。化粧をしたギャルの集団。右往左往する老人。自転車に乗る主婦。スーツを着たサラリーマン。髪を金色に染めた小学生。ティッシュを配るアルバイト。空き缶を拾うホームレス。道端でファンデーションを塗りたくるOL。腕を組んで練り歩くカップル。大声で献血を促す赤十字。それを無視する人。そんな中の人ばかり。人だかりの中心の……泣き喚く迷子。

その鳴き声に意図せずにミチルを連想してしまい、私は歩く速度を速めた。否応なしに耳につく鳴き声。

……うぎゃあああああ …… ああああああ、ままああああ  
あッ

止めて。聞きたくない。私が助けなくてもどうせ誰か助けるに決まってる。私は関係ないんだから。止めなさい。私は更に歩く速度を速める。もはや歩くというよりは小走りといった速度になっていた。

……う、ギヤああああああああああああああああああ  
声がミチルと重なった。ミチルが泣いている。違うと思った。ミチルじゃない。ただの子供だと自分に言い聞かせる。何でこんなにも子供の泣き声に胸が揺さぶられるんだろって考えて、答えがでたようでない感覚に更に苛立ちが募った。

……あああああああ。まま。ままああああああ

とくん、と心臓が跳ねた。足元がとろとろと溶解していく感覚。視界がぐるぐると回転して、眼の奥がちくちくと軋み体全体がおかしくなつて足が上手く前に進まない。するとまた、あの嫌な感情を揺さぶられるような声が聞こえた。嫌だ。聞きたくない！

……うギヤあああああああああああああ

煩い、黙れ。餓鬼。私の不愉快になるような行動はするな。視界から消えろ。死ね。

思うと胸の奥がまるでナイフで刺されたような、痛みに見舞われた。一瞬、呼吸ができなくなる程にそれは強烈な刺激と痛みだった。何とか苦しみを紛らわして呼吸を整える。

……ああ、ままああああ。ままああああ まま、ままあああ  
お前はミチルじゃない。死ね。お前なんか死ね。餓鬼。どうか消えうせるッ！

息ができない。

……あああああああああああッ！ ままあああああああ  
あああああッ

声が大きくなった。

「　　っ！」

痛みと息のできない苦しみに耐え切れず、私は走り出した。すると子供の泣き声は呆気ないほど喧騒に紛れ、即座に掻き消えていった。後ろを振り返る。もう子供の姿は見えなかった。こんなに早く声が聞こえなくなったのは、誰かが保護したか、母親とでも巡り合えたのだろうと思った。きっとそうだ。そうに違いない。

声が聞こえなくなり、私はほっと胸を撫で下ろした。一瞬だけ助けようか迷った。声がミチルと重なったから。きっと子供は困っていると思ったのだ。以前ならそんなことなかった。多分見向きもしないで一瞬の迷いも無く存在ともども無視できただろう。それを一瞬とはいえ迷ったことが自分で自分の思考が信じられない。

自分が何だか弱くなっている気がして恐かった。

不安定になっっている。しかも人に八つ当たりしやすくなっている。最低だった。こんなこといままでなかったというのに。常に自分自身を制御してきたのに、と思う。少し落ち込み気味に歩いていると横から声がかかった。

「　　エミ？」

はっとして声のした方向を見る。

「　　やっぱり、エミ！」

「　　先輩？」

先輩は凄く嬉しそうに私の方に駆け寄ってきた。この人は戸波先輩。去年の準リーダーで私もよく目にかけてもらった世話好きな先輩だった。私がリーダーになれたのも、この先輩が綾香よりも私がリーダーに相応しいと推薦してくれたお蔭だった。先輩は綺麗に化粧をしていて私服姿だった。制服を着ていた高校時代よりもずっと大人っぽく見える。もう一人、戸波先輩の後ろから女の人が歩いてくる。その女性は何だかふらふらと危ない足取りで、戸波先輩が肩をかしてこちらに歩いてきた。女性のその様子に怪訝に思いつつも、先輩が私の前にもう来たので視線を先輩へと集中する。

「久しぶり、元気？」と先輩。

「お久しぶりです」

私が礼儀正しく先輩に挨拶する。流石に私も戸波先輩には敬語を使う。だが、先輩は軽く手を振って、堅苦しいよ、あたしらの仲間だから敬語とかいいってと一蹴した。でもその実、先輩は何処か嬉しそうだったので、敬語で会話しても問題はなさそうだった。「先輩、何だか前より綺麗になった気がします」

「そう？ エミは変わってないねえ。相変わらずっていうか」

「そうですか？」

それでも変わった気でいたのだが、大学生の先輩から見ると私も所詮幼い高校生なのだろう。

齡は一つしか変わらないのに。

「そうそう、学校で綾香が暴走してるんだって？」

流石に耳が早い、と思った。どうやって知ったのだろうか。学校はある意味閉鎖的空間だ。一度卒業してしまえばその内部の事情はほとんど分からないはずなのに、先輩は既に私と綾香が喧嘩をしているのを知っているようだった。

「はい、ちよつと揉めているだけなんで心配ないですよ」

「だって、グループが二つに割れてるって聞いたけど？」

やはり先輩は全てを知っているようだった。むかつときた。

「誰から聞いたんですか、それ？」吐き捨てるように私は言った。

「え？」

「誰にその話を聞いたんですか？」

私は低い声で言った。また怒りをコントロールできていない自分に気がついた。咄嗟にすみません、と先輩に謝る。別に先輩が悪い訳でもないのだ。また人に八つ当たりしているのが悔しく、失態を恥じた。もう一度すみませんと先輩に謝った。

「ああ、気にしないで。あたしが先に言えば良かったね。綾香から直接メールが来たの。丁度さっきだよ？ 何だか、エミが暴走しているからあたし等、先輩でシメてくれっていう内容だったと思うけ



ど」

聞いた瞬間、私は持っていた学生鞆を地面に叩きつけた。ばん、と空気の張り裂ける音がアスファルトに響き、先輩と多分先輩の友達がビクリと体を震わせた。何人かの通行人が私の方を振り返っていった。

「エ、エミ？ あのね、あたし等はそんなメール、本気にしてないからね。だって、エミの性格じゃあ暴走とかはしなさそうだし。むしろね、綾香が暴走しているんじゃないかって言ってるくらいなんだから」

「分かってますっ。先輩がそんなのを真に受けないことは、ちゃんと分かってます」

歴代の真のリーダー達は頭の回転が速く、機転もきき、判断能力も備わっている者がほとんどなのだ。なぜなら、必ずそういう者を真のリーダーが後輩の中から一人選ぶのだから、そうでない者は有り得ない仕組みなのだ。だから、先輩の中で綾香の暴走めいた謎のメールを真に受けるリーダーはいないと私は知っていた。また、リーダーでない他の普通の先輩を味方につけたところで意味はない。リーダーでない先輩は権力などないのだから。

「知ってます。ただ、綾香が先輩に告発してまで私をリーダーから引き摺り下ろそうとしているのが……」

悔しい。

確かに私は綾香を莫迦にしていた。それでも私達は友達であつたはずなのに、綾香はそうではなかったのだろうか。自分だけ一応は友達と思っていたのなら悔しいどころの騒ぎではない。屈辱だった。酷いじゃないか。綾香め。

「……エミ」

痛ましそうに戸波先輩が私の顔を見る。何だか先輩のほうが悲しそうな顔をしていた。私の今の顔は多分、怒りの形相だろう。私の場合は悲しむ前に怒りがくる。だが、先輩は純粹に私を心配して悲しい顔をしているのだろう。いい人だ、と思った。

「心配しないでください。私も今はリーダーですから。自分で何とかしてみます」

「一人でエミは抱え込みやすいからね。なるべくなら相談、……しなよ？」

「心配ないですよ」

私は笑顔でそう言ったが先輩は何か言いたそうな顔をして、逡巡してから口を開いた。

「そうじゃなくて、エミは一人で何でもできちゃうから、人に相談なんかしないでしょ？ でも、だからこそ綾香はエミを認めてないんじゃないの？」

私は先輩の言いたいことがよく分からなかった。

「どういう意味、ですか？」

そう訊ねると先輩は何処か必死に私に向かって説明してくれた。

それは親とか教師とかが、よく自分の人生の経験の元に、子に向かって説教をする感じに似ていた。

「もちろんエミが皆のことを考えているのをあたしは知ってるよ？ でも、綾香から見ればエミが独断で行動してるようにしか見えな  
いよ。綾香、莫迦だもん。皆と相談して皆の意見を聞いて、皆と一緒に何かを決めるのが、一番いい方法だと思ってる。そうすれば皆が楽しくて、皆上手くいくって信じてるから」

だから、リーダーにはなれなかったのにね、と先輩が付け足した。  
「…………。そうですね。綾香莫迦だから」

「直情型だからね」

「ですね。だから私を認めてくれないんですね。莫迦だから」

ちよっとほっとした。私達は友達ではなかった訳じゃないと、先輩の話を聞いて安心できた。もしかしたら遠回しに先輩は励ましてくれたのではないだろうか、とまで勘繰ってしまった。この先輩は昔から人を励ましたり、他人の心の機微を感じ取るのに長けていたのだ。

「私、綾香に相談した方がいいんですかね？」

ちよつと先輩から視線を外しつつ私がポツリと訊いた。先輩が笑ったような気配がしたので、視線を上げてみる。やっぱり先輩は笑っていたのでほつとした。

「それは止めたほうがいいよ。エミは一人で判断できるからリーダーなんだし。準リーダーっていうのは単なる補佐役だからね。あたしも一人で決められないからリーダーになれなかったんだし」

くすりと自嘲するように先輩は笑った。戸波先輩は準リーダーなのだ。先輩も綾香のように皆と一緒に行動し、これからのことを決めていくというタイプの人間で、それを理由にリーダーになれなかった人だった。

「エミはそのままの方がいいと思うよ？ でも時々なら、判断とか関係ないときは綾香に頼ってもいいんじゃないかな。綾香は莫迦だから、それだけでエミのこと信頼しちゃうと思うけどな。だからさ、なるべくなら」相談した方がいいんだって」

「それでも綾香を信頼している部分もあるんですけどね」と私は一応告げておいた。

すると先輩が驚いたように、「エミが人を信頼するなんてことあるの？」と言った。一体先輩は私を何だと思っているのだろうと私は思った。失礼な。でも先輩はクスクス笑い出したのでそれが冗談だったのだと分かった。

「……。からかわないでください」

「ごめんごめん。だってエミって、凄く偉そうなんだもん」

また、偉そうと言われてしまった。最近では偉そうと言われればかりな気がする。むっとしてみると、くすりと先輩が笑ったのでやはり私はからかわれているようだった。

不貞腐れた子どものように頂垂れていると、ふいに先輩の連れが私の視界に入った。その女性はゆらりゆらりと体を上下に揺らしていて、瞳の焦点があつておらず覇気というのが一切感じられなかった。先程も不審に思ったものの、先輩が慌てたように私の視界から女性を隠したのでよく観察できなくなってしまった。

何処を見ているんだろ？ この人。

女性は短いスカートを穿いているというのに、足をだらりと投げ出して地面に座っていた。どうやら自分の力で立ち上がることができないらしい。

「？」

まさかミチルと同じで、自閉症というのは考えにくい。先輩といふのだから知恵遅れの人とも考えにくいのだが、先輩の友達と思われるこの女の人は様子がおかしかった。と、先輩が私の前に立った。私はす、と目を細めた。先輩は明らかに私からこの女性の姿を隠そうとしていた。

「……エミ。もう行って」

「どうしたんですか？ その人具合悪いんですか？」

先輩が首を横に振った。でも、明らかに女性の様子は変だった。

前後に体を揺らす行動はエスカレートして今では貧乏揺すりのようになっている。すると女性と私は目が合った。

ぴたりと動きを止めて女性がゆらりと立って私の方に近寄ってくる。先輩が慌てた様子で私と女性の間割って入った。

「エミ、もう行った方がいいからっ！」

私はその場から動く気はなかった。先輩はもう行った方がいいと、私を心配する言葉を発したのだ。「エミ、迷惑だからもう何処かに行って」ではなく「エミ、もう行った方がいいから」と先輩は言った。意味するのはこの女が私に何かの危害を加えようとしているということなのだろう。だとしたらここで先輩を見捨てていくのは義理に反する。真っ向から女性の視線を受け止めた。来るなら、来なさいよ。後悔させてやるわ、と思いつつ挑戦的に相手を威圧した。全く動こうとしない私に先輩が慌てたように「エミッ」と叱責したが、女性も私も一步も引かなかった。

やがて女性が危ない足取りながらも私のところに辿り着いた。

「アンタ、何なのよ？ 何か用があるの？」

挑発するよう私は言った。かなり生意気な発言にも関わらず女性

に変化は見られない。それどころか、ぼーと私の顔を凝視して不気味な笑みを浮かべた。

「何よ、アンタ。気味悪いわね」

「あなた、いい気分になりたくないあーい？」

「……………」

何だ、こいつ。と思った。甘い声。まるで男の人でも誘うような甘く蠱惑的に女性は言ったのだ。女である私にいい気分になりたくないか、と。深読みしすぎかもしれないが、その筋の人かなと思った。レズの人かなと思った。そう考えて思わず顔が引きつる。

「…………い、いえ。別になりたくありませんけど？」

アンタ一人で気分よくなりなさいよ、という言葉は先輩の手前、辛うじて飲み込んだ。

「いい気分よあ？　だから、あなたにもこれ、」私は女性が差し出してきた手の平に視線を落とす。「はい。これ。あなたに上げる。

これがほしくなったらあ、いつであたしのとこあ、きてねえ？」と女性は無理矢理に私の手に何かを押しつけた。自分の手の平を返して中身を凝視する。

「エミ！」

と、戸波先輩が言ったが、無視して私は手の平に押しつけられた物の正体を見た。

それは白い粉の塊だった。

少し思考してから、この白い粉の正体を結論づけた。

「ドラッグ？」

ビクリと先輩が震えて目を見開いた。そして「…………エミ、何で？」

と言ったので先輩はそうとう気が動転しているのに私は気づいた。

「先輩と一緒にいるこの女の人、明らかに様子がおかしいじゃないですか。その上先輩はその人を隠そうとするし、凄く怪しいでしょう。それで白い粉を渡されて『いい気分になりたくないあーい？』なんて訊かれれば、誰だってそう思いますよ」

ああ、そっか、そうだよな、と先輩は呆然とした様子で呟いた。

「エミ、それ。あたしに渡してくれる？」

「いいですよ」

別に私はジャンキーではない。こんなものに頼らなくとも生きていけるし、また所持していて警察にでも捕まっては、こちらが凄く迷惑なので早々に先輩に返せるならそれに超したことは無い。即座に先輩に白い粉の塊を手渡そうとしたのだが、女性の様子が急変したのを先輩が敏感に察知して女性の方へ行ってしまったので、私の手の上の白い粉は行き場を失ってぼとりと地面に落ちた。

「うおえッ！」

女性が身をくの字に折って胃の中のものを吐き出した。汚いわねと私は顔を背けたが戸波先輩は心から心配そうに女性の背を摩っていた。女性はそんな先輩を手荒に振り払って立ち上がった。ふらふらと危うい足取りで喧騒のする街へと進んでいく。慌てて先輩がその後を追う。振り返りながら、私に言った。

「エミ、それ、捨てておいてくれない？」

「別にいいですけど。トイレにでも流しておけばいいんですかあ？」  
返事は返ってこなかった。あの女がまた誰かに薬を渡そうとして先輩が止めていたのが見えた。先輩は私に構ってる暇はなかったに違いない。きっと私の方はもう大丈夫だと先輩は判断したのもあるだろう。何だか先輩も妙なことに巻き込まれているみたいだし、大変だなと思って、綾香のことを相談する気にはやはりなれそうになかった。

……ままあああああ ああああああ まあああああまあ  
あああああ

「っ！」

また声が聞こえた。幻聴か、それとも神経が過敏になっているだけなのか、とにかく自然に耳が子供の鳴き声を拾ってしまうのだ。顔を顰めつつ私は先輩達が残した白い粉を拾って、仕方ないわねとか思いつつ子供の声がする方向へと向かった。直ぐに一人の男の子が見えたのでその子を無理矢理引っ張って行ってシヨッピングモー

ルの店員に引き渡そうと決意して、その決意をそのまま実行しようとしたのだが、これがまたあまり上手くいかなかった。

男の子の手を握った瞬間、男の子は「ひっ！」という悲鳴じみた声を漏らし、私から後ずさったのだ。私は最大限の忍耐を駆使して怒りを我慢し、男の子に優しく「お姉ちゃんとお母さんを探してくれるところに行こうね」と本当に優しく言ったのに、それをあのクソ餓鬼は「よるなクソババア、よるなあ！」ときた。

そこで私の頭からは忍耐という文字は完全に消え去り、私の中で何かが音を立ててキレた。クソババア発言にぶちキレた私は、びー泣いているクソ餓鬼を渾身の力で肩に担ぎ上げ、クソ餓鬼が「離せーババア！」とか「まーまー」とか「離せ、ばかばあつ」などと騒いでも完全に無視し、

「離せー、ばばー」

「……………」無視だ。

「ブス、デブ。うわくっせー。何か汗臭いぞ。ばばー。馬糞の匂いがするー。ばふーん」

「……………」無視よ。

「ばふーん。ばふーん」

「……………」

「うおえ。吐くう。ばふーん。ばふーん」

「黙りなさい。このクソ餓鬼がつ！死ぬ。そういう悪い子には拳固よッ」本当に殴った。

「ギャああああああああああああああああっ！ババアああああ。痛いー。痛いー。ばばあああに殴られ」「もう一発食らいたいのか？」「ご、ごめんなさい。お姉ちゃん」

と、こんな感じに無視して 正確には黙らせて、そしてそのままの格好でショッピングモールの店員のところまで運んでいつてやった。当然ながらその店員は私を見て少々驚いた顔をしていた。

全く何をやってるんだか私と思う。こんな生意気な餓鬼は放っておけばいいのにそれを無視できなくなっていて何だか苛々する。そ

してふと気がつけばあのミチルと出会い、聡子を嵌めたあの公園へと足が勝手に行ってしまったていた。そうさ、来てしまったのだ私は結局ミチルには会わないと今さっき決めておきながら、もう来てしまったのだ。

なんて意志が弱いだよ。

自分で自分の意志の弱さを戒める。あれほど自分の感情を制御しかつ他人の不幸をものもしなかった私の人格は、ここ最近奇妙な変化を遂げたらしい。忌まわしいことに。

「……ミチル」

今日もミチルは一切の反応を示さずにスケッチブックに没頭していた。服装は今日も変わらずいつもと同じ白いシャツに黒いズボンだった。それ等の衣服は常に清潔に保たれているから多分同じ服を大量に持っているのだろう。もちろん白いシャツは昨日のように真っ赤ではなく純白色で一切の汚れはなく、ちよつとほつとした。（私はミチルならそのままの格好で外を歩いていても不思議ではないと思ったのだ）そしてシャツと同様に昨日真っ赤に汚れてしまったスケッチブックは多分岡崎にでも買ってもらったのだろう、今日は真新しいスケッチブックの最初の方のページにやはりベンチから見える風景を鮮明に描いていた。ミチルの後ろに回ってスケッチブックの中身を覗き込む。

今日の風景は夕焼けの住宅街？

モデルが何であってもやっぱり上手かった。今日はちよつとベンチから見る角度が少し違って、夕焼けに染まる空が大きめに描いてあった。

「上手ね」

二十秒後、ミチルが答える。

「あ、ありがと」と。

何だかこれだけでほつとできた。先程まで苛立っていた気分が嘘のようにすんと心に収まる。私はミチルが座っているベンチの隣に腰をかけた。



「ミチル、今日は何したの？」

三十秒後ミチルが答えた。

「絵、かいた」

「他には？」

「ひーちゃんにばいばいした」

「……そう。他には？」

「と、トイレいった」

「……。……そつ、そう」

最後のは別にして、やはり今日はひーちゃんのお葬式であったのは間違いないらしい。やはり今日は行かなくてよかったと思う。ゴタゴタしているのに行っても向こうは迷惑だろう。そこでふと、何も『高見養護学校』に行かなくてもいいのだと気がついた。ミチルに会うだけならばこの公園にいるのだから、公園に行けばいいのだ。何でこんな簡単なことに気がつかなかったのだろうか。

「ミチル、公園にきちやいけない日って決まってるの？」

「決まってる」

「それって曜日が決まってるの？」

「も、木曜日」

「そう」

なら、木曜日に来なければいいのね、と私は思った。

「学校楽しい？」

「うん」とミチル。

「勉強とかするの？」

「する。いっぱい。する」

「何を勉強するの？」

ミチルは少し考えるように一瞬だけ筆を止めてから言った。

「話すれんしゅうと約束をまもるれんしゅう」

「約束を守る練習？」

「うん。せんせいとの約束やぶる。おこられる」

「そう。仲良い子とかいる？」

「うん。いた。ひーちゃん。可愛いお人形さん」

「…………。ひーちゃんって、もしかして女なの？」

「うん。っ　　いたい！　エミ、いたい。ぶった！」ミチルが非

難めいて言うてくる。

どうやら私はかなり重症のようだった。

本当に何をやっているんだか、私は。泣き出したミチルを宥めつつ私は思った。

## 【第14話】

それから一週間近くは、普通に学校に行き、その後公園でミチルに会うといった生活を私は送っていた。相変わらず綾香は暴走していてミチルは当然のように私を空気のように扱っていたけど、特にこれといった劇的な変化はなかったし、綾香は当然のように私を無視して何とかしてリーダーから引き摺り下ろそうとしていたがどうにもできず。ミチルは私が何度か会話をしようとしても当然のように絵に没頭していてどうにもならなかった。

その頃になると私は家にはなるべく遅くに帰るようになっていた。綾香とも仲が悪くなっていたし、ミチルのこともあって怪物の尋問で嘘を吐くのが多くなっていたからだ。遅くに帰ると怪物はそれはもう煩く説教をするのだが、綾香との関係悪化がバレて、そしてミチルのような自閉症の人と関わりがあると知れたなら、もっと酷いことになるのは目に見えていたので、それよりはマシだったのだ。そういえばすっかり忘れて捨てる機会を失ったドラッグが私の鞆の中に入っていたが、放置しっぱなしでこのとき私はその存在すらも忘れていたのだ。た。

そんな、ある意味平穏な一週間が続き、私はこれから起こることに対処する大事な牙を徐々に徐々にだが丸くしているのを察知できていなかった。準備をしていない隙間に悪意というのは侵入してくるというのに。

悪夢は突然にやってきた。

「……え、エミちゃん」

消え入りそうな正しく蚊の鳴くような声で私の名を呼んでくれたのは、愚かでブスでドン臭くてデブの、生涯虐められっ子の聡子だ

った。せつかく苛々していた私の心をミチルが沈め癒してくれていたというのに、このブスで間抜けでデブの聡子が放ったたつたこの一言で私の心をそっくりそのまま一週間前に戻してくれた。

ある意味才能があるのだと思う。

人を不快にさせる……。

「何よ？」

当然ながら私は、何か用？ 私はアンタに何の用も無いわよ、という態度を露骨に示しつつ、そう訊いた。ぴくんと二本の尾っぽが揺れ、聡子は一変しておどおどとした態度を取り始めた。これまた不快感を逆撫でされ、かつ不愉快となった私は目と眉を吊り上げた。「さつさと用を言いなさいよ」

すると暫しの間、私が言ったにも関わらずもじもじして、更に私を不快のどん底に陥れてくれた。

「さつさとする！」

「っ！ う、うとね。私、エミちゃんを呼んで来いって言われたの」

考える。

この学校の覇者であるこの私を、呼びつける愚か者はどんな奴なんだ、と。即座に一人の女の顔が浮かび上がった。

綾香ね。今度は何をしようっていうの？

この一週間、綾香は私を何とかして真のリーダーから引き摺り下ろそうと画策しては玉砕していたのだ。それも今時の小学生では決してやらないような子供っぽい嫌がらせで。

月曜日、下駄箱が砂で溢れていた。火曜日、下駄箱が何故か水浸しだった。水曜日、下駄箱から画鋐が溢れ出てきた。木曜日、なんと下駄箱から蛙が十匹近く飛び出てきた。金曜日、つまり今朝、下駄箱から大量の素麺が流れ出てきた。

「……………」

あのね、と一言言いたくなつた。

私に対して悪意を向けた瞬間に大抵の場合は、即刻怒りに燃えて

復讐を考えるのが私の生き方であり、やり方である。だが、このときばかりは流石の私もやられたらやりかえす、という訳にはいかなかった。何だか怒りよりも呆れの方が先にたったのだ。莫迦かと思った。お前は小学生か。いや、むしろそれ以下だろうと思った。

この一週間にこれ等以外にも数々の虐めとも言えない悪戯を私は綾香から受けたのだが、全部軽くかわしてやった。

机に「ブスエミ」と書かれ、体育の授業の後ブラウスが盗まれていたり、何故か『サボリ教室』のBS機能が破壊されていたりしても全然怒らなかった。ああ怒らなかったわよ。

ええ、怒らなかったとも。      なぜならば。

凄く莫迦らしかったのだ。

綾香は本気じゃなかったから。綾香が本気になれば多分もっと凄いことをしてくるのだ。それは一年のときに身をもって知っていた。一度本気で喧嘩をしたときの、あの頃を思い出すと今の綾香は本気で私を苦しめようとはしていないとの結論に達した。

これは私の推測なのだが、恐らく綾香は戸波先輩がいうように、彼女なりのアピールをしているのだと思う。もっとあたし等が必要としろ。もっとあたし等に相談しろ。やり方を変えて、皆で楽しめるようにしろ。そういうアピールをしているのだと思う。

そう考えると、従業員にストを起こされた会社の社長の気分がよく理解できた。

こっちは、十分頑張ってるじゃないの。何、我がままを言ってるのよ。

ふざけやがって、という気分になってくる。

ここは一発言い返してやろうか、という気力が湧き出てきたので、「で、私は何処に行けばいいの？」

と言うと、途端に聡子は表情を明るくさせた。愚かな奴だ。

「こっち、綾香ちゃんが……あ」

「どうしたのよ」

「綾香ちゃんが呼んでるって、エミちゃんには言っちゃいけないん

だった。どうしよう」

私は不快感からくる溜息を吐き出した。

「言わないであげるから、場所は何処なの」

「あ、ありがとう」

ミチルと似たような口調で感謝の言葉を言われ、不快感が爆発した。

「……しよは……?」

「え?」

「場所は何処だつて訊いてんのよ!」

「……あつ! た、体育館裏。いつも私が呼ばれてる、……そこ」  
聡子を残し、猛然としたスピードで私は体育館裏まで歩いていった。

後ろで寂しそつにいる聡子のことなど、このとき念頭には一欠けらもなかったのだ。

私に後悔の文字などほとんど無いに等しかったのだから。

## 【第15話】

聡子の告げた場所まで私はぼんやりとして半分意識が何処かに行つてしまつたかのように、放心した状態で歩いていった。綾香は一体私に何の用があるんだろうと頭のすみで思いつつも、私の頭の中では少し色素の薄い平凡な顔立ちの絵描きの姿が半分を占めていて、目の前の物事に集中できそうになかった。

最近ではいつもこんな感じなのだ。ミチルのことを意識しない時には、呪いのように何故か子供の泣き声がぎゃあぎゃあ騒ぎ捲くり、気がつくとミチルを連想せざるを得ない状況になっている。けど、この意味不明な現象はミチルに会うと呆気ない程に姿を消すのだ。こんな意味不明な現象のせいで、この時私の牙がそうとう腑抜けへと変貌していたことに気がつくことはなかった。

そして、体育館裏に着くと、獐猛な牙はするすると忍び寄つてきた。

「おい、エミ。お前に用があつてさ」

そんな下品な声で綾香が言つた。

俯いていた顔を上げると、私の瞳に映つたのはにやにや笑う綾香とその仲間たち。もちろん以前は私の配下に治まっていた藍や下級生もいた。それを見て私は、何だか聡子と立場が変わつたみたいだと思つた。何だか全てがどうでもよく思えて、世界が下らなく思えた。そうこうしていると、ふと聡子がこちらに誰かを連れ立って歩いてくるのが見えた。

半眼になつてその方向を見据えると綾香がにやつと笑つて、警告してくる。

「エミ、早く言つたほうが身の為だからな」

「あら、それがどういふ風に私の為になるのか、是非教えてほしいわね」

高飛車に返すと、予想外に綾香は余裕の表情で持って私にその根拠を示しだす。

「こういうことだよ」

聡子の後ろにいるその人物を見た私は全てを理解した。

「……タブー」

呟くと綾香が、に、と笑った。

私達のグループに男子は入れてはならない。入れることはタブーとされており、その理由としてはとにかく不公平の一言に尽きる。元々私の通うこの高校は女子高であったのも理由としては十分なのだけれど、男子が私達のグループに入ると色々と問題が生じてしまうのが一番の理由だった。

様々な学校の裏技を所持している私達は、一般の生徒が入れないような場所や死角に容易に容易く入ることができる為、男子生徒が女子更衣室の隣の部屋などに入れるようになってしまっただけは問題となるのだ。よって、男子生徒は私達のグループには決して入れてはならないと、昔から代々決まっているのだ。それをこの女は。

「綾香、アンタ、何をやってるか自覚してるの？」

怒り交じりに私はそう詰った。

綾香はやってはならないことをしようとしているのだ。

「これ以上暴走するつもりなら、私は貴方を除名するわ」

これは一番卑怯なやり方だったが、それも仕方がないと私は思った。そっちがその気なら、こっちもそれ相応の手段を使わせてもらう。綾香を除名し、秩序を取り戻すのだ。

「ああ、構わないよ。あたしはお前のそういうやり方が気に入らない。一人で何もかも決めやがって。あたしはお前の子分か何かなのかよ？」

「違うわ。貴方こそ何なのよ。私の友達じゃないの？ 少なくとも私はそう思っていたわ」

「あたしだって友達だと思ってたのに、お前が裏切ったんだろ」

「私が？ 何時、何処でかしら？」



「バレーボールの試合の時、お前ツ、皆に命令してあたしを狙わせただろ！」

は。と私は嘲笑う。何を言っているんだお前は。流石は莫迦綾香だ。

「アンタね。最初に裏切ったのは綾香でしょ。ミチルと私の写真を取って逃げたじゃない」

「……………あれはあ、」

「何よ」

う、と綾香は言葉を詰まらせ、悪い頭で必死に言い訳を考えているらしい。何てヤツ。

先に裏切ったのは綾香の方で、私は悪くなんてないというのに。それをすっかり自分だけ忘れて、棚に上げて「お前が裏切った」とはよく言ってくれる。

「エミ、それは悪かったと思ってるけど……。いや、あたしが悪かったんだけど。何かアイツ気味悪かったし……。エミと知り合いっぱいから、後でからかってやろうと思って」

莫迦なやつ。

でも、私はこんな莫迦な綾香が嫌いではないのだと思う。だから私は一緒にこいつとられるのだと思う。

「仕方ないわね。ここらで引き分けにしておかない？」

そんな実に優しい私の提案に綾香は難色を示して、何だかもしもじしだした。ちらつと後ろを振り返って皆の顔を窺っては、私の方をちらりと見る。自分で決められない奴がよくやる仕種だ。綾香は皆と一緒に私と仲直りしたいのか、それとも自分でもどうしていいのか迷っているのか知らないが、藍やその仲間と相談してから決めるようだった。

まあこれでやっと元の関係に戻るし、靴箱に蛙とか素麺とか意味不明なものを入れられなくて済むと思うと少しばかりほっとした。何だ彼だ言って綾香と私は二人揃わないとお互いに落ち着かないのだ。

「あれ？」

間の抜けた声が聞こえた。声のした方向を見るとたった今聡子が連れてきたタブーであるはずの男子生徒が口をぽかんと開けて立っていた。恐らく、この男子生徒が発したのが今の間抜けな声なのだろう。

「もう終わっちゃったの？ 俺、用なし？」

名前も知らないし顔も知らない、また私達とは何の関係もないこの男子生徒が、この現場にいる時点で私には不快に思えてならなかった。むっとして売り言葉に買い言葉。

「そーよ。アンタの出番なんか最初からないわ。さっさと何処かに行つて」

何の関係もない生徒に暴言を吐いてしまっていた。呆氣に取られた男子生徒は、流石に私の暴言で怒ったのか憎々しげに私と藍や綾香の方を睨んできた。

そして彼は予想外の言葉を発してくれた。

「どういうことだよ、これ。お前ら、すっげ裏技を教えてくれる代わりにこの中曽根とかって女を殴れって言つてたろ。話ちげーよ！」

「なッ！」

その場の全員が驚きの表情をした。私はそんな話だったのか、という驚き。

「お前等、エミは傷つけないって言つたろ！ 藍ッ。どういうことだよ！」

綾香は藍達が裏切ったことへの驚き。そして、藍や綾香の仲間であつた彼女等は。

「高村！ テメ、ばらしてんじゃねーよ！」

高村という男子生徒の愚かしい裏切りの驚き。

この中でも一番驚いて、動揺してショックを受けていたのは綾香だった。絶望の表情を顔に貼り付けて自分の仲間であつた人間を見て、何でどうしてと打ちひしがれていた。

「……だって、エミには傷つけないって。脅すだけだって。……脅

して、サボリ教室の鍵とか奪ったら、後は元通りだって……言ってる……た」

本当に莫迦で無様ね。自分が従えていたと思っていたら、逆に従えられていたなんてね。

そう思いつつも私は綾香が味方に戻ってきたことで心強くも感じていた。

「綾香。こいつ等にそんな頭ないのよ。自分達が得することだけ考えているの。少なくとも綾香、それに私も誰かの為を思ってたけど、一応は行動していたでしょ。ま、ほとんどは自分の為だったけど、一応は仲間の為を思ってたこれから決めてきた」

それが怪物と私の違い。

そう思う。

あなたの為。それは魔法の言葉で善にも悪にもなる。

笑わせてくれる。

「誰が黒幕なのよ？」

「あ？」

綾香が何言ってるんだよ、と私に視線を向けてくるので、莫迦な綾香の為に説明する。

「今回のこの呼び出しは誰が罫を張ったのか、と聞いているの。今回の喧嘩も、この呼び出しも何だかおかしいことが多すぎるわ。大体タブーを使って私達を嵌めるなんて考えるの、藍や私のグループの人間では無理よ。制約が多すぎる」

「どういうことだよ？」

「だから、私と綾香が学校中の秘密を握ってるんだから、逆らうような真似普通しないじゃない。つまり、逆らうというのは私から秘密を奪えたときだけに限られるのよ。でもこれはリスクが大きすぎる。私のグループにいれば自ずとその恩恵にありつけるんだから。これ等を天秤にかけると、グループ内で危険を冒そうとする考え自体珍しいでしょ。綾香も、グループ外の人間に私も嵌められたのよ。そう考えるのが自然だわ」

逆らいさえしなければ、私のグループにいる限り黙っていても学校の裏技を使えるのだから、無理する必要も危険を冒す必要もないのだ。それを敢えて今回彼女達はしてきたということは、誰か唆した人物がいる。それもグループ外の人間で。

「誰なの？」

短く私が問う。すると、皆の視線が一人の少女に集結した。

「聡子？」

ビクリ、と聡子が体を震わせた。

「……だ、だって、酷いよ。エミちゃんも綾香ちゃんも。でね藍ちゃんもそんな二人に悩んでいるの知ってたから、だから、……私。藍ちゃんに相談したの……」聡子は怯えたように親指を口でしゃぶりながら「こうすればいいって。私の知ってる男子にちよつと殴ってもらって秘密を、い、言わせちゃえって」

中々、随分とあくどいことしてくれるじゃないか。聡子の癖に。

大よそ、私達リーダーに不満を持っていた藍に聡子は復讐の意味も込めて、男子に殴らせる。そして学校の秘密を吐かせるとも言ったのだろう。その話に意気揚々と藍は乗った。

「でもね、最後のは誤算だったわね。その高村って奴が全部ばらしちゃったから、綾香が私の味方になっちゃったものね。それに殴る殴るって随分と杜撰な計画じゃない。停学になるわよ？」

くすりと私が嘲笑い、綾香も私の方に戻ってきて、に、と笑った。「綾香と私は二人。そして高村って奴は一人。聡子。アンタ算数もできないの？ 高村が私達から情報を聞き出す前にどっちかが逃げ出して、先生なり生徒なり連れてこれるじゃないの」

「あのね、エミちゃん。私ね。それでも成績はいい方なんだ。学年で三十番以内だし」

「三十番内？ そういうのを三流っていうのよ」

聡子が泣きそうな顔をして、怒ったように言った。

「え、エミちゃんにはそうなのかもね。三十番なんて大した数字じゃないんだよね。でもねっ。私も算数くらいできるんだな。エミち

「やんは忘れてるよ。藍ちゃんと私と皆と高村くんを足して、……えと。いちにいさん……十人ちよつと。エミちゃんと綾香ちゃんは二人。私と藍ちゃんは大人数だけど、エミちゃんと綾香ちゃんはたった二人」

「だから、そんな暴力なんて働いたら停学になるっての」

と、綾香。全くだと私は思いつつも、何処かいつもと様子の違う聡子に不安を覚えた。

「うん。知ってる。だから高村くんを呼んだの」

「？」

訳が分からない。何を聡子はしようとしているのか意図が掴めず余計な不安に駆られた。

そうこうしているうちに、聡子が高村を促して何かをしようと準備をさせている。何だろう。何するつもりなのよと思いつつ、誰か人が来ないか目敏く視線を巡らして、逃げられる場所も探しておく。全くこんな茶番にはバカバカしくて付き合っただけなられない。綾香に逃げようと合図を送ろうとして、目を疑った。「え」そんな声が私の口から漏れた。

「……う……うっ！」

高村とかいう奴が綾香の首を絞めていたのだ。綾香は苦しそうに喘いでいて& amp;#36384;いていた。

だんだんと綾香の顔が真っ赤から紫色へと変色しだして、口から涎が垂れてきた。それでも高村とかいう奴は綾香の首を締め付け続けた。

「ちよつと、何やってんのよッ！ 幾らなんでもやりすぎよッ！」

私が叫ぶと、すかさず聡子が言ってくる。

「あのね、私はエミちゃんの友達だから綾香ちゃんを攻撃しているの」

「何、ふざけたこと言ってるのよ！ ふざけんじゃないわよ！」

激昂した。何を聡子のクソ莫迦は言っている？ 怒りで体が震えてきて、溢れ出してくる止め処ない感情が制御できない。冷静にな

らないと。そう思いつつも普段の半分も冷徹になれない。綾香が、私の友達が死んでしまう。どうしよう。どうしたらいいの。

それしか考えられない。

「あのね。エミちゃん。綾香ちゃんって粗暴なイメージあるでしょ。だからね、綾香ちゃんが怒りに任せてエミちゃんを殴っても不思議はないでしょ？」

そうかもしれない。でも、だからそれが何だっというの？

「私はエミちゃんが綾香ちゃんに襲われているところを知り合いの男子の手を借りて助けたの。言っている意味分らない？　そして、綾香ちゃんとエミちゃんは喧嘩をしてた」

まさか……。

「私ね。綾香ちゃんとエミちゃんが喧嘩をしているって聞いてチャンスだと思ったんだ。二人が喧嘩していけば、皆も綾香ちゃんがエミちゃんを襲うのを不思議には思わない。だからもつと仲が悪くなるようにね、エミちゃんの靴箱に綾香ちゃんが入れそうな変なものいっぱい入れたんだ。だからね、私がエミちゃんを守る為に綾香ちゃんを攻撃できるの。分かるよね？」

分かる。分かってしまった。これだけ正当性とイメージができてしまつては、聡子がどんな暴力を綾香に働いたとしても停学にはならないだろう。聡子は私を守る為に綾香に暴力を働いたと誰もが思つてしまい、誰もあの愚かな聡子がこんな卑怯な行為をしていたとは考えもしないだろう。

こう言われた相手は何もできないのだ。

あなたの為にやったの。例えば私が文句を言つたとしても、聡子はきつとこう返す。私は何も知らなかった。え、綾香ちゃんが襲つていたんじゃないかったの？　ごめんね。そうは見えなかったよ。とてもじゃないけどそうは見えなかったよ。襲っているようにしか見えなかったよ。

……ごめんね……。

それは魔法の言葉。善にも悪にもなる魔法の言葉。

「私ね、エミちゃんの為にやってるの」

「っ！」

やられた。

全く逆の立場に立たされた。今では聡子と私の立場は完全に入れ替わっていた。

先程、聡子が私と綾香が二人だけで聡子達は人数が多いのだと協調した理由が分かった。

もし、これが公になった場合、人数の多い方が口裏を合わせたとき信用されやすい。これだけ大人数で見た印象で綾香は私を襲っているようにしか見えなかったと証明しやすくなるのだ。

「賢いエミちゃんなら分かるよね。サボリ教室の鍵と屋上の鍵、出してね」

一瞬迷ったが、綾香の苦しむ顔を見てもう駄目だと思った。綾香は顔を真つ赤にさせて金魚のように口をぱくぱくさせて、何かを言おうとしていた。じつとその口元を見る。紫色に変色した唇が痛々しい。じ、と口元を見て何と言おうとしているのか予想した。

……エ

ミ。

「！」

私の名前だった。

もう、私は迷わなかった。

「……わかったわ」

## 【第16話】

この日、私はこの学校の秘密の全てを亡くした。

あの後、綾香に散々怒られた。エミらしくないぞ、何やってるんだよと怒られた。どうやらあの時、必死に綾香は「エミ、絶対渡すな。本当に殺すわけないんだからな」と私に伝えようとしていたらしい。読み違いにも程があつたのだが、それでも私は後悔していなかった。むしろこれで良かったとも思っている。別にいいのだ。

もう。

「何か、肩の荷が下りたわ」

言っていて自分でもババ臭いと思った。

体育館裏から戻り、がらららら、と教室の扉を開け放つと既に私の失脚が知れ渡ってしるのか、クラスの半分が藍の方へと移動してもう半分はどちらにもつかず様子見といった風に二つの派閥ができあがっていた。呆気ないものだなと思った。でも実際こんなものかもしれないとも思った。

人生そう上手くはいかないだろう。

気になったのは綾香の姿が見られないことだった。何処にいったのか知らないが、居心地が悪いのかもしれないと思った。綾香はそれなりにプライドも高いし、それは私も同じだが綾香は自分の感情に振り回されるような子供っぽいところがあるのだ。私は上手く制御をしているつもりだったのだが、人のことはもう言えないかもしれない。

そう思いつつ椅子に座ると、ブス、と何かが肉を突き破った。

「……いっ！ たあ……」

まさかと思いつつ私は自分の尻を確認すると、見事に刺さっていた。画鋲が。



今時こんな悪戯をする奴がいるのかと思えば、くすくすと笑い声が聞こえてきた。そちらを睨みつけると、何と声の主は藍だった。屈辱だった。姿を晦ました綾香の判断は正解だったかもしれない。痛む尻を押さえつつ、再び席につくと信じられない光景を目の当たりにした。

「……うっそ」

机の中に目一杯詰め込まれた卑猥な雑誌の束。

どれも男の人と女の人が裸で絡み合っていて、気色悪い。しかも何か臭い。そんな雑誌やら紙が机の中に溢れる程入っていたのだ。誰がこんなことをと思つて顔を上げて目が合ったのは、にやにや笑う男子生徒達の姿だった。クソ餓鬼が。お前等、覚えていろよ。

真っ赤になつて席につき、机の中に入っていたはずの教科書がなくなっているのに気がついた。またかと思いながら、教科書達の行方を探す。すると発見した場所はにやにや笑つていた男子生徒達のズボンの中だ。無理矢理に押し込めているようで、半分くらい本が突き出ている。

それを確認する。

そして一瞬にして憎悪の炎が燃え上がった。

何で私は綾香如きを救う為に学校の秘密とリーダーの座を明け渡してしまったのか、甚だ後悔し始めていた。何で私がこんな目に遭わねばならないのだ。綾香など死んでしまえ。

むかむかした。

それから数々の嫌がらせの痕跡を私は見つけ、流石に目尻から液体が流れ出すのを止められなかった。ちくしょう！許せなかった。殺してやろと思った。でもそれだけ私は他人に恨まれていたらしいと分かり、少々はショックを受けたものの、聡子以外にはそんなに酷いことはしていないと思ひ直した。何にせよ、こんな扱いを受ける理由がない。

その日はとりあはず教科書不在のまま授業を受けた。そして次の日もこんな扱いだった。

次の日は、体育の時間にトイレに閉じ込められて遅刻し先生に怒られ、バレーボールの練習相手はいないし、相変わらず綾香はいないで散々だった。それでもまだいい方だった。体育を終え着がえようと女子更衣室にいつてみれば、制服が水浸しだったのだ。私の学校は進学校なので体育と部活動以外は常に制服でいなければならぬという訳の分からない校則がある。それを知ってか知らずか、彼女達は制服を汚してくれた。一体怪物にどう言い訳をすればいいのか、そっちの方が心配でならなかった。やってくる。

上履きは無くなる。靴の中には砂。トイレにいけば次の人に急がされ、お弁当も紛失。

卑猥な格好をした私の合成写真は出回る。教科書は返ってきたけど落書きだらけだし、これを使う気にはなれないし。女子の虐めはまだマシだったのだが、男子のこの下らなくも愚かしいセクハラには心底辟易した。

こういう日に限って木曜日だったりしてミチルには会えないし散々だった。何よりもムカついたのは綾香がアレ以来学校に登校してこないことだ。莫迦綾香の為に私はこんな目にあっているというのに、今日も綾香は私をこの孤独な学校に取り残したまま、一向に姿を見せない。それでも何とか耐えられていたのだが、あの愚かな藍達がサボリ教室を無断でそれも土足で使っているのを見たときだけは、流石にキレそうだった。あいつらが、私や先輩達が築いた掛け替えのないものを使う権利なんてないのにつ。

怒りに燃えると同時に、先輩達が守ってきたものを守れなかった、自分の不甲斐なさを呪い、自己嫌悪になった。ごめんさない、戸波先輩。

私を推薦してくれただけに戸波先輩に責任を感じて、どうしようもなくなった。

次の日。 金曜日。

何だかだんだん疲れてきた。涙を堪えるのも、肩肘張っているの

も疲れてきた。こんなのを毎日聡子は耐えていたのだとするなら尊敬に値する。よく我慢したものだと思った。いや、諦めなかったなと思う。疲れなかったのだろうか。その私を貶めた聡子は藍やその仲間達と打ち解けたようで楽しそうに過ごしていた。一瞬視線が合つて、一方的に逸らしてやつた。聡子の顔など見たくもない。どうぞ、藍の莫迦と楽しくやつてくれ。大体、この差は何だ。確か聡子が虐められていたときの男子は聡子のことを鼻糞のように扱ったのだが、私の場合は何故か色街のホステスみたいな扱いをするのか疑問だ。虐めるなら中途半端なことはいらないでそれこそ私を自殺に追い込むくらいに苛め抜いてほしいと思う。

「……はあ。うざい」

無性にミチルに会いたいと思った。絶対に今日の放課後公園に行こうと思った。家では怪物がいて心休まらないし、ストレスの捌け口にしていた学校は今では最悪のストレスの塊で、心休まる暇がない。ミチルに会いたい。とにかく会いたいのだ。

うざやああああああ ああああああああ

また、あの子供の声が聞こえた。

会いたい。

強くそう思うと声は静かに遠のいていった。僅かに安堵する。ほっとしたのも本当に束の間で、誰かが私の体にぶち当たってきて廊下で盛大にコケた。

「いったいわね！」

何処のどいつだ。この私にこんなことをしたのは。顔を見てやろうと体を乗り出した。

最近では、誰が何をしたのか逐一記憶しているようにしているのだ。必ずこの恨みは晴らしてやるつもりであつたし、恨みは一生忘れないタイプである。黒い瞳を光らせて爛々と相手の顔を見る。見て、もっとむかついた。

「聡子」

はっと、聡子が私の顔を見てビクリと震えた。今や怯える必要な

どないのに。

「あ、エミちゃん。ごめんね。ぶつかっちゃった」

何がごめんよ。わざとの癖に。

私は謝る聡子を尻目に立ち上がってスタスタ歩き出した。死ね聡子。顔も見たくないの。私はズンズンと廊下を進み振り返りもしなかったのだが、後ろから小走りについてくる足音を聞き不快感に眉を寄せる。ふりきってやると更に進む足を速めると今度は聡子の走る足音も速くなった。絶対に振り返るものかと思った。

「待つて。エミちゃん！」

限界だった。

「何よ！」

悪鬼の如き形相でそう激昂すると、聡子は「ちょっと待つてくれないかな」と言った。

「何よッ！ 何か用なの？」

私は完全に上から見下してやった。小柄な聡子がこちらを見上げる。

「……あ」

見上げている己の姿に気がついたのか聡子は数歩、私から距離を取った。

「やっぱりエミちゃんは凄いな。私なんか一日でもう我慢できなかったし毎日泣いてたのに、エミちゃん、全然平気なんだもん」

平気な訳ないでしょ！

と、怒鳴り散らすのを何とか堪えて、私は平静を装い聡子の話の先を促す。「それで？」

「……あ、あのね。私、虐められていてすごく辛かったから、エミちゃんにもそれを一度味合わせてやりたいと思ったの。でも、エミちゃんは全然平気なんだもん。きつと、エミちゃんにとって、私が辛いと思っていたことなんて何でもなかったんだね……。でね、そう思ったら何だか私のしたことって何だったんだらうって……。別にエミちゃんを辛い目に合わせなくても良かったんじゃないかっ

て、思つて……。私、虐めがなくなつても学校、楽しくないよ。全然、楽しくなんかないよっ！　だ、……。だから、辛かったのつてエミちゃんのせいじゃなかったのかもとか今更だけと思つて。だからね、ずつと謝ろうと思つていたの。ごめんね。私、酷いことしたから。ごめんね」

「何が言いたいのよ。謝りたいのか、愚痴言いたいのか、はっきりしなさいよ」

「ご、ごめんね。何でもないよ」

何よ、それ。

謝ろうと思つていたつて何よ、と私は思う。聡子は後悔しているとしても言いたいのだろうか。虐める側に回ったのなら後悔など一切しないでほしいと思う。虐められる側が惨めではないか。後悔しながら悪いと思いつつ虐める虐めっ子は悪役では成りえないのだから聡子は私に憎むことも許さないとでも言うのだろうか。「……死ね、聡子」

心の中で私は聡子を呪つた。

## 【第17話】

さて、恒例の『エミ虐め日記』であるが、今日の虐めはこんな感じであった。まず、最初に何と上の階から大量の水が降ってきて窓際の席であった私は一瞬にして濡鼠となった。この日も制服が朝から水浸しとなる。スカートが纏わりつきブラウスが肌に張り付いて気持ちが悪くて仕方がない。しかし校則により制服でいなくてはならない為今日もこのままの格好で授業を受ける破目となった。いつも通り机の中には卑猥な雑誌も詰め込まれていたのだが、今日になって変化があった。

手紙だ。それ等の雑誌に紛れて封筒に入った手紙が添えられており、一つ読んで全て破り捨ててやった。内容は酷いものだった。僕は貴方を愛してます。虐めにあっているのを可哀想に思ってます。だから色々と慰めて上げたいので今日学校が終わったら、  
に  
来てください。

田辺

誰がアンタに慰めてもらわなきゃなんないのよ、と思った。クソ田辺め。

そして今日は女子サイドの虐めにも変化があった。

「何か、臭くない？」

こんな台詞から女子達が騒ぎだして、最初は何を彼女達は言っているのか理解できなかったのだが、暫くするにつれ周りの女子からの断片的な会話から大よその嫌がらせの全貌が明らかになった。

「うわ、臭い」「何の匂い？」「何処から匂ってるの？」「あっち」「中曽根さんの方から」

「……………」

臭い、と。この私が臭いとも言いたいのだろうか。

アンタ達の方が臭いじゃないの、と思いつつも反論できないところ

るが悔しい。今朝浴びた大量の水が匂いを発しているのかもしれない。地位とは実に非情だと思った。多分以前の私に大量の水がかけられて、それが例え臭かったのだとしても、彼女達は決して臭いとは言わなかっただろう。それどころか敢えていい匂いと言ったかもしれない。

またグラウンドから彷徨いこんでくる埃が私のブラウスを茶色く汚し、肌にもついてざらざらとして肌触りがして、実に不快だった。そうになると今度彼女達は私のことを汚いだとか不潔だとか言い出すのだ。

どうしようもなく惨めだった。

そのまま放課後を迎えるまでには、私の姿は酷い有様になっていた。

精神状態もおかしくなってきた、自然なことが自然に思えなくなってきたのだ。

何で、私生きてるんだっけ？

ふと、そんな風に思えてきたのだ。

生きたいと強く思ったことはあったのだろうか、何故私はこうして生きているのか、何の為に生きているのかが曖昧になって、私の存在そのものを脅かし始めた。別に今直ぐに何か不慮の事故で例えば交通事故などで命を落としたとしても、この世に未練などあるだろうかと思う。

少しそう考えてから、最後にミチルに会っておきたいかもしれないと思った。

後は別にいいや。

怪物になんか会いたくないし、綾香は一人で逃げていった。父親だって遠くにいて疎遠だし、姉のユミだってもう随分と会っていない。今ではどうでもいいような気もする。岡崎には少しだけ会いたい気もしたのだが、今会ったら私の精神状態をあっという間に看破されそうにも思え、見抜かれるのは嫌だったので岡崎には会うまいと決めた。

痛いのはやだな……。どうせなら、不慮の事故とかで一瞬で逝きたい。

死んだらどうなるのだろうか。無になるというけど、本当の意味での無を知らないのによく分からなかった。真っ暗になるのとは違うと思う。黒いというのも一種の色である、種類であるのだから無ではないと思う。だからと言って透明になるというのも違う気がするのだけど。

天国などあったら嫌だと思った。絶対に自分は地獄に行く破目になるだろうから、どうせならば無であってほしいと思う。ただ消えてしまいたい。私という存在全てが消え去ったら気持ちがいいだろうなと感じた。もし何の柵も何の制約もなく何の苦痛も何の喜びも何の悲しみも怒りも、そして何より何も悩まなくていいのならやってみる価値はある。

そもそも生きている理由がない気がしたのだ。

家族にも大して愛されておらず、友達もなくしたのなら私の生きている意味などない。

必要とされていないのならいつそ楽になってもいいのではないだろうか。

何より悲しいだとか苦痛だと感じる以前に、面倒くさいと感じている自分がいる。

「でも、その前にミチルに会わないと」

私は学校から出て、公園へと向かった。公園の看板の前まで来て、ああこの公園の名前はこんな名前だったのかと今更ながら気がついた。看板には“仲良し公園”とありきたりな名前がカラフルな文字で描かれていた。その周りにリスやウサギが笑いながら踊っていた。多分それが仲良しな様を表しているのだろう。名前とはかけ離れた使い方をしてきた気がする。田辺と聡子を嵌めようとしたし、ミチルも嵌めようとした。でもミチルと仲良くなれたのだから私にとってもここは“仲良し公園”であつたのだろう。

ふらふらとした足取りでミチルがいつも座っているベンチに向か



う。ベンチには今日に限って誰も座っていなかった。この公園には私以外誰もいなかった。誰一人。

「……酷い。何で、今日に限って？」

これが今までで一番悲しかったかもしれない。目の前がぼんやりと歪んできて、頬を熱い液体が伝っていつて地面にぽたりと落ちた。「……うッ。……ふ……ああああ」

一人の空間に耐え切れなくて、携帯でまず綾香に電話した。コール音だけが響いて綾香は電話に出てくれない。いつもなら三コールくらいで電話に出るのに。

「何で、でないの！」

次に怪物に電話した。腐っても親だ。娘の一大事に出てくれるはずだと自宅の電話番号を押す。暫くコール音が耳元で響いてもう駄目かと思い始めた頃、怪物の声が聞こえた。

『はい。中曽根ですが？』

「……母さん？ 母さんっ！」

『エミ？』

怪物の声が聞こえてきてちょっとだけ落ち着くことができた。荒くなった息を整えて、私は口を開こうとして何を話したらいいのか分からなくなった。一体何をどう説明したらいいのだろう。

『エミ。何やっているの？ 早く帰ってらっしゃい。用がないなら切るわよ？』

「待って！」

何か。何か話さなきゃと焦れば焦る程言葉は出てこなくなり、更に焦って混乱する。混乱を持ち前の理性と冷静さで捻じ伏せ、私は何とかしどろもどろ話だした。

「あ、えつと母さん。今日、あのちょっと学校で酷いことがあったね……。それで。少しでいいから学校を休みたいの。別に登校拒否とかじゃないから。少し休むだけ。駄目？」

精一杯説明した。

少しだけ休んだらまたあの学校という名の戦場へと戻ってもいい

と思う。怪物もそれくらいなら許してくれるだろうという僅かな期待もあった。自分の母親なんだから私のことなら分かってくれる。何か、母親の勘みたいのが働いて「ああ、この子は今精一杯頑張っているのね。なら親の私は見守ってあげよう」とかそういう風に思ってくれるはず。

もちろん、あの怪物が期待通りになっってくれるはずなんてなかった。

『何、言ってるの！ 駄目に決まってるでしょ。今貴方は大事なときなのよ？ 分かっているの。受験生という自覚を持ちなさい！』

「分かっているよ。ちゃんと。でも今は駄目なの！ 耐えられないッ！」

『何を莫迦なことを言ってるのよ。ちゃんとなさい！』

「莫迦なことなんかじゃない！ 私、もう死にそうなのよッ？」

『何が死にそうなのよ、莫迦なこと言ってるでさっさと帰って勉強なさい！』

「分かって。お願い！ 今だけっ」

「っ！。っ！。っ！。っ！。っ！。っ！。」

「え？」

一瞬何が起こったのか信じられなかった。そして、何が起こったかをしっかりと脳が認識した頃には、何だか何もかもがどうでもよくなっていた。きつと自分はその程度の存在なのだと思えてきた。疎遠で分かり合えない親と、突如都合よく分かり合えるはずもなかったのだ。それでも私は心の何処かでこういう緊急事態 例えば本当に生死に関わるようなときには、奇跡のようなものが起こって虫の知らせが働き、場所も告げていないのに母親が慌てて駆けつけてきて抱きしめてくれる。そんな展開を愚かにも望んでいた。

甘かったとしかいいようがない。

「よいしょ」

ブラウスの袖で涙を拭いて、一歩、ベンチへと足をかけて、体重をベンチの上に移動する。ベンチの上に立つ。いつもより視点が一

段上になって、夕焼けに染まる朱色の空が少しだけ近くなった気がした。ミチルの背丈は私よりも頭一つ分くらい高いので、大体このくらいの視点でいいはずかなと思ってベンチに乗った。

ミチルの世界は私には理解できないけど、ミチルの見ている場所くらい共有してもいいではないか。最後にそれくらいいいではないか。そう思ったのだ。少しそのまま立っていると満足したので、その足で“仲良し公園”の女子トイレへと向かった。衛生上悪そうな蠅の飛び交うその空間に私は足を踏み出した。中はじめじめしていて薄暗かった。学校指定の鞆からカッターを取り出す。そのチャチな刃物を目の前にしても私の心は意外なほど冷静で、冷たく、何の感慨もなくカッターの刃を外へと伸ばした。力、チチチチチチチチ。そんな音がして鋭利な刃が飛び出てくる。そうっと銀色の刃の面に指を添えた。指を少しずらす。つ、と線が走って赤い液体が玉のようになって滲み出てきた。これで、ただ少しだけ刃物で自分の肌を傷つけるだけで死ねると思うと何だか不思議だったし呆気ないと思った。所詮、人間なんてこんなものなのかもしれない。聡子が一瞬にして私から地位を奪ったように、命の重みなんていうのも呆気なくそして何処までも公平で不公平で、そんなものなのかもしれないと思った。私は迷わずに一切の躊躇をせず、左手首にカッターを突きたてた。特に何の音もしなかった。真っ赤な血は結構な量がでてきたが、くちゅりとかじわっ、とかそういう生々しい音はなくむしろ無機質な静けさだけが残った。

「痛い」

痛みは感じた。凄く痛くて、何だかピリピリする。その苦痛を私は既に予想していたのか、カッターの刃は肉の奥まで届いていなかったらしい。暫くすると湧き出てきた血は手首から流れ出るまでもなくその場で固まり始めた。直ぐに傷は補修されて、ただ痛みだけが残った。もつと切らなくてはと思う。もう一度左手首にカッターを突きたてたが、再び痛みを想像し痛みを体が感じると、右手は私の思うようには動かなかった。何度も何度も刃物を突き立てる。し

かし、無用な傷ばかり増え、私の意図するような大きな傷はできない。

「くっ！」

死ぬ、勇気もないのかと思った。何て情けない。無理心中などで、当のそれを行なった本人だけ自殺できずに、家族だけを殺して殺人容疑で逮捕されるのをニュースで聞く。ずっと家族を殺した殺人犯のことを莫迦にしていた。家族は殺せても自分は死ぬ、勇気もないのか、と。でもそんなことはなかった。何だ、私だって死ねないじゃないか。そんな私に人を莫迦にする権利なんかなかったのかもしれない。大抵のことなら対処できる自信はあったし、ある程度なら人より何倍も上手くこなせるとも思っていた。だから、それをできない人を莫迦に見下した。でも、私だってできないじゃないか！

「クッソ

っ！ 何でよっ、何でできないのよっ」

自分自身に怒りをぶつけた。何度も何度も左手首を、まるで親の仇のように滅多切りにする。さくさくさくさくさく。カッターが皮膚を削る音がやっと聞こえてきても血はそれほど流れない。ムカついて更に切つてやる。さくさくさくさく

ざくッ。

「っ！」

声にならない悲鳴を上げてカッターを投げ捨てた。トイレのコンクリートの地面をカッターが滑つていくがそれに構っている余裕はなかった。今のは深かった。痛い。凄く痛かった。身を二つに折って私は唸り声を上げた。涙が頬を伝つていく。「いたい。うう」そのままずると蠅が飛び交う汚れた地面に座り込んだ。お尻に湿った冷たい感触がして下着の中がじんわりと濡れているのに気がつく。

いつそ死ぬるならこのまま死にたいくらいだ。

それができない自分が憎らしい。

再びカッターを手にして死ぬ努力をしようと思いついて、カッターの所在を探す。直ぐに見つかった。女子トイレの入り口付近に刃

が出たまま転がっていた。入り口からの光を受けてカッターの刃は白銀に輝いていた。その輝きが影に隠れて一瞬にして奪われる。唯一太陽の光を呼び込んでいた出入り口が塞がれて、トイレは暗闇に包まれ視界が閉ざされた。だが、私にはこの暗闇を作った塊を目が見えなくても理解できた。

「ミチル」

やっと会えた。

そこには私が会いたかった人物、ミチルの姿があった。

今日も白いシャツに黒いズボン。手にはスケッチブックと鉛筆。ふわりと優しい髪の毛。しかし。今まで一度もなかったミチルの目が、今日に限って私とぴたりと合った。

「エミ」

「ミチル」

私は微笑んだ。ミチルも笑っていた。何だかそれだけで嬉しかった。どうして死のうなどと考えたのか今では分からない。ミチルは笑いながらこちらのほうに歩いてくる。男のくせに女子トイレに堂々と入ってくるのは流石としか言いようがなかった。ミチルにとってはさしたる問題でもないのだろう。ミチルが入り口でふと足を止める。その視線の先にはカッター。どうやらカッターに気がついたようだった。

「あ、それは危ないから」

私に返して。そう言う前にミチルは自然な動作でひょいとカッターを拾い上げる。そして私の左手首を見て、カッターを見てといった動きを交互に行ない、見比べると私の方へと歩いてきた。

「はい」

ミチルからカッターが差し出される。その動きがあまりにも自然で私は戸惑った。

「あ、ありがとう」

思わずミチルのような返事の仕方をしてしまった。ミチルからカッターを受け取って、よくよくじっくりとミチルを観察してみる。

何か、何処かがいつもと違う。しかし、何処に違和感を覚えるのか  
明確には判別できそうにない。

「……ミチル？」

「エミ。天国に行こうとしたでしょ？」

「っ！」

驚いた。見抜かれていたとは正直思いもしなかった。そもそも考えてみればミチルは確かに自閉症というハンディキャップを背負ってはいるものの、自閉症によって天から特別な才能を受けた選ばれた人間とも言える。頭だつて本当は悪くはないのかもしれない。

「……あ。でも、死ねなかったの。それに本気じゃなかったのよ」  
言い訳がましい　いや、正に言い訳を私は焦って口にしてしまった。

す、とミチルがこちらを振り向く。

「うん。知ってる。エミが本気じゃないの」

どういう意味なんだろう、と疑問に思った。その疑問を口に出す前にミチルは拙い言葉ながらも明確に理由を説明しだした。

「ボク、知ってる。ひーちゃんが手、傷つけるの何度も見ていたから。そのとき、ひーちゃんは本気じゃなかったの知ってるよ。エミも一緒」

どうしてそう思うの？と私は訊いた。すると二十秒後くらい経ってからミチルが答える。

「ひーちゃんはね、何度も手を傷つけていた。でも、ひーちゃんはそれじゃあ天国にいけないのに気がついたんだ。ひーちゃんはそのこと、ボクに教えてくれた。誰にも言っちゃ駄目って。約束した……。約束したら教えてくれた。血をぜんぶ抜けば天国にいけるって」

「……ひーちゃんが、そう言ったの？」

「うん。誰にも言っちゃ駄目だつて。でもひーちゃん、天国に行きたからもう言ってもいいよね。あのね、だから、エミにも天国の行き方教えてあげるね」

にこ、と何の邪気もなく何の悪意もなく、何の感情もなくミチル

は微笑んで言った。

「天国の行き方」

その笑みと言動が全く一致せず、それでもミチルに不自然な部分  
はなかった。ぞっとした。何故、ぞっとしたのかは私にははつきり  
と理解できなかったが、生理的にその笑みは受け付ける場所がなか  
ったと言うのが正しい気がした。私の中にその笑みを許容するスベ  
ーがない。全く未知の領域。得たいが知れない笑み。だからこそ  
恐怖をそそられた。

不気味……。その言葉がぴたりと当てはまるように思う。

「……いいわ。ミチル」

遠慮するわという意味で言った。しかし、ミチルはまるで足を止  
めようとはしなくて、一步、一步、靴の音を立てて私の方に近づい  
てくる。ミチルが一步步く度に、トイレのコンクリートが反響して  
かつん、かつんと音を立てる。その音が正に三流ホラー映画の登場  
人物の殺害シーンのように落ち着かない。一瞬、私はトイレの入り  
口へと視線を向けた。入り口に到達するにはまずミチルの脇をすり  
抜けて行かないといけない。逃げ道はない。

私はここの警報ブザーも何も装備されていない女子トイレのセキユ  
リティの甘さを今更ながら呪った。ミチルは歩みを止める気はない  
ようで、確実に私の方へと近づいていた。

「ミチルっ。天国の行き方は教えてくれなくていいっ！」

「ひーちゃんはみつっ。教えてくれたんだ。ひとつは、こないだひ  
ーちゃんがやった方法。空にとぶんだ。ふたつは、すいみんやくっ  
ていうお薬をいっぱいいっぱい飲むんだって。みつめの方法はね

ー

かつん、と音を成してミチルは私の目の前でやっと足を止めた。  
でも、そのときには既にミチルと私との距離はほとんどないも同然  
であった。私は地べたにへたり込んだ状態で、立っているミチルを  
見上げる。すると、ミチルはにこっ、と笑った。ぞっとした。鳥肌  
が立った。

かちかちかちかち。何の音だろうと思うとふと自分が発する歯の音だった。

まるで、ホラー映画ね、と思い、苦笑いしたくなる。

そう、まるで、自分の恋人を盲目的に愛し信じていた主人公が、ある日、その男が殺人鬼だと知ってしまう、決定的場面のようなと信じていたものが崩れていく瞬間。どうしようもない絶望。でも、男の方は最初から主人公のことなど愛してなどいなかったのだ。

そのことが、より絶望と悲劇を演出する。

ミチルが私の手からカッターを奪っていった。何の抵抗もできなかったし、その気力も奪われていたので、実に自然にミチルはカッターを手に握った。

「刃物できるんだ。でも、エミみたいに手は駄目だってひーちゃん  
が言ってた」

「……そう。それで？」

投げやりに私は答えた。

「手じゃなくて、」そういつつミチルはカッターの刃を自分の首筋に宛がう。「ここ、」

「首をきるんだって」

にこつと笑って得意げにそう言った。

「……そう、なの」

「はい、エミ」

え、と思う。

はい、エミ？

無邪気に微笑みながら、ミチルは私にカッターを当然のように差し出した。

「私に自分で首を切れって言つの？」

「うん。はい、エミ」

再びカッターを差し出される。ミチルの笑みには一切の揺るぎがなかった。それがさも当然であり、私の方が間違っているのではと錯覚する程には強固に見えた。



私が受け取らないと見ると、ミチルは唐突に何か喋りだした。

「切るとね、いっぱいいっぱい血がでるんだって、ひーちゃんが教えてくれた。痛くないって。直ぐにお休みするように天国に行けるって。天国ってどんなところかひーちゃんに聞いたら、そしたらお花畑がいっぱいっぱいあって、きれーなところなんだって。きれーだね。いいな。ボクね、こないだ気がついたんだけど、天国に行っても絵がかけるんじゃないかって。そしたら、お花の絵、かけるね。あかーい真っかな血もかきたいな。きれーなかわいいかわいい真っかな血。ひーちゃんのね、真っかな血の体もかいたよ。見る？　きれーだよ？　エミ。きれーな真っかでかわいいかわいい血。いっぱいいっぱいひーちゃんの体について、まるでおけしようしてるみたい。おそう式ではね、ひーちゃんの血は落ちちゃってたけど、ひーちゃん白くなってきれーだった。でも、血を浴びるのって気持ちよくはないね。なんかやな匂いするから。でも、ひーちゃんはすごいね。空をとんだよ！　妖精さんだったんだね、ひーちゃん。だから、天国も簡単に行けたんだね。ボクも行ってみたいな。でも、そう行ったら先生が天国じゃ絵、かけないっていうんだ。ボク、違うと思うのに。サンタさんも天国からくるんだよ。知ってる？　エミ。サンタさんは天国からくるから　「もう我慢できなかった。もういいっ！　黙れっ！」

ぽかん、とした表情でミチルは話すのを止めて、私を凝視した。

「どうしたの？　エミ。天国行くの止めるの？」

私はその質問を無視して、トイレの“出口”へと向かった。

「……エミ？　どうしたの？」

本気でミチルは私のことを心配しているのだろう。そういう病気なのだコイツは。可哀想なやつなんだと私はミチルにそのレッテルを貼った。完全に態度で拒否しているにも関わらず不安そうに私の顔を覗きこんできたので、ほんとミチルの胸を突き飛ばす。それにショックを受けたようにミチルは顔を強張らせ、みるみるうちに泣き顔へと変化していった。あっという間に鳴き声がトイレに響いた。

でも私はもう一切、振り返らなかつた。

結局、私はミチルのことを好きではなかつたのかもしれない。いや、そもそも最初からミチルを理解しようとしていなかったし、ミチルもそれは同じであつたのだらう。齟齬。

最初から間違つていたのだ。私は。勘違いしていたのだ。愛情と興味を。

もう、決めた。

何者も信じるものか。

もう、一人でいい。

## 【第18話】

空は蒼く快晴といっても差し支えない程には安定していた。

室内の空気も、恐らく外の空気も湿っぽくなく、程々には乾いていて過ごしやすい湿度だ。日差しも暑すぎずと丁度よくぽかぽかと私の肌を照らしている。カーテンの僅かな隙間からは薄っすらと気持ちのいい風も入ってきた。睡眠を貪るにはこれ以上ない絶好の環境。

それでも、私は眠りから覚めた。

今日は日曜日で、今時土曜日も授業がある有名進学校も流石に休みであった。だから、もつと寝ていてもよかったのに、目が冴えてしまい私は寝ぼけた頭を何とか起こし、ベッドから立ち上がる。ふと足を止める。私の部屋は二階にあるので、身支度を整えるには一階の洗面所に行くしかない。すると自動的に怪物とも鉢合わせなくてはないのだが、まあいいやと思い直して下へと着替えて降りていった。台所から料理するいい匂いがした。匂いに誘われてお腹がくうとなり、そういえば昨日は遅くなって夕飯を食べていないと今更ながら思い出した。

土曜日は何かと忙しかったのだ。模試があつたのと、『高見養護学校』へと行っていたのとで色々時間を食ってしまったのだ。

土曜日。

模試が終わった後、私は岡崎から貰ったゲストカードを返すために『高見養護学校』を独り訪れた。

ひっそりと静かで一人も生徒がいない、不思議な学生食堂に向かう。

そこで待ち構えていたのは、怒っている岡崎だった。

「これ、返そうと思って」

何事もなかったように私は岡崎に貰ったゲストカードを突っ返したが、岡崎はそれをちらりと見ただけで受け取りもせずに、よくそんなことが言えるね、とだけ言った。

「何か、文句があるの？」

「っ、あるに決まってるだろうっ！」

男の人の怒鳴り声には何処か強制的な含みがあるように思える。

怒鳴るのは卑怯だと思いつつ僅かに私はたじろいだ。でも、表にそれを出さなかった自信はあった。男の人、主に同学年の男子に噛み付かれるのは日常茶飯事だったので慣れていたのもある。でも、岡崎の怒鳴り声はそれとは少し違った。

「君はミチル君の病気のことを分かっていたのに、それにも関わらずっ！」

同学年の男子が自分の不満を怒鳴り散らすのに対し、岡崎はただミチルのことを代弁しているに過ぎないのだ。同学年の男子も岡崎も、私を攻めているのにも関わらず、岡崎はただ冷静にその事実に対して怒っている。この場合、冷静に怒る方が恐いのを私は知っていたので。

「それについては私が悪かったと思うわ。でも、貴方は私に何を期待していたの？ ミチルの保母さんにでもなれって？ それとも友達？ 貴方は何かしらの理由で私を利用しようとしたんでしょう？ だったら、失敗したときのリスクも考えておくべきよ」

だから私はなるべくなら冷静に対処するよう努めたのに。

「……だからって、君はやっちゃいけないことをした」

「誰もがやってるわ。障害者の軽蔑なんて……。皆口に出さないだけよ」

「そういうこと言うんだ。君、最低だね」

「あら、最高の褒め言葉ね。最低で結構。貴方こそ最低よ。私を利用しようとしたくせに」

「そうさ、ミチル君の為になると思ったからこそその行動だけど、何

か悪いかい？」

「誰かの為つてのは、当の本人には呪いの言葉って知ってた？ 押しつけがましいのよ」

「そりゃ結構な言い草だね。君のご両親が可哀想だよ」

「ふん。私のそのご両親だけどね、彼等の頭には私の姉のことしかないわ」

「そりゃあそうだろうね。妹がこんなに捻くれて育っちゃ仕方ないよ」

「あら、姉なら十八のときに真っ直ぐに育ったお蔭か、今や家出して行方不明よ？」

「……そうかい。それは君のせいなんじゃないの？ 妹が嫌で出てったとか」

「ふざけんじゃないわよ？ アンタ本気で言ってるの、それ」

「ふざけてなんかないよ。きつとお姉さんは君のことが嫌だったんだよ。こんな最低な妹」

「アンタの大事な大事なミチル君だって、大して貴方のことなんか何とも思っていないわよ」

むしろ、恩着せがましいって思ってるわよ、と付け加える。

そこで一旦、岡崎と私の怒りの沸点が越えた。

「お前にミチル君の何が分かるっていうんだ！ お前がミチル君を語るなよっ！」

「アンタにユミの何が分かるっていうの！ ユミのこと一番分かってるのは、この私よ！」

食堂中に響き渡ったその声は僅かに私の方が増していた。当然次の発言権は私に移る。

「アン、タ、なんかにッ！ ……アンタなんかに、私の、何が、分かるっていうのよ……」

自分でもこんなに低い声が出せるとは知らなかった。唸るような声で私は岡崎に言う。

「……私の家のこと、母親のことを分かるっていうの？ 家に帰ると

必ず携帯のメールをチェックされる子供の気持ち分かるの。小遣いで何を買ったかまで全部記録され、洋服も親の許しがないと好きな服は着れないし、食べ物だって好きなものは一切食べれないし、部屋の隅々まで監視されていて漫画も一冊もないわ。　　ッハ。パソコンもないし、ゲームなんか一度だってやったことないわっ！」  
　　つく、と喉を鳴らしてから、一度唾を飲み込んで主張を再開する。  
　　岡崎はただ私を見ている。

　　呆然と。その間拔けな有様がより腹立たしい。気分が高揚してきた。

　　「……そ、それにテレビだって私の見たい番組は見れないわ。何がNHKよ。莫迦じゃないのっ。あんな詰まんない局なくなればいいのに、それを見ろって強制されてっ。家に帰るのが遅いと容赦なく平手よ！　拳句、怪物は私が妊娠してるんじゃないかって疑って！私に何をしたと思う？　聞きたい？　ねえ、聞きたい？　どんなことしたかつ！」

　　岡崎は「遠慮しとくよ」と少々たじろいだ様子で言った。

　　「ユミが出て行ったのも分かるわ。こんな制約ばかりの家じゃ仕方ないじゃないのっ！」

　　「悪かったよ。エミちゃん。僕が悪かったよ」

　　参ったな、と岡崎は本当に困ったように頭を掻いた。

　　「ごめん」

　　もう一度、岡崎が謝った。

　　「ごめんね」

　　「……く」

　　「謝るからさ。　　だから、……泣かないでよ」

　　「……嫌い。泣いてないわよ！」

　　ぼろぼろ涙を流す私の顔に触れようとした岡崎の手を私は思い切り振り払った。それでも岡崎は私の頭に手をおいて強引によしよしといった感じに撫でてきた。完全に子供扱いだ。もう一人で生きていくと決めたのだ。誰とも親しくせず、誰にも頼らず、誰にも依存

しない、そんな生き方をしてやろうと決意したばかりなのだ。その代わり誰にも私の本音を見せないと、昨日誓ったのに。　ちくしょう！　最近はこんなのばかりだ。

「ごめんね。君は自分のことで精一杯だったんだね。僕のミスだよ。君ならミチル君の友達になってくれるんじゃないかなと思ったんだけど、無理なことを頼んでしまったね」

無理、と言われ私はかちんときて岡崎を見上げると、直ぐに、

「ああ、ごめんごめん。別に君の能力を攻めているとか侮っている訳じゃないんだ。逆だよ、逆」

「逆？」

「そう、逆。君と最初に出会った日、僕は君が有能だと思った。会話をしただけで分かったさ。この子は色々考えて生きているんだなって。しっかりしているんだなって。だから、君なら訳の分からないミチル君の言葉を悟れるんじゃないか、ミチル君の突飛な行動も我慢して上げられるだけの忍耐力もあるんじゃないかって、そう思ったんだ。君のそういういつも冷静であろうとする姿勢は買っているんだよ？」

見つともなく岡崎に喚き、拳泣いてしまつて、その何処が冷静なのか。

「だから、言つたろう？　冷静であろうとする姿勢は、って」

読まれていた。見つともないといつたらない。最低だ。惨めな気持ちで、ぐず、と私が鼻を鳴らすと岡崎が透かさずティッシュをくれたので、遠慮なく鼻をかませてもらう。

「ミチル君のお茶碗の話覚えてるかい？」

「……お、覚えて、いるわ」

何だか泣きじゃくつたせいか、声が震えてしまった。

「あの話には続きがあるんだよ。自閉症にはこだわり行動や儀式的行動というのがあった。それは主に、子供が積み木を規則正しくならべたり、ガラクタなんかを喜んで拾って収集するのと一緒にあんだけど、自閉症の人にはどうもそれが顕著だね。例えば、これはあ

る自閉症の本からの例なんだけど」

そう前置きしてから岡崎は、ある自閉症の人の例をだした。

エマは子供のころから、ノートや光沢のある紙を集めるのが好きでした。10代の頃、彼女は社交ダンスに熱をあげ、ダンスに関するものならどんなチラシでも集めました。そして、チラシが破損することを恐れて、それぞれ数枚ずつ集め、結局これらの紙を捨てることができなくなりました。さらに彼女は印刷会社で働いていたので、毎週たくさんいらなくなった紙を家に持ち帰りました。家の中もガレージも紙の箱でいっぱいになってしまいました。だが彼女は家族に迷惑を掛けていると知りつつも捨てられませんでした。

『自閉症 成人期に

向けて』より抜粋

「……それって」

「迷惑この上ないだろう？」

素直に私は頷く。家族はたまったものではないだろうと思う。

「これが、こだわり行動。ミチル君も少なからずそういうところはあるよ。病気だからね」

でも、と岡崎が言う。

「家族、つまり血が繋がる身内だからこそ、この行動も我慢して彼らの行動を正してやることができるんだ。でもね、家族の人でも忍耐が切れることがあってね。またそういう人が多いのも事実なんだ。この迷惑なこだわり行動を止めさせることは一応はできるんだ。このエマの場合は家族が根気よく『アレしちゃ駄目』『コレしちゃ駄目』と言い続けた結果、症状は改善された」

「良かったじゃない」

「うん。でも、ミチル君の場合、お茶碗の一件で昨日、君にやったようなことを家族の前でやってちゃってね。それも丁度、弟の歩君の大事な試験がある日に。そりゃー、家族の人の忍耐も限界だろうね。忍耐が切れちゃったんだろうね。だから、僕としてはミチル君の友



達になつてくれる人は冷静な人が良かった」

「ごめんなさいねと私が皮肉を込めて告げると岡崎は、別に君を攻めている訳じゃないさ、と言う。だから僕のミスなんだよ、と岡崎は続けた。

「君、最初に言っていたしね。家庭の環境もよくないし、学校の環境もよくないと。そのときに気がつけば良かったんだよ、僕が。教師失格だよ」

そんな風に一方的に謝られると自分が子供っぽいことをしているような気分になった。

「ごめんなさい。ミチルにもそう謝っておいて」

「だから、君が謝ることじゃないよ。大体、元々君はこの学校とは何の関係もない部外者なんだから気にする必要もない。僕が君をひっぱりこんだだけさ。それと、ミチル君には直接謝ってくれるかい？」

でも、と私が反論しようとする、と、岡崎が待ったと手を上げてそれを止めた。

「もし、君に余裕ができたなら、そのときミチル君の友達になつてあげてほしい。彼、人見知りタイプだから中々友達できなんだ。まあ、一人いたんだけど、今はもういなくなっちゃったしね。そういうの、あまりミチル君にとつても良くないし。だから、ゲストカードはそのときがくるまで君が預かっていてほしい」

わかったわ、と私は了承した。そして、私は一つ気になる質問をする。

「それより、その一人いたミチルの友達つて、ひーちゃんのことなの？」

「そうだけど、……君。もしかして妬いてるのかい？」  
分らない、と私は告げた。すると、岡崎がぽつりと、全然似合わないね、と言った。

このときばかりは純粹に、酷いと思った。  
私だつて恋くらいはする。

こんなことがあつて、とりあはず現段階ではミチルのことは保留となつたのだつた。

今思い出してみても、『高見養護学校』での私は見つともない醜態が多すぎて恥ずかしさのあまり顔が赤くなつてくる。最近はこのばかりだ。感情が上手く制御できていない。どうして剥き出しの感情を人様にぶつけ、感情の赴くまま行動してしまうケースが多くなつたのかは、恐らくは全部ミチルのせいだと思う。何故、ミチルのせいでこうなつてしまつたのかは理解できなかったのだが、少なくとも感情を揺さぶられるのは確かだと思う。

そこで物思いに耽るのを止め、洗面台で顔を洗い、歯を磨いてから、既に朝食が容易されているテーブルにつく。今日のメニューはトーストに玉ねぎのスープ、ベーコン、目玉焼き、サラダにヨーグルトといった典型的な洋食だつた。怪物に朝の挨拶をしてから出された食べ物を口にする。まずはスープを一口飲んだ。

あれ……？

違和感を覚える。もう一度、ずずつと、スープを啜る。

美味しい……。それに、あの砂の味もしない。

何故と思ひながらも食事はいつになく美味しく食べられた。以前は怪物の作る料理は全て乾いた砂の味がして不味いと思つていたのに、今日の朝食は違う。私は全て残さず食べた。大まかな食べ物は食べつくし、最後に残つたデザートであるヨーグルトを口に運ぶ。

何か美味しかった。お腹が減つていたせいかな？

みるみるヨーグルトは胃の中に納まつた。満腹感に身を委ねていると、怪物が紅茶を出した。その紅茶を啜ると気分は凄くリラックスしてきた。久しぶりではないだろうか。家でこんなにも寛いだのは。確かユミがこの家を出る前のことまで遡る気がする。だらーとして椅子に座っていると怪物が自分の分の紅茶を持ってきて私の正面へと座つた。二人して紅茶を啜る。怪物がテレビのリモコンを操作し、テレビの電源を入れチャンネルを回した。どうせNHKだつ

まらないわねと思っていたら、今日はこういう風の吹き回しか、四チャンネルで操作は止まった。思わずまじまじと怪物を凝視。すると怪物が何処か居心地が悪そうに。

「……時々ならこういうのも悪くないじゃないの」

「え、ええ」

時々とは言わずにいつもこうしてほしいと私は切実に思ったが、口に出す勇氣はない。それよりいつもと違う怪物の様子が気になる。

「エミ」

「何？」

「この間のことなんだけど」

この間？

頭を捻る。何のことだろうと思った。

「電話したでしょう。私に。何の用だったの」

「……あ」

気がついた。私がこの間、自殺しようと血迷って怪物に携帯で電話をかけたときの話だ。

今更、怪物は電話の内容は何だったのかと訊いているらしい。

「別に何でもないわ」

自殺しようとしていたの、なんて言ったらどうなるものか分かったものではない。

ここは口を噤んでおくのが最も得策だろう。

「何でもないことはないでしょう。あなた、動揺していたじゃないの。様子が普通じゃなかったから心配してたのよ。でも、あの時は手が離せなかったから気にしてはいたのだけど……」

「べ、別に」

私は怪物からぶい、と視線を外した。

心配していたって……。

本当に怪物に心配されているようで居心地が悪くなってきたのだ。怪物の言動に動揺している自分がいるのに気がつく。一体今日はどうしたというのだろうかと思う。果たして怪物がおかしいのか、それ

とも。

「そう。何でもないなら、いいのよ」

怪物の言葉に我に帰った。

「う、うん。何でもないのよ。ちょっと慌てちゃっただけ」

そう、と言って怪物は台所の方へと戻っていった。テレビのチャネルはそのままだ。このまま見ていいという意味なのか。それともこの前の電話の侘びのつもりなのか、単なる怪物の気紛れか。全然怪物の考えていることが読めない。暫く、どうしていいか分からずただテレビの前で硬直する。NHKではないのに全く楽しめなかった。サボリ教室で多少はテレビを見てはいたが、この時間帯に見るのは皆無に等しい。もしかしてテレビは時間帯によっては面白いものではないのかもしれないと思った。まさかNHKが一番面白い番組なのか。いや、そんなことないはず。綾香がNHKなんてクソの役にも立たないと言っていたし、いいえ。綾香の言うことはあまり当てにできないのは実証済み。

先日も、この漫画が面白いと言っておきながらたった一時間後にはこんな漫画クソつまんねえと言っていた。綾香を基準にはしないほうがいいだろう。でも、大体何なのよこれ。さつきから料理しているだけだし。ただの料理番組なんじゃないの。そういう時間帯なのかしら。

「エミツ」

「！」

声をかけられ、一瞬ビクンと体が跳ねた。やばいと思った。やはりテレビを見続けていたのがまずかったらしい。私は怪物の怒鳴り声を身構える。やばい。やば過ぎる。

「テレビの音量、下げなさい。煩いわよ」

一瞬、私は何を言われたのか理解できなかった。

「……。え、あ、……。ああっ！ 分かったわ。ごめんなさい」

それだけ言って怪物は台所の方に引込む。しかし、少しも経たないうちにまたリビングに戻ってきて、私がまだ飲んでいた紅茶の

カップを奪った。そして、言う。

「エミ。今日は天気がいいからショッピングモールに行って買い物でもしましょう。好きな服、買ってあげるわ。お昼は外食だから今のうちに仕度しておきなさい」

「……う、うん」

果たしておかしいのは怪物なのか、それとも私の方が？

## 【第19話】

それから怪物と私は仕度をして、ショッピングモールへとバスに乗って向かった。バスの席は一つも空きがなく、日曜日だというのに人々で締めき合っていた。ぎゅうぎゅうのバスの車内。

怪物と私との距離は凄く近かった。こんなに怪物との距離が縮まるのは久しぶりなのではないかと思った。しかし、物理的な距離は近づこうとも内面的な蟠りまで解消し、ぐいぐいとその距離が縮まる。とはもちろんいかなかった。バスの車内では終始無言で気まずい雰囲気がちこめる。

何の意図があつて、怪物は私を娯楽施設へと誘うのかが分からない。単に受験の息抜きを目的にしているのか、この間の電話の詫びか、それともただ私が難しく考えすぎているだけで怪物の気紛れか。そのどれを取ってもしっくりこないのだった。

私と怪物はショッピングモールに着くと、まず近くの洋服店をぶらついた後、一軒の古風なレストランに入って食事を取った。レストランの外張りにはオレンジ色のレンガのイミテーションで飾られた所謂古風に見えるだけの安レストランだ。でも、綺麗な外見だなと私は思った。窓のステンドグラスがこのレストランの安っぽさを何とかカバーしていて、微妙な調和を齎している。きっと怪物も窓と雰囲気が気に入ってここを選んだのだろう。確かに安っぽい外観はしているもののけして軽くはないのだ。窓際の席に案内され、座り私はさっそくメニューに目を通す。

ここが重要だ。怪物の機嫌を損ねるようなジャンクフードは控えねばならない。

「エミ」

「何？ 今、忙しいのよ。メニュー読んでの」

「好きなもの、頼んでいいのよ？」

「……………」  
っ。

様子がおかしすぎた。今日はもしかしたら空から怪物が降ってくるのかもしれない。そうでなくば、明日怪物は死ぬ。きっと怪物は余命幾許かと医者に宣告されていて、最後にいいことしてから死のうとか、きつときつとそんなことを考えているに違いないのだ。

「……か、母さん？ 変なこと考えてない？」

思わず私は訊いた。

「何よ、変なことって」

「何か、悩みとかあるなら、聞くから何でも言ってほしいの」

「別に悩みなんでないわよ。強いて言うならあなたの受験の心配くらいよ」

エミ、あなたこそおかしいわよ、と怪物が言う。何だ、違うのかと私は少し落胆すると同時に、ほっと安心した。それにしても今日の怪物は何かがおかしいし、何かが欠落しているような印象を抱かざるを得ない。だが、その正体は一向に知れず、首を捻るばかりだ。結局、そのことばかりが気になって食事は喉を通らなかった。好きなものを食べると言われても、いつもと同じものを頼み、そしてそれを食しレストランを出た。次に怪物と私は洋服専門店へと入っていった。ここでも怪物は普段なら口が裂けても言わないような薄気味悪いことを口にして私を驚かせた。

「あなたも女の子なんだから、偶にはお洒落しなさいな」

そんな気味悪いことを言う怪物は初めてだった。いや、ユミが行って以来だった。

妙に思っ、私は怪物を試してみることにした。本当に好きなものを買ってもよいものかどうか、実験してみるのだ。私はこの店で最も毒々しく派手で、薄気味悪い紫色のシャツを手に取ると怪物に差し出した。怪物がそれを見て、そして私に視線を向けてくる。

「本当に、“これ”がいいの？」

「ええ、“これ”がいいの」

すると、何とあつさりと怪物はレジへと向かったのだった。

「……嘘、でしょう？」

ああ、何で好きな洋服を買わなかったよ私。あれが買えたなら、他のも買えたのに。

後悔の念が沸き起こった。怪物はレジから戻ってくると、毒々しい柄のシャツを私に渡した。全然、嬉しくない。それに怪物の様子もやっぱりおかしいのが気になる。

「母さん、本当に今日はどうしちゃったのよ。変よ？」

怪物は小首を傾げ　これは怪物が物事を考えるときによくやる癖だ　、不思議そうに、別に変ではないと思つわ、あなた最近参っているようだったから、と告げた。

「わ、私、参っているように見えた？」

「見えたわ」

「………そう」

そうなの。見えたの。落ち込んでいる感情を表には示さずに、上手く隠し続けてきたつもりであつたのだが、どうやら怪物にはお見通しであつたらしい。何だか悔しい。

「特に、金曜日頃から酷くなったわね」

「　金曜日から？」

その前から、綾香との確執、聡子の裏切りなど学校側でも問題で私は参っていたはずなのだが、金曜日といえば公園の女子トイレでミチルと仲違いした日だった。

「………そうなの」

ああ、煩い。………黙れ。お願いだから泣き止んでよ。煩いのよ！

頭が割れるように痛んだので、私は頭を抱え込んだ。すると、怪物が怪訝な顔をする。

「エミ、どうかしたの？」

「………何でも、ない………わ」

ああ………、赤子の鳴き声が私の頭を蹂躪する。



.....うギャ ああああああああああああああ  
あああああああ！

煩  
い  
つ  
。

## 【第20話】

怪物と私は洋服の入った大量の紙袋を両手に引つ提げ、徒歩で自宅への道のりを歩いた。

タクシーを使って帰ればいいと私は提案したのだが、怪物が頑として譲らず、この大量の荷物を抱えて女二人で帰ることになった。ふざけてる。紙袋はまだしも、ビニールの袋などは手に食い込んで痛い。これを家まで続けるかと思うと正直うんざりした。

「ねえ、母さん。歩いて帰るのに何か意味があるの？」

「ないわ。ただ歩きたかっただけよ」

「……………」

独りで歩け。

そう言いたいのを何とか堪えて、私は怪物の後に続いた。全く、こんなおばさん臭い見つともない姿を学校の仲間にも見られたら、とそこまで考えて、もうその仲間は存在しないのに思い至り、悲しい気分になった。そして、ふと気がつけば、私達は身に覚えのある風景へと足を踏み入れていたらしい。いや、私だけが思い至り、記憶している『高見高等養護学校』への道のり。

私はその瞬間、血の気が引いていくのを自分でも感じ取れた。

「ね、ねえ、母さん？」

声の上擦ってしまふ。

「何？」

「こっちの道、止めましょうよ。人気はないし、危ないわよ。変質者とか出るって」

「平気よ。お母さんがついてるから。こちらの道の方が近いのよ」  
これ以上、反対するのは不自然だった。私が何か隠しているのを怪物に看破されてしまう危険があった。そうなれば結果は火を見るより明らかだ。今、私は限りなく『高見養護学校』には行きたくな

い。いや、行きたくないだけでなく、近づきたくもないというのが本音だった。

もし、ミチルに会ったらどんな顔をして会えばいいのか、何を話せばいいのか分らない。

しかし、そう思うとは裏腹に、どうしようもなくミチルの顔が見たいとも思った。

一体、ミチルの何処にこれほどまで惹かれたかと言えば、多分、言葉には言い表せないだろう。それでも無理に言葉にするなら、ミチルの発する独特の雰囲気落ち着くというのと、ミチルは私を私として見ないからだろうと思う。私を見ないからだ。多分。

すると、のろのろと進むうちに見慣れた、『高見高等養護学校』の黒い校門が姿を見せる。

ミチルに会いたくはないが、ちょっと遠くから見るといいなら、見たいと思う。元気にしているか気になるというものだ。それにミチルに会わないと、薄気味悪い子供の泣き声が私の頭をぐりぐり掻き乱して、何をしていても落ち着かない。ちょっと見るくらいならいいだろう、そんな軽い気持ちで校門の内側を歩きながら、覗くと

「うギャあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああっ！」

「え？」

幻聴……かと、思われた、その叫び声は確かにミチルの声だった。一体何事か。不審に思った私も怪物も、校門の前で一旦立ち止まる。私は僅かに校門の内部に侵入し、ミチルの姿を探した。

「エミ、知らない学校の中に入っちゃ駄目よ。不法侵入よ」

すっぱり無視した。生憎、私は岡崎からゲストカードを貰っている、これを守衛に見せれば何の問題もなく校内に通してくれる。私はゲストカードを取り出して守衛に見せ、そのまま校内へふらふらと入っていった。

「エミ！ 何やってるの！」

怪物の声が背後からした気がしたが、知ったことじゃない。ミチルの一大事なのだ。私は大量の紙袋を引つ提げてわざわざ言わせながらミチルを探した。ミチルの悲痛な声は駐車場の方から聞こえてくる。即座に駐車場に向かう。止まっている車を一台、一台、内部を丁寧に確認しつつミチルの声を追って奥へ、奥へと静かに進んでいく。嫌な感じがした。

そして私はやっとミチルの姿を視界に捉えることができたと同時に目を見張った。

「何？ ミチル？」

大音量で泣きじゃくるミチルはいい。いつも通りのミチルの行動だ。しかし、ミチルの手を引く人間に問題があった。女だ。髪は染めているようで茶髪の短髪。きつちりとしたスーツに身を包んでおり清潔な印象が前面に押し出された服装。何処かミチルの服装に似ていた。その女は嫌がるミチルを無理矢理に車に乗せようとしていた。女は怪物と同年代であろう風貌をしていて、岡崎も傍にいたので誘拐ではないのが容易に理解できる。多分、その女はミチルを捨てたミチルの母親だと察せられた。女と岡崎の会話が聞こえてくる。

「満！ 言うことを聞きなさい。車に乗るのよっ」

女はヒステリックに喚いた。

それに反論する岡崎。

「お母さん、ミチル君はここでも十分に、教育できますから。安心して我々に」

「満つ。乗りなさい！」

「ですから、お母さん。ちょっと落ち着いてくださいよ。ひーちゃん自殺したのは、本当に稀なことなんですから。しよっちゅうあるもんじゃ……」

「だからって自殺した子がいるような学校に置いておけないわ。他の学校なりに移します」

「ですから、寮があつて教育も兼ねるような学校はあまりないんで

すつてえ。ここが一番、ミチル君にとつても割りといい環境なんですよ」

「それなら、預かって貰えるところを探します！」  
にべもない。

追い縋る岡崎を振り切り、女はミチルを強引に黄色の乗用車へと押し込み始める。

私は、今の会話だけで大体の事情を察した。

ミチルが、『高見養護学校』から、退学する？

退学、という表現には違和感がある。ミチルにとつて『高見養護学校』は家でもあるのだから、退学というよりは引越すといった感覚に近いと思った。それでもミチルが私と遠く離れた場所に行ってしまうという事実だけは、私の心に大きな変化を齎した。

もしかしたら、二度と会えないかもしれないと、そう思うだけで死ぬよりも、どんな絶望よりも重くそれは押し掛かる。学校で真のリーダーを奪われたこと、ユミが出て行ってしまったこと、聡子に裏切られたこと、綾香と疎遠になったこと、今まであった苦痛の全ては些細な事情に過ぎなく思えた。

ミチルが、ここから、いなくなる？

その現実が耐えられない。

気がついたら、私は口を開いていた。

「ねえ、ミチル、ここからいなくなるの？」

突如、車の陰から現れた私の存在に、岡崎も女もミチルも驚いたようだった。女はこいつ誰、といった顔をした。岡崎は不味い所に遭遇しちゃったな、といった顔をして、ミチルは私の顔を見るなり私の胸にタックルを食らわして泣き喚いた。僅か数秒間でそれらは成された。ミチルが私にしがみついて泣いている。それを優しく受け止め、髪を撫でてやった。

もう、心配いらなからね、ミチル。

私は決意を固めた。頭にきた。何だ、この女は。勝手すぎるじゃないか。どうしようもなく怒りが湧き出てきて固く拳を握り締めた。

私は姿勢を正して女に向き直る。

「ちよつとアンタ、何様のつもり？」

女の眉が寄った。

「何処のお子さんか知らないけど、目上の人に対する口の聞き方も知らないようじゃ、先が思いやられますね。関係ない子供は黙ってなさい」

いきなり喧嘩腰の返答だ。上等じゃないか。それに丁度後ろに怪物も姿を現した。どうやら私の後を追ってきたらしい。ご苦勞なことで。

「目上の人？ 何言ってるのアンタ。じゃあ、アンタ目上だからって乞食にも敬意を払うの。変わった女ね。私は乞食になんか敬意を払う、同情心なんて持ち合わせていないもの」

「あたしを乞食と比べる気！ 何処の子供よ、岡崎さん！」

女は激昂して、今度は岡崎に怒りをぶつけた。その怒りの矛先を向けられた岡崎はというと、いやあ参ったなあなどと口では言っているものの、口の端が上にひくひく痙攣していた。岡崎は内心では笑っているのだろう。そのこともあり、私はもう止まらない。

前に進むのみだ。

「ミチルは嫌だと言っててるんでしょ。いい加減になさいよ。大人の勝手な都合で振り回される子供は、本当にうんざりしてんのよ。一旦は捨てておいて、今度は何？ 自殺した子がいるから移転したい？ 馬鹿も休み休み言いなさいよね、莫迦ババア！」

「んなつ！」

女は目をまん丸にして私を宇宙人でも見るかのように、凝視した。そして、もう一人。

そんな目で見てるのは、怪物 改め、私の母、中曽根留美子だった。

「エ、エエエエエミいつ。人様に向かって何てことをっ」

オオオオと狼狽している留美子。今まで凶暴化した私を一度も見えていなかった反動なのだろう、我が子が信じられないといった様子

で留美子は怯えていた。

更に私は暴挙に出た。

「フン、母さんもね、いい加減止めてほしいのよね。ちくちくちく干渉しては、制約を作ってるけど、私が家以外でそれを守っているとても思っているの。ネットだって外でやってるし、テレビだって学校で見放題。服だってね、私の部屋の箆笥の裏に色々隠してあるのよ。それにね、お小遣いが足りないから、時々母さんの財布から抜いてるしね！」

留美子は、ふらあ、とその場で倒れこんだ。やっとやってやった。ざまみろ、怪物めッ。

ははははは。お前等大人なんか皆死ねばいいんだ。金だけよこせ、クソババアどもめッ。

「ちよつと、そのクソババアッ！」

そう言って私はミチルの母親を指差す。

「ク、クソババア？」

女はポカンとした表情で私の顔を見てきた。

「そーよ、アンタよクソババア。今回、ミチルを移動させる理由を言ってみなさい。私がその理由が全うなものか判断してあげる。さ、言いなさいよ」

くくくく、という岡崎の忍び笑いが聞こえてくる。すると、女は岡崎を睨みつけた。

「岡崎さん！ この子は何なんですか。この学校の生徒なんですか？」

この女に話を逸らさせる気はなかった。

「ほら、大人はそうやって、自分が不利になると直ぐ話を逸らす。言いなさいよ、理由を」

女の目尻が吊りあがった。

「子供が大人の話に口出しするんじゃないわよ！」

「あら、大人大人って先ほどから煩いんだけど、アンタの行動のほうによっぽど子供じみているのに気がついてるかしら。気がつい

ていないのなら、精神科にでも行った方がいいわね。将来の為に  
るわよ?」

沈黙。

完全に女の頭に血が上ったようだった。女は岡崎に向き直る。大  
抵、大人は怒り狂うと子供の弱みを握り、それで子供を抑圧するの  
だ。例えば、お小遣いの差し止めや外出禁止など、実力行使で子供  
を制御しようとする。この女もその気になったのだろう。

「岡崎さん、この子、ちょっと問題じゃありませんか? 大人にこ  
んな暴言を吐いて。ちゃんと黙っているのでしょうか。それとも教  
育が行き届いていないんじゃないですか、この学校は。そんな所に  
満を入れておけません」

暗に岡崎に私の教育をしつかりさせろとも言いたいのだろう。  
しかし、生憎私はこの生徒ではないので、何を言っても岡崎に罰  
せられる心配はない。

「本当に愚かね。私は健常者よ。この学校の生徒じゃないわよ、ク  
ソババア」

「なら、何処の生徒なの?」

「さあね」

学校名などバラして堪るか。私の通う高校は超有名エリート進学  
校なのだ。それなのに、この女から学校へと苦情の電話でもされた  
ら、私の経歴に傷がつく。絶対に言うものか。

肩を竦めて教えないわ、と言うと女は真っ赤になって、「とにか  
く、満は退学させます!」と断言してから私の方へと向かってきた。  
どうやら次の実力行使に打って出る気らしい。

そうはさせまいと私はミチルの手を取り、ゲストカードを取り出  
した。

「ミチル、おいでっ」

未だ泣きじゃくるミチルを無理矢理に立たせて、私は校舎内への  
入り口に向かつて走り出した。中年の女と現在思春期である私とで  
は、運動神経そのものが違う。女は私とミチルの速度には当然つい



てこられなかった。

「何処に行く気！ ミチルを置いていきなさい！」

女がヒステリックに叫んだ。女の要求を完全に無視してゲストカードを扉へと差し込むと、ピピっという電子音の後校内への扉が開いた。背後を振り返ると女がこちらに入ってきていたのと、岡崎が笑っているのと、留美子がアスファルトに座り込んでいるのが見えた。ちらりと岡崎を見て、

「岡崎、後は頼んだわよ！」

と、そんなことを言ってから、私とミチルのプチ駆け落ちは始まったのだった。

### 後日談。

これは岡崎から後で聞いた話。

私とミチルがプチ駆け落ちを『高見養護学校』で実行した後、その場には岡崎とミチルの母親、そして留美子が残されていた。両保護者は呆然としていたらしい。両保護者で一足先に我に帰ったのは、私によって息子を誘拐された方の保護者であった。ミチルの母親、祥子は私とミチルの消えた扉をこじ開けようとしたものの、カードキーなど持っていなかった為、中には入れなかったという。そこで、今度は岡崎に御鉢が回ってきたのだそうだ。

「あ、あの女の子は、何なんですか、岡崎さん。は、早くこのドアを開けてください」

岡崎はこのとき、あーエミ君も面倒臭いこと押し付けてくれている何が『岡崎、後は頼んだわよ』だよ全部面倒は僕に押しつけて、と思ったらしい。

岡崎はこんな感じで話を切り出したらしい。

「ええと、ですね。先ほどの女の子の正体は

、  
」



## 【第21話】

突破！

ピピっという電子音の後、プシュ、と扉のロックが外れ、その扉は開け放たれた。

私は扉を開けて、中に入り、扉を閉める。

扉の中には、また白い廊下が広がっていた。再び、私は足を進める。

これで何度目の扉かは忘れたが、相当な数の扉をこのゲストカードによって突破してきたことになる。岡崎は、今私の手元にある黄色いゲストカードには大した効力はなく、一般の生徒の入れるような場所だけ入れると、そんなことを言っていたが、実際使ってみると岡崎の話には全くの大嘘だった。

何なの、このゲストカードは？ 関係者立ち入り禁止区域ま

で入れるじゃないの。

そうなのである。

何故かは知らないが、関係者立ち入り区域やその他のいかにも生徒が入っちゃいけません的な鉄扉さえも、カードはいとも簡単に入り口を用意してくれたのだ。おかしいと思った。私のような部外者にそんなカードは渡さないのが普通なのではないだろうかと考え、岡崎にしてやられたようにも思える。何か岡崎になりに考えがあったのだろう。

それにしてもゲストカードは便利であった。

これなら、『高見養護学校』での真のリーダーになれそう。

私の高校での、真のリーダーが学校内で握る秘密に匹敵するくらいには、便利な品だ。

内心、ほくそ笑む。

「ミチル、大丈夫？」

ミチルに声をかける。ミチルは未だに、私の腰に抱きついたまま泣きながらくっついていてる状態だ。この体勢はミチルも苦しいが、私もそれなりに苦しい。二十秒後

「……つかれた」

ぼつりとミチルが言った。足を止め、振り返る。ミチルはぐったりとしていた。体力的に疲労したというよりも泣き疲れたのだろうと判断する。

「そうね、そろそろこうして移動するよりも、何処かに隠れた方が見つからないかもしれないわね。ミチル、何処か隠れるような場所、知らない？」

ミチルの学校なのだ。私よりもミチルの方が詳しいだろう。案の定、ミチルは頷くと、こつち、と言ったのでその後をついていく。ミチルの案内した先は、確かに人が隠れるには十分な広さがあり、人気のない場所にあった。電灯がなく、薄暗い廊下の先に、生徒立ち入り禁止の札が目飛び込んできて、その直ぐ下に南京錠がかけられている一つの扉が、そこにはひっそりとあった。

「ミチル、ここは駄目よ。鍵がかかっているから入れないわ」

南京錠だ。このゲストカードでも入れないだろう。

「平気。鍵、こわれてる。ひーちゃんがこわしたの、ボク、知っている」

そう言うのと、ミチルは南京錠をそつと外して、扉を開けた。「エミに教えてあげる。先生にもひみつの場所。可愛い場所。絵の部屋、ボク書いた、凄いの」ミチルは、人差し指を口の前にもってきて、しい、と静かにのポーズをしてから「……ひみつの場所」と言った。ひーちゃんがこわしたの、という部分は気に入らないが、本当に学校関係者も知らない場所だとしたら絶好の隠れ家だ。私は恐る恐る、ミチルの後に従った。

「……うわ。確かに、これは可愛い場所だわ」

入ると、まず目に飛び込んできたのは、ぬいぐるみの山。所狭し

と、布の人形が転がっており、その合間にミチルが書いたのである。う絵が乱雑に広げられていた。その全てが埃を被っていて、何年も掃除をしていない風なのが窺えた。そのまま足を進めると、巨大な穴がぽっかりと口を開いているのを発見したので、ミチルをその穴には近づかせないよう遠ざけて、更に奥に進んだ。穴はどうやら、今いる三階から一階まで直通になっているらしく、落ちたらただで済みそうにない。この危険な穴や埃のことなどを考えると学校のスタッフが管理していない場所だと理解できた。学校のスタッフが管理しているならこうはならないからだ。必ず、掃除のおばさんなりが掃除をしているので、埃塗れにはならない。

「へえ、『高見養護学校』にもこんな場所があるのね」

どうやら、秘密基地は私の学校だけの特権ではないらしい。

くすりと自嘲気味に笑うと、ミチルが首を傾げた。

「ここでの真のリーダーは、ミチルなの？」

意味が分らなかったのか、ミチルは更に首を傾げた。元より返事は期待していない。ただ問いかけたただけだ。ミチルも考えるのに飽いたのか、疲れたのかは知らないが、その場にぺたんこ座り込んでしまった。すると、埃がもうもうと立ち上る。掃除をしていないと、こうまで酷いのかと思った。今度から掃除のおばさんには感謝をしようと思う。

埃まみれになったミチルを見かねて、先ほど買った荷物の中からあの毒々しい柄のシャツを取り出し、雑巾代わりにミチルを拭いてやった。どうせ、こんな薄気味悪いシャツ、死んでも着ないのだ。ミチルの雑巾にでもなるのが有効に活用できると判断したのだ。

「エミ、これ、服だよ？ ハンカチ、じゃない」

「いいのよ。いらぬ服だから」

「そーなの？」

「そーなの」

強引に「ごしごし」とミチルの顔を拭いてやる。ミチルはされるがまだ。

「ねえ、ミチルはこの学校にいたい、それともいたくないの？」

ミチルの眉間に皺が寄る。しまったと思った。ミチルは二つ以上の質問に答えられないのだ。質問を変えた。

「ミチルは、この学校好き？」

「うん、好き」

「ここにいたい？」

「うん、いたい。ママ、ひどい。きらい」

ほっとした。先ほどのミチルの母親にアレだけの口を利いておいで、大してミチルはここから移動するのに反対していないなんて発覚しようものなら、私の面子は丸つぶれだ。

そこで、ふと気になって、私は、

「何故？」

と訊ねた。

三十秒後にミチルは答えた。

「公園が近い」

がくつ、とした。

この学校にいたい理由が、公園が近いからだと？

この男は本当に全く、もう！

「ミチル、それだけ？ まさか違うわよね」

つい口調も棘が出る。

「ひーちゃんがいたから」

「それだけ？」

「岡が好き」

岡は多分、岡崎だろうと判断した。

「本当に、それだけなの？ もしかして」

「うん。だから、ここ好き」

「……………」

何だか、疲労感が増したのは気のせいだろうか。そうだった。ミチルは普通の男の子ではないのだ。こちらが幾ら好意を寄せようが、何をしようがミチルには関係ないのかもしれないと思った。そもそ

も自閉症の人って、恋をするのだろうか。と、そこまで考えて愕然とする。そうだ。何故、その可能性に思い至らなかったのだろう。

障害のせいで異性に興味などないのかもしれない。そうだったら本当に、……………どうしよう。

大変だ、と私は思った。

「ミチル、好きって分かる？」

ミチルは『？』という顔をした。やはり分らないのか。

「何いつてるの、エミ、おばかさん？ 好きは好きだよ。ママは好き。歩は嫌い。ひーちゃんは好き。岡も好き。進は好き。パパは嫌い。犬は好き。猫は嫌い。お絵かき好き。バナナは好き。ピーマン嫌い。それと、トマトは嫌い。チョコ好き。ケーキ好き。お菓子は好き。辛いのが嫌い。お餅は好き。アイス好き。ソフトクリーム好き。おいも好き。みかん好き。くり好き」

「ミチル、要はお腹が空いてるのね？」

こくり、とミチルが頷いた。

腕時計を見ると、針は既に六時を指していた。この部屋もだんだんと薄暗くなっている。

どの道、十七の女子高生である私と自閉症という病気を抱えたミチルとで、ずっと親から逃げる訳にもいかないのだ。そろそろ潮時なのかもしれない。最初から、ミチルの母親から二人で逃避するのが狙いではなかったのだし、そろそろ外に出るしかない。

何だか、嫌だな。

もし、岡崎がミチルの母親を説得できていなければ、私はミチルともう二度と会えない。

「ねえ、ミチル。私は好き？」

「エミ？」

ミチルの眉間にぐつと皺が寄った。

こくり、と唾を呑み込む。答えを待つ。普段から時間のかかる回答が更に長い気がする。

と、その瞬間、ゴウン！ という音とともに、扉が開け放たれた。

「満う！」

「っひ、」

悪鬼のような形相で現れたのは、ミチルの母親だった。  
何て、タイミングが悪いのだ。このクソババアは。

突如、鬼のような恐ろしい表情で現れたのは、ミチルの母親だった。あまりの恐ろしい顔に、当初私の予定では『見つかったら大人しく出て行こう』という計画から、大きく外れて慌てて扉を閉めに走ってしまった。『見つかったら殺される』と思ったのだ。しかし、当然それを女は阻む。私が扉を押す。女が決じ開けようとする。ミチルは傍観している。

渾身の力を込めると僅かに私のパワーが勝つたらしい。何とか、女は部屋から押し出すのに成功した。だが、女もしぶとい。扉は完全には閉まりきらずに、女の顔を挟んだ状態で均衡状態を保つ。女が扉の隙間から、顔を捻りこんできた。

女の格好は、以前ユミと見た映画 監督スタンリー・キューブリックの『シャイニング』のワンシーンを彷彿とさせる。正直、色んな意味で恐い。

「みーちーるうー……」

恨めしそうな声。それに対するは、黄色い悲鳴。

「よーかいー！ おばけー、おばけーっ」

「満！ 親に向かって妖怪はないでしょう。“中曽根エミ”、ここを開けなさい！」

「おばけー、こわいー」

「みーちーるうー……、いい加減になさいッ。お化けじゃないって言うてるでしょう！」

「……………」

何だか似たもの親子の会話を聞きながら、私は無言で扉を支え続けた。



女 改め、妖怪は何とか部屋の内部に侵入しようと、強引に体を割り込ませてきた。

私は岡崎の姿を探した。あの時、きっと時間があれば岡崎が妖怪を説得できると思い、一時的にミチルを連れてその場を離れたのだ。妖怪はヒステリックになっており、興奮していたから岡崎の説得は通じなかったのであって、相手が冷静になれば私の知るあの岡崎は必ず説得できると、信じていたからプチ駆け落ちという後先見ない行動に出たというのに、何故か岡崎の姿が見られない。

どうしたのよ岡崎。まさか失敗したんじゃないでしょうね。不安になってくる。

と、ゴドン！ という打撃音がして、扉が激しく振動した。

「わぁ！」

衝撃に耐え切れず、私はひっくりかえって、地面に転がった。

「痛い、わね」

即座に立ち上がった、ミチルの傍に駆け寄る。すると、直ぐにミチルが私の後ろにこそっと隠れて、「おばけー、ようかい、ばけものー」と泣きじゃくり始め、妖怪の眉間に皺が寄った。妖怪はゆったりと余裕ありげに歩み寄ってきた。一步、歩く度に妖怪のヒールが、こつん、こつん、と音を成して、近づいてくるのが嫌でも分る。そして、こつん、と一回音がしてから、私の前で止まった。

「こんなことして、何になるの。あなた、良い所のお嬢さんだそうじゃないの」

っち、と舌打ちする。私の情報が漏れていることから予想するに、やはり岡崎は妖怪に説得を試みたらしいが、この様子では失敗したと判断した方がいいだろう。

「だから、何？」

強気に言い返すと、妖怪は落胆した様子だ。

「うちの息子を思ってくれるのは嬉しいんですけどね、うちにも事情があるの。分って」

「分らない！ 何故、ミチルはここ、『高見養護学校』にいたら

けないの？」

一瞬、妖怪が黙り、部屋が沈黙で満たされミチルの噤り泣きだけが耳に届く。やがて。

「せっかく下の子が進学できたのに、ただでさえ満のせいで悪かった世間体が、今度は自殺した子と同じ学校だとバレるのが嫌なの。近所に白く見られるの、分らない？」

分かる。

恐らく、ミチルの病気のせいで近所には白い眼で見られていたのだろう。それを今度は病気の学校で自殺した子がいて、ミチルも同じ学校だと知られたらもう近所では精神異常者扱いでもされてしまうかもしれない。世間なんてそんなものだ。冷たいし、汚い。

「でも、ミチルの家族なんでしょう？ アンタの子供なんでしょう！」

「家族だからこそ、満がそんな目で見られるのが嫌なんじゃないの！」

「……………」

「それにね、家族だからこそ満のことは知っている。いい子よ。だからこそ、満の為に転校させると決めました。その何処がいけないのかしら」

妖怪は母親なのだ。ずっとミチルを捨てたと思っていた。でも、本音では母親だ。ミチルのことを思ってミチルの気持ちよりもミチルの為を考えて、ミチルの先を思ってる親の言葉。それは重みがあったて私には衝撃だった。

「……………」なら、何で一度も学校に面会に来ないのよ。ミチルは寂しがっていた！」

何故、迎えにこないのか。ずっと妖怪を駐車場で待つミチルを母親が知らない訳はない。

「満は十八になった。もう立派な大人です。いずれは親のあたしが先に死ぬ。いつまでも自立できないのでは困ります」

ああ、負けた、と思った。

ミチルのことを蔑ろにし、厄介者扱いする親なら私は容赦なく戦えた。いや、以前の私ならどんな善人でも敵と見なしたら戦えただろう。でも、今では少々以前とは異なるのだ。感情が、ミチルの母親の考えていることが理解できてしまうから。ミチルの為、誰かの為を思つて言っているのだと理解できてしまったから、たつた今、理解できてしまったから。

「お母さんって、凄いな」

「あなたのお母さんになつたつもりはありません」

断固として言うミチルの母親。

別に、そういう意味で言つた訳じゃないのに。お母さん全般が凄いと思つたのよ。

母は私の後ろにいるミチルに手を差し伸べる。私は素直にどこうとして、しかし、ミチルが私から離れようとしなかった。服が引つ張られる。ミチルだ。後ろを振り向くとミチルはいなかった。

「？……………私はミチルを探す。姿を見つけると、」  
「ッ！」

我が目を疑つた。

「満！」

ミチルの母親が叫んだ。あまりの予想外な行動に私は言葉も出ず、何も考えられなかった。常に思考を続ける頭を一時的に停止させ、我武者羅に脇目も振らずミチルに走る。ミチルはあの三階から一階まで直通で行ける、便利な大穴に右足を片方だけ突っ込んだ状況だ。一体何が目的で大穴に足を突っ込んでいるかは理解不能だが、一刻も早く止めさせねばミチルはひーちゃんの二の舞になるだろう。

落ちたら最後、ぐしゃ、だ。

私は一直線にミチルを目指した。

何故かは知らない。ただ、ミチルを私の心が欲するのだ。欲し、掴みたい。ミチルを。

何故かは分らない。でも、この気持ちはどうしようもなく、熱く私の心を焦がすのだ。

あと、三步……。

私は足に力を込める。まだ、ミチルは飛び降りていない。大丈夫。間に合う。

あと、二歩……。

更に、走る。ミチルは私を見ようとししないで、大穴の下ばかり見ている。やばい。

あと、一歩　、という所でミチルの左足が大穴に吸い込まれていくのが見えた。躊躇はしなかった。

私は、あと“二歩”、踏み込んだ。

「ミチル！」

大穴に吸い込まれながら、私はミチルの手を何とか握る。浮遊感がした。訳が分からない。何が起きているのか考える暇はなく、生命の危機だけは感じた。無骨なコンクリート壁が見える。凹凸のある灰色のコンクリート壁に手の皮膚が破られ、激痛を感じる。落ちている。何の音もしない。悲鳴もでなかった。競りあがってくるのは胸からの恐怖だけ。

ミチルは何処にいるの。

そこで、停止していた思考が一気に爆発した。

まさか、もう死んだの？

その考えを即刻否定する。死後の世界などけて存在しないというのが私の持論だ。死んでしまえば何もかも終わり。死ぬという意識すらもなくなり、私という存在すらも自分では認識できないのだと思う。きつと眠っている状態が一番近いのではないだろうかと思う。ならば、ここは何処か。答えは簡単だ。まだ、落ちているのだ。大穴から地上までの間であり、ミチルの姿が見えないだけなのだ。一緒にこれから死ぬのだろう。

私は自嘲した。

中曽根工ミの最後がこんな結末とは誰も想像できないに違いない。独りで自殺はしても心中は私の性格上考えられないだろう。それに駆け落ちした末路がそれとは、笑える。

駆け落ちのクライマックスは、崖と決まっているものね。

今回は大穴であるが。

くすつと笑った瞬間、

ぱりっという音がした。

で、どすん、と腹に衝撃がきた。息が止まり、真っ暗になった。

そして。

あれ？

と、思った。

何故か、あまり、痛くない。

というより、三階から落ちたら痛いくらいでは済まないのではないだろうか。恐らく、三階の高さといえは約六mから七mくらいで、そこから落ちた際の衝撃はそうとうなものになるはずだ。地球には重力というものがあり、どんな物体でもその重力を受けている。そして、その重力の大きさは物体の質量に比例している。現在の状況ではミチルの体重＋私の体重に比例していることになる。つまり、物質の質量である重さが大きければ大きい程、重力は大きくなるということ。それだけを考えても衝撃は相当なものはずだ。

それなのに、体の何処にも痛みを感じないし、どうやら私は助かったらしいのだ。

横たえていた体を起こしながら、思う。

何が、どうなってるの？

訳が分からず、非論理的な現象に対して私は首を傾げて、思考する。

まさかだがミチルを私の落下の下敷きにしたために、私は無傷だったのではないかと考えてミチルを探す。下を見る。もちろんミチルの姿はなくほつとしたのだが、不自然なこの場にそぐわないものを見つけ、不審に思い、それに触れる。もこもこしている。どうやら布のようだった。学校の体育館にあるマットのようだった。

「？」

何でこんなものが、態々ここに測ったように置いてあるのだろうか

か。

まるで、この場所に人が落ちてくるのを見越して置いたようだった。

と、ミチルの姿を見つけて、そちらに行こうとマットから立ち上がる。

まだはつきりしない頭でふらふらと、ミチルに向かっていくと、岡崎がいるのが見えた。

「やあ、ご機嫌だね。エミちゃん」

「？ ？ ？」

何故、ここに岡崎がいるのだ？

疑問符が私の頭を埋め尽くした。

## 【最終話】

私は今、学校にいる。

理由はただ私がどうしようもなく優秀な学生だからであり、学生は毎日学校に行くものだからである。私は今、私の高校である有名進学校の門を独り潜る。

\* \* \*

### 後日談。

「やあ、ご機嫌だね。エミちゃん」

そう岡崎は言った。私はまじまじと岡崎の顔を凝視し、何故この場所にまるで私とミチルを待っていたかのように岡崎が立っているのかを考え、そして結論に至った。

「騙したの？」

岡崎がにたりと笑ったので、それだけで答えは知れた。何をどう騙したのかは検討がつかないが、とにかく岡崎は何かをして私とミチルがあの大穴から飛び降りるよう仕組んだのだ。

「話が早くて助かるよ。君とミチル君が落ちてきた大穴だけだね、アレが嘘なんだよ」

嘘？

私は首を傾げる。あの大穴は少なくとも建物の三階分くらいの高さはあったように思う。

しかし、私とミチルは無傷。

「つまりね、あの大穴こそがイミテーションなんだよ」

イミテーション？

\* \* \*

私は学校の門を潜って更に学校の奥深くへと進む。すると、生徒達が集団となつて談話している箇所を見つけ、ふいに足を止めた。目を細める。確かあの場所は、掲示板のはずだ。

\* \* \*

#### 後日談。

岡崎の言葉に私は一旦落ち着いて、自分のいる場所を観察してみた。もちろん私のいる場所は小汚い体育用マットの上。ミチルは岡崎の腰。私やミチルのいるのは屋外でなく教室の一つのようで、白い壁に時計、それから少量の机や椅子などが乱雑に置かれていた。

そして、問題の大穴を見上げる。

頭上にはぽっかりとコンクリートを虫食う大穴。だが、先ほど上から見たときとは微妙に印象が異なり、下から見上げる格好では随分とその距離感が違う。上から見下げたときには少なくとも六メートルあると思ったその高さが、下から見るとその半分以上。二メートルかもしれない。

「分らないわ。どうなっているの？」

素直に降参すると、岡崎は床に散らばっていた紙を一枚拾い上げて私に渡した。

「それはミチル君の描いた“絵”なんだ。一時期ミチル君は、そういった騙し絵みたいのに嵌りに嵌ってたね。描いては、悪戯でそこいらじゅうに、それこそ学校中にはつつけては、教職員を泣かせていたんだよ。なまじ絵が上手いから、そりゃあもう迷惑でねー。あのヒーちゃんも騙されてこの大穴から飛び降りたんだよ。自殺するために」

凄いでしょ、と得意げに岡崎が付け加える。

そうか、と思った。私は岡崎に騙されたのではなく、この大穴からは飛び降りて平気だと知っていたミチルに騙されたのかと。何て紛らわしい。ごあつと怒りと恥で顔が赤くなるのを感じた。



しかし、これでも尚、終わらない。

「そうそう、ミチル君のお母さんね、ミチル君をこの『高見養護学校』から転校させないって。君の勇姿を見たら納得してくれたらしいよ。良かったね、これで晴れて結婚だね」

「　　はあ？　何を言ってるのよ。ミチルのお母さんはさつき、あの穴の上で見たけど、でも、ミチルをこの学校に残すかどうかは、まだ訊いてみないことには分らないでしょ？」

「　　いいや。ミチル君のお母さんは承諾してくれたはずだよ。ミチル君と君の関係を説明したらね、ミチル君のお母さんは君のことが信じられないって言うから、とある教室に危険のない穴があつて、そこに君ら二人がいるかもしれないと伝えたんだ。で、お母さんがその教室に行ったら、多分ミチル君はその危険かもしれない穴に飛び降りるかもしれない。……とも伝えたんだ。そして、危険じゃない穴というのを知らないエミちゃんが、ミチル君の身を案じて、飛び降りていたらエミちゃんの愛は本物ですよ、とこんな感じの説明を、ミチル君のお母さんにしたんだよ。で、その穴からエミ君がミチル君の身を案じて飛び降りた暁には、晴れてミチル君は『高見養護学校』にいても構わないと約束してくれたんだよ」

「……………」

長い、岡崎の説明を私の脳が理解するまで、少々の時間を要した。そして、矛盾というか、納得できない部分が生じてきたので、そのまま質問する。

「ちよつと、待つて。岡崎は今、ミチルと私の関係を、えーと……、ミチル母に言つたのよね？」

「そうだよ？」と岡崎。

「それで何で、ミチルのお母さんが息子をこの学校残すという結論に達するのか理解できないわ。全然、筋が通ってないじゃないの」

ミチル母は、近所の目が恐くなりこの『高見養護学校』にミチルを預けた。そして今回、ひーちゃんという女の子が自殺を図ったので、そのことで近所の噂が『自殺した子と同じ学校に通っているミ

チル君』となる前に、別の学校へと転校させようと思い立った。

それなのに、『高見養護高等学校』に、たった一人女の私という知り合いがいるからといって、転校を取りやめるかと言えば、答えは否だろう。取りやめる理由にはならない。

「岡崎、まだ、私に話していないことがあるでしょう？」

「あ、いやー……。別に何も無いよ？」

「ふい、と岡崎が私から視線を逸らす。

「言いなさいっ」

「別に嘘は言っていないからね。ただ、僕は、エミ君の本名を告げて、ミチル君に好意を持っていて、超エリート進学校に通っていて、それで将来はとっても有望でもしかしたら医者にもなれるしミチル君の為に高収入の仕事をゲットできる。……。かもしれない、言っただけだからね？」

「……………」

「おーかーざーきー」。

「そんなの、詐欺と一緒にじゃないの！ 私、ミチルのために高収入の仕事に就職する気なんかないわよッ！」

「いいだよ、別に嘘っぽいこと言っただけなんだから。違法じゃないし。こんなんで警察に捕まるようなら、世の中の大人は全員刑務所だよ」

「……………」

と、そうしてミチルは『高見養護高等養護学校』に残ることになった。

いくらかの嘘を交えて……。

\* \* \*

私は超エリート進学校の校門を潜り、学生の人だかりまで来て、掲示板を覗こうとそちらに向かう。最近の私は学校で村八分にされ

ている。ので、掲示板に行っても恐らく嫌がらせで皆は私が見るのを邪魔してくるだろうと覚悟して行った。

しかし、どういう訳なのか、私が傍まで行くと皆は一斉に脇にそれ、道を譲った。

「？」

何だ？、と妙に思いつつも、掲示板まで辿り着く。すると、その理由が分かった。

掲示板には一枚の張り紙があつて、内容はこう書かれてあつた。

【道端で違法行為をした学生、八人を退学とする。彼ら八人は路上で麻薬等の違法なる薬物に手を出していた所を警察に補導されました。この事実を皆さんも重大に受け止め、絶対に麻薬、シンナー、覚せい剤等の違法薬物には手を出さないよう、厳重に注意するようにしてください。退学する学生は以下、八人である】

私は直ぐに、八人の名前を黙読した。

【高村哲、河本藍、渡辺真美、小山明人、阿東沙希、鈴木香織、小林詠美、冴島真央】

これって……。

それ等全ての名前は、私と敵対していた人間のものだった。藍は綾香と私を裏切り、独りでこの学校の秘密を持ち逃げした憎き女だし、高村とかいう男子生徒は綾香を絞め殺そうとした暴力男だ。また、渡辺真美や鈴木香織、小林詠美等も同様に私のことを先導して虐めた生徒達だった。それが今日突如、学校に来てみれば、この有様だ。

幾らなんでも、タイミングが良すぎる。

この突然の知らせに作為を感じるのは私だけだろうか。何かの力を感じるように思えるのだ。

それも良く知っている感じの。

「エミ、ちよつと顔かしな」

粗野な声の持ち主は、私の友達である綾香だった。声のした方向を見て、私は嫌な予感に囚われる。なぜならば、綾香が“あの”歪

んだ笑みを浮かべて、中指をちよいちよいと動かして自信満々で立っていたからだ。こんな笑みを浮かべているときの綾香をけして侮ってはいけない。歪んだ下品な笑みを浮かべている綾香は、本当にとんでもないことを平気でやる。

「何よ綾香。何か用なの？」

「いーから、ちよつとこつちに来いって。ここじゃ話にくいことなんだよ」

す、と眉を顰める。不穏な空気がその場に立ち込める。

いつまでも私がこの場から動かないのを見て、綾香は強引にいーからいーから、と私の腕を引っ張って人気のない廊下へと連れて行った。

「それで、何なのよ」

「おいおい、それが恩人である、あたしに言う言葉かあ？」

恩人。

私は綾香に対して、情けをかけてもらった覚えはなかったので、眉間に皺を寄せた。

すると、綾香はつち、と舌打ちしてから自信満々で言ってきた。

「聞いて驚けッ。お前、この間戸波先輩に会ったんだってな。その時に善良な先輩にとりついてる悪霊みたいな麻薬女がいたの、覚えてるか？」

悪霊みたいな麻薬女。確かにいた気がする。ショッピングモールの裏路地で戸波先輩と一緒にいた女のことだろう。その女は私の前で嘔吐したばかりか、この私に麻薬を勧めてきた莫迦女だ。おまけに優しく介護する戸波先輩を振り払ったクソ女だ。

「覚えているわ。最低の女よね。あんな女、戸波先輩もさっさと縁を切れればいいのに」

「ああ。実は戸波先輩もその麻薬女を持て余していたらしんだよ。で、あたしが藍の暴拳を戸波先輩に相談したら、何と戸波先輩は物凄い作戦を思いつき、あたしと実行したんだ。それが、今回の八人退学事件の全貌だ」

「……嘘でしょ」

「嘘じゃないよ。まず、戸波先輩が後輩に麻薬を欲しているらしい高校生がいると麻薬女に言ったらしい。で、あたしが藍とかにゴマすりして何とか内部に入って、麻薬がいかに素晴らしいものを説明する。まー、現代の医学では依存症もほとんどなく、ただ気分のいいものみたいな説明をして焚きつけたんだな」

「……嘘だらけじゃないの。依存症はあるわよ」

「わーってるよ。そんなこと。ただ、ヤツ等は莫迦だからニュースも新聞も読んじやないから、適当なこと言ってるや信じるんだよ。で、あたしがヤツ等を焚きつけたところに携帯でー〇〇と押す。そして、現行犯で麻薬女も藍達も補導。見事にハッピーエンドだし、信じられない。」

暫く、何も言葉が出てこなかった。目の前の綾香を信じられないものでも見るように凝視してから、ずるずるとその場に座り込む。

綾香を見上げる。そして、言った。

「綾香、あなたって最高ねっ！」

「だろ？ その言葉が聞きたかったぞ、エミ」

綾香が手を差し伸べ、お互いに手を握り締め、その手に体重をかけて立ち上がる。

「でも、ちよつとやりすぎなんじゃないの。退学なんて」

「あれくらいで丁度いいんだよ。ヤツ等、あたしが注意しても、無視してずっと万引き続けてたんだからな。いい薬になったんじゃないのかあ、これでえ」

万引き。

その言葉に血の気が引いた。何てことだ、と思った。真のリーダーが、メンバー達が万引きを犯している事実をずっと知らなかったなんて大失態だ。慌てて綾香を見る。

「気にすんなよ、全部藍達の自業自得なんだからな」

「……綾香、あなたって最高よ、ほんとッ」

「その言葉が聞きたかったんだよな、エミ」

どうやら、私達はずっと友達でいられるらしい。

「おい、エミ。所で、あたし等は何処に向かつてるんだ？」

「教室に決まってるでしょ。まだ、用事があるのよ。サボリ教室には行けないわ」

不服そうな声が隣から漏れた。これから綾香は自主休校する気満々であつたようだ。

でも、まだ私には用事が残っているので、付き合ってもらわねばならない。

聡子、という大事な用事が残っているのだから。

\* \* \*

教室の引き戸をがららら、と勢いよく開け放つ。中にいる民草どもが私の顔を見るなり、一斉に顔色を変えた。ああ気持ちいい。

私は割と恨みは忘れないほうである。後で仕返してやるのを心に誓い、真っ先に聡子の机へと向かった。教室中には私と綾香の靴音だけが響き、他には何の雑音はしない。実に静かだった。こつんかつんと上履きを鳴り響かせながら、聡子の机の前まで来た。

聡子を見る。

聡子は憔悴しきっている様子だった。綾香の話によると、警察が補導した現場に聡子もいたらしいのだが、薬には一切手を出さず、むしろ藍達を止める立場に回つたようで、お咎めなしとなつたらしい。しかし、それでも多少ショックを受けたのか、目に隈ができていて肌もぼろぼろだった。そして顔に大きな青痣ができていた。恐らく、親にでも殴られたのだろうと予測する。

「聡子」

ピクンと、聡子の二つの尾っぽが反応し、小刻みに揺れる。

「顔、かしてくれる？」

その瞬間、二つの尾っぽが飛び跳ねて、揺れた。

\* \* \*

私はサボリ教室に向かった。後ろについてくるのは二人の人間。綾香と聡子だ。綾香は実に面白そうに、にやにやしながら聡子の後ろで傍観している。聡子は実に怯えて、今にも泣き出しそうだった。まるで養豚場の屠殺前の豚だ。そんな聡子の様子を横目で盗み見て、くすりと私は笑った。

サボリ教室の前まできるとポケットに手をやり、鍵は藍達に奪われてしまったのを思い出して思い切り不機嫌になる。

「綾香、秘密道具は回収したんでしょね。秘密も一緒に消えましてじゃ大間抜けよ」

「間抜けとか言っちなよなあ。ちゃんと、藍がラリッてる時に鍵も全部回収したよ！ほんと、エミって無意味に偉そうだよな。ったく」

ほらよ、と綾香が私にサボリ教室の合鍵を手渡す。私はそれを受け取って、サボリ教室の鍵穴に差し込んだ。勢いよくサボリ教室の扉を開けて、思い切り眉を顰める。

「まずは掃除ね」

「げ」

綾香が不満を漏らす。

中は混沌としていた。藍達が相当乱暴に使用したらしく、お菓子の食べかすは散らばっているし、埃でもうもうとしているし、何だか意味不明な玩具は増えているしで、もう掃除をするしかなさそうだった。中の様子を見た綾香も、流石に汚いと判断したのか黙々とゴミを集め始める。そこで呆然と戸口に立っている聡子に向けて、言う。

「聡子、さっさとアンタも掃除しなさいよ！」

「え、う、うん！」

慌てて周辺のゴミを聡子は拾い出した。

「聡子、私のグループはね、トロい奴はお断りなのよ。だから、今度トロいことやったら、グループからは除名するからね。いいわね

「！」

「う、うん！……え？　それって、私がエミちゃんのグループに入るってことなの？」

「トロいッ！　そういう意味に決まってるでしょ。さっさと掃除するっ」

は、はい、と聡子は床に散らばった食べかすをわしわし掻き集めた。

私も掃除を再開する。綾香と目が合い、何か言いたいような目で私を見てくるので、

「何よ、言いたいことがあるなら、さっさと言いなさいよ」

「いやあ、天下の中曽根エミさんに、一体どつという心境の変化があったのかと思つてね」

「別に何も無いわよ」

そうかよ、と適当に綾香が返答するので、むっとして言い返す。

「私は最初から優しいのよ。何も変わってないわ」

「何処が優しいんだよ」

「私も綾香ちゃんに賛成だよ」

聡子までもがそんなことを言うので、少々私の人格は以前とは変わったのかもしれないと思つた。そんな微妙な変化を齎したのは、誰であるうミチルの存在だと思う。

\* \* \*

#### 後日談。

岡崎の言う通りに、本当にミチルの母親、妖怪は引き下がったよ  
うで私が大穴の下にある汚れた教室から出て行ったときには、既に  
姿は消えていた。外で待つていた私の母親も何時の間にか先に独り  
で家に帰つたらしく、そこに残された大量の荷物を見て絶句する。

怪物は何を思つたか、ショッピングモールで買った荷物の大半を  
『高見養護高等学校』に放置していったらしい。私の暴挙に対する



無言の圧力なのか、それとも単に忘れていったのかは知らないが、どちらにせよ私はこれ等の荷物を独りで持つて帰らねばならぬらしい。その惨めな様子を想像するだけでも、最悪の気分になる。

「それにしても岡崎、いいの？」

「何がだい？」

「ミチルのお母さんよ。ミチルのお母さんは別にミチルが嫌で放っておいている訳じゃないって岡崎だって本当は分かっているのでしょう？　なのに、あんな悪者みたいにしちゃって」

実際、ミチルの母親は私の嘘の経歴を聞き、ミチルを『高見養護学校』に続けさせるのに納得したのだ。そして、ミチルの母親はミチルのために思つて行動している。それを岡崎はミチルの母親よりも私のほうを優先させた。どうにも岡崎らしくない。

「だって、僕。ミチル君のお母さん嫌いだもん」

「嫌いって……」

それだけの理由なのか。子どもじゃないのだから。

「前にも言ったけど、施設に預けようと預けなかつたら、その子に会つのは自由だよ。それでも会いにこないのは忙しいからとか理由をつけて会いにこないんだから、やっぱり大人の都合だろ。そういうの、僕は嫌いだね。それならエミちゃんというほうがまだ将来性があつて」

「それ以上は言わなくていいわ」

呆れた溜息を漏らすと、今まで岡崎の腰にヤモリの如く張りついてたミチルがてててと私の方に走りよつてきて、今度は私の腰に張りついた。

「ミチル、私はもう帰らなきゃ」

離してくれと仄めかしたつもりだったのだが、ミチルの腕に力がかもり、腹が圧迫される。

「ミチル、苦しい」

非難してやったのだが、ミチルは鼈よりもしつこいのは実証済みだ。もしかしたら、暫く離さない気なのではないかと心配になるも、

す、とミチルの腕が腹の辺りから外れる。

「あのね、エミ……」

ミチルの話を小耳に聞きながら、私は怪物の残した大量の紙袋を持ち上げた。

かさこそと紙袋やビニール袋が揺れ動き、その重さは大したものではなかったが、嵩張って仕方がない。先ほどミチルの顔を拭いた悪趣味な柄シャツはここに置いていくことに決めた。柄シャツは今頃、大穴部屋に捨て置かれていることだろう。私はシャツの存在は敢えて無視して帰ることにした。背後を振り返る。ミチルが何かを言いかけていた気がする。ミチルの唇が動くのを待つ。ミチルは質問に答えるのも、会話をするのも酷く遅いときがあるのだ。忍耐が肝心である。

と、ミチルがにへら、と笑いながら言った。

「あのね、ボク、エミが一番好き」

そう、ミチルは質問に対して、酷く答えるのが遅いのだ。そして、私は大穴部屋で一つの質問をミチルにしていた。思い出す。

『ねえ、ミチル。私は好き？』

その、質問の答えは……………。

見ていた岡崎は、にやにやしながらこう言った。

「これから大変だよ、エミちゃん。ミチル君は鼈よりもしつこいからね。絶対離さないよ」

どっかのストーカーよりも悪質だからね、とも言った。それはちよつと困る。

でも。

これからは毎日、ミチルに会いに行こう。

毎日でなくとも、出来るだけ会いにこよう。

ミチルは私にとっての、一番の快樂。

一度会えば、止められない、最高の麻薬。

それが良いのか悪いのかは知らないし、また、興味もない。

この気持ちは止められないところまできている。別にいいじゃないか。この恋が破滅への直通便であつたとしても、私は別に構わない。

もう、とにかく止められない。毒だと分かつていても、私は別に構わない。

既に私は、ミチルに中毒症状末期なのだから。

これからは、少しでも素直になろうと思った。

まずは、ミチルに自分の気持ちを伝えることから始めよう。

「あのね、私、ミチルが」

【完】

## 【最終話】

## （後書き）

完結いたしました。

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました。  
意見や感想等がありましたら、気軽に送ってください。大変励みになりますので。よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1101d/>

---

自閉中毒

2010年10月8日15時06分発行